



古事記日本之原理

淺野正恭著



始



特207
140

淺野正恭著

古事記日本の原理

(紀元二六〇〇年版)



閱歷風塵六十年
老來未忘報皇天
箇中有擲餘生地
撥釋三神造化篇

丙和癸未秋月孫齋作

書以生



はしがき

著者が古事記に關心を有するに至つたのは、可なり久しき以前のことである。が、初めはどこをどう解釋してよいか、全く五里霧中を彷徨する如き感あるを免れなかつた。兎角するうち、其の或る箇所は、科學の所説と合致する點あるに氣づき、最初の試みとして、『神の科學的研究一班』と題する一表を作成し、之を同好の士に頒ちて、其の批判を仰いだことがあつた、それは過ぐる大正九年のことである。

翌大正十年に至り、上記の表に或る註解を加へ、『古事記に據る宇宙創造概観』なる一小冊子を刊行したが、それは主として、高御産巢日神は、非物質的の働きを司どる神、神産巢日神は、物質的の働きを司どる神なることを論じたものであつた。勿論その説明は、今日にして顧みれば、不備の點少しとせないが、昭和三年に出版せる『科學より觀たる古事記』も、依然此の説を土臺として、之に宇麻志阿斯訶備比古遲神が、星雲時代に早くも發生せる生命素とも申すべき神なることを附け加へ、生命と生物とは自ら別あり、此の生命が、古事記一貫の原理なることを明らかにせんとせるものであつた。

以上の三原理を更に強調し、増補して、昭和七年、『古事記生命の原理』を刊行す。著者が此くも古事記の闡明に微力を致す所以のものは、如何にかして、それに含まれ居る眞の相すまを發見し、由つて以て、我國體に寄與するところあらんとする微衷に外ならないのである。それといふのは、古事記に含まるゝ眞の相を明らかにすることなしには、我國體も亦明らかにし得べきにあらずと、固く信じたからである。

其の後初版の意に満たざるところは、或は改訂し、或は増補して、之を再版に附し、乙夜の覽にも供し奉れるものなるが、元とより是れとて古事記の全貌を盡し得たなど、廣言し得る限りではない。が、古事記一貫の原理丈は、略々闡明し得たと信じつゝある。

著者が古事記に思ひを馳せたのは、既に二十年もの昔の事に屬する。茲に紀元二千六百年を記念して改めて本書を草し、その後も之に檢討を加へつゝあり、今後の研究も亦止むべきではないが、漸く老境種齡に傾けるを以て、本書が恐らく最後の決定版となることであらう。茲に改版に當り、本書の成れる由來を略述すること兩り。

昭和十六年十一月

著者誌

目次

序論 一

第一章 天地の初發 三

第二章 宇宙の組織 五

第三章 國土の固成 七

第四章 生物の生死 九

第五章 生物の發達 一〇

第六章 天然力の脅威 二五

第七章 天石屋戸隠れ 四九

第八章 皇位繼承并三種神器 六四

結論 九二

附録

答或問 一七

目次

古事記日本の原理

淺野 正 恭 著

序 論

本著書の目的とするところは、古事記を一貫して流るる生命の象相、並に其の發展の次第を窮極し、以て日本の原理を闡明せんとするに在る。之が爲には、近代發達せるところの自然科学を始め、其の他の學問を基本的に取り入れ、又時に訓詁の煩を敢てする場合もある。要は彼此相淬勵し、左右相檢覈して、努めて偏狹に陥るの弊を避け、以て古事記に含まれるところの、眞の相すなはを見誤るが如きことなからんを期す。併しながら、事の奥底に徹せんが爲、時として、極度に推理の歩を進める場合がないでもない。

古事記を一貫して流通するは、既に生命の象相、並に其の發展原理であるが、之を窮むることは、取りも直さず、天地人生の眞相を明らかにする所以である。而して我國體が、淵源を古事記

に發することは、古事記序文に記されある詔に、

斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。

とあるを見ても明らかである。即ち古事記を窮めて、我國體の由つて來るところを知り得るのである。或は又我國體を窮めて其の淵源に溯れば、天地人生の至理に通曉するとも謂ひ得る。是れ古事記が人生——少くとも、われ／＼日本人に取りて、須臾も離るべからざる寶典たる所以である。單に日本人のみに止まらず、それが又世界經典でもあるべきことは、本書の説を進めるに従ひ、自然に判明するであらうことを疑はない。

著者は私かに思ふ。眞の經典なるものは、天地の根源、并に其の生成發展の道を明らかにしたものであらねばならぬと。此の觀點よりすれば、古事記は幾ど他に類書を見ない。縱令類書ありと雖も、語つて詳なること、古事記の如きは絶無といつてよい。若し夫れ古事記が、謂ふ所の神話——お伽噺に過ぎないものであるならば、少くとも著者に在つては、無用の努力を之に拂ふが如きことはせなかつた筈である。

古事記が例の神話——お伽噺にあらざるが爲には、之に合理的の解釋を下し得ることを要する。爰に合理的といふは、或る程度迄ではあるが、科學的説明にも堪へ得べきことを意味する。

然るに科學なるものは、十九世紀より次第に發達せる、謂はゞ新興の學問なるを以て、古代の語り傳ひであるところの古事記を、此の新興科學の規矩に照らさんとする如きは、全くの見當外れ到底牽強附會の説たるを免れぬと難んずるものあるやも測られない。が、凡そ事物の眞實なるものは、時と所とを異にすることによつて、其の内容、本質を變ずるものにあらず、其の變ずるが如く見ゆるは、偶ま時と所とを異にして、序述表現の方式を異にするのみであることを知らねばならない。惟ふに科學なるものは、萬物の眞相を窮極せんとして、一步々前進を繼續せる學問なる以上、古事記の眞相を探窮せんが爲に、此の學問を藉りたればとて、少しの不合理も、矛盾も、撞着もあるべき筈がない。但し科學の取扱ひ得べき範圍にも、自ら或る限界があり、之を萬能視して、其の範圍以外のものは、之を拒否すといふ如きものではない。故に本書が科學に藉らんとするは、その限界内に於ての事であることを豫めお断りして置くものである。

ところで科學なるものは、實驗實證を基礎として築き上げられた學問であり、そこに動かすべからざる強味がある。然るに今日の實驗實證は、明日のそれによつて覆される場合も、往々にして之れ有るが、昨必ずしも非ならず、今日必ずしも是ならず、科學は斯くして其の前進を繼續しつゝあるのである。

一方に於て古事記は、縹渺たる天來の聲ともいふべきもので、時代々々の色彩を以て、可なり自由に彩らるべき含蓄を有し、科學の進歩發達如何等によつて左右されざる、或る本質を具へて居る。斯かるが故に、現代人は、現代人として到達し得たところの學問を驅使して、之に臨むことを妨げず、將來科學その他の學問が、更に進歩發達を遂げた曉に於ては、又其の進歩發達せるところの學問を以て之に臨んで、毫もその不可なるを見ない。斯くて古事記の眞價が、いよ／＼益々發揮さるゝならば、之に越したることはないのである。日本國體が儼存する限り、古事記は益々其の光輝を放つに至るであらうことは、著者の信じて疑はないところである。

さて自然科學なるものは、主として物質を對象とし、之を研究して發達せる學問なるが、その生物と關聯する部門に於て、全く訂正さるべき、重大な點あることが、更に新らしき心靈科學によつて指摘さるゝに至つた。われ／＼としては、此の事實をも看過することは出来ない。何となれば古事記は、此の心靈科學の樹立せる原則に據るにあらざれば、正しく解釋し得られぬ箇所が甚だ少なしとせないからである。例へば伊邪那岐命が、神避りませる伊邪那美命と別辭を交換さるる場面の如きは、心靈科學を以てすれば、何でもなき尋常事たるに過ぎないが、之を認めることをせないが最後、何とか迂遠な説明を用ゐねばならぬといふ類である。

本書は無論此の心靈科學をも採用するものなるが、此の學問は未だ一般普及の域に達して居らない。尤も學問の一般普及と否とが、その價値を軒輊するものにあらざること、從來も其の例に乏しからず、深く介意するにも當らないが、本書がその原理を取入れ、而してそれが未だ一般の認むるところとなつて居らぬに於ては、之に簡單な説明を加へて置くことも、本書に課せられたる一つの義務であるやう考へらるゝので、次に其の大意を述べることにする。

心靈科學の根本義は、生物なるものは、物質と生命との二元が融合せる、一つの組織體であるといふに在る。二元なるが故に、此の二元は各獨立しても存在し得るのである。即ち生物の組織體が、物質と生命との二つに分離すれば、その生物には死なる現象が起り、物質は物質として、物質科學の法則に支配され、生命は生命として、超物質界の存在となり、其の法則に支配さるゝに至るといふことである。此の事たるや、單なる觀念、若しくは空想などから生れた產物ではなくして、幾十年に亙り、苦心慘澹たる實驗を経て證明されたところの事實なるを以て、輕々に否認するが如き事柄ではない。否、極力研鑽されねばならぬ人生の重大案件なのである。

超物質界の存在となれる生命は、そこで永遠に向上進歩の途を辿るのであるが、此の事も數知れぬ程の事實によつて證明されて居る。而して此の生命は魂、靈、靈魂、心、思想、或は神等、

種々の名を以て呼ばれて居るが、實は一の超物質的存在——普通エーテル體と呼ばれつゝあるところのものに對し、觀點を異にする呼稱に過ぎないのである。

心靈科學の基本的原理は、上述の如く、生物は物質と生命とから成り、物質も生命も、共に永遠不滅に存続するものであるといふに盡きる。此の事實に基づき、幾多の學理をも導き來ることを得るが、それは自から別個の問題であるから、爰にそれを説くべきではなく、志ある人士の研究に一任して可なりとするものである。

上述の如く生命即魂、魂即心であるならば、心の本質を窮むるにあらざれば、生命なるもの諒解に達し得られぬこと言ふ迄もない。而して我國には、古來四魂の説なるものあつて、魂即心なることを語つて居る。四魂とは荒魂・和魂・幸魂・奇魂をいふ。本書既に生命の原理を窮めんとするに在る以上、生命即魂を検討することが、其の第一歩であるべきこと甚だ明らかである。而して魂即心なるが故に、四魂の解釋に入るに先だち、順序として、第一に心の本質なるものを考察することにする。

心——普通には智・情・意の三つから成るといはれるが、心の本質的要素は、實は智と情との二つを數へれば足るのである。その理由を述ぶるに先だち、此の二者に對して、定義的説明とも

いふべきものを加へて置く。即ち、

智とは事物の至理に通ずるところの叡智。

情とは油然湧き出づるところの純情。

を指すといふことである。故に見聞的知識・感情・慾念等は、暫らく此の考察から除外される。

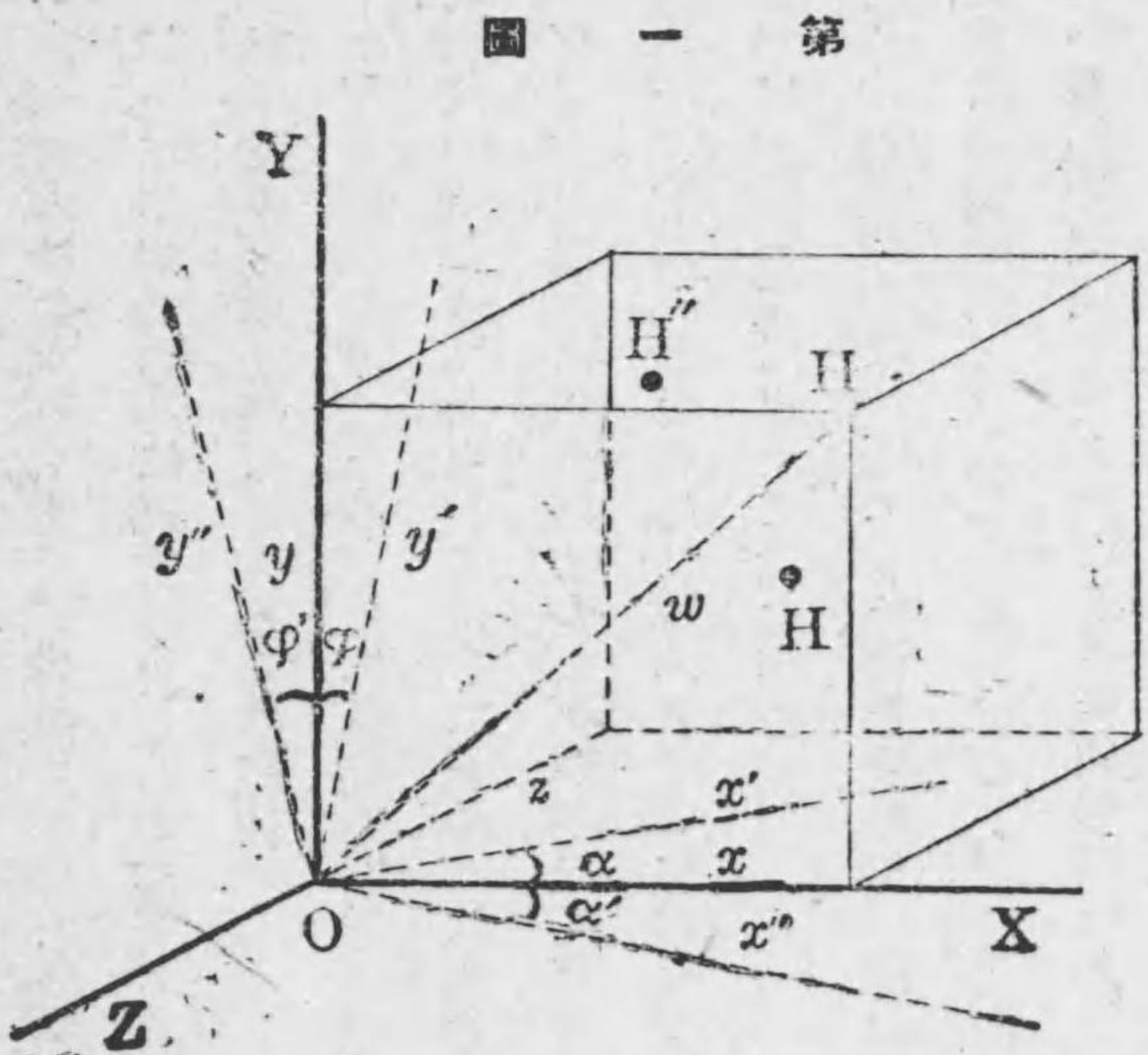
但し此の除外されたものも、後に至つては無論考察されなくてはならない。

更に、心は元來無形のものなるが、此の無形の心は、普通には、有形の肉體機關を通じて顯現される。故に心の考察を爲さんとするに當つては、此の肉體機關をも併せ考ふる方が便利である。以下此の便に従つて説を進める。

心の前提條件は、既に智と情とである。此の條件は、今のところまだ假定に過ぎないが、此の假定に肉體要素を取入れたものは智・情・體の三つとなる。此の三つの要素は、故に個人の本質的全人格を表現すと考ふることを得る筈である。而して體なる要素は、又力の顯現者なるが故に之を力として取扱ふことを妨げない。即ち個人の全人格は、智・情・力の合成によつて表現されと考へ得るのである。

既に三つの要素が與へられたならば、爰に立體的考察の條件が具備されたのである。故に之に

幾何學的考察を施すことも可能であり、又さうすることも妨げない。以下幾何學的考察を試みることとし、由つて以て、心は智と情との二要素の合成であることを示さう。



幾何學的考察には、相正交する三箇の座標軸XYZを設け、上記の三要素を、普通の如く、各軸上の價值 x, y, z とし、其の相乗積たる $x \cdot y \cdot z$ を以て、人格の總量を示さうとするのである。而して智は其の性質上、横軸X上の値 x とするを至當とし、情は智と全く性質を異にし、枉げざることを以てその本領とするが故に、之を縦軸Y上の値 y とし、力は之を斜軸Z上の値 z とすれば、爰に一立方體を畫き得る。而して此等 x, y, z は、何れも便宜數價を以て示さるゝことになるが、それは恰も材質異なるところの物品が、一樣に貨幣價值

を以て現はさるゝが如きものである。若し此等數價が、 x, y, z の何れに屬するかを知らんとするならば、第一圖の如きものを作製すれば一目瞭然たることを得るであらう。

尙此の x, y, z につき考へねばならぬことは、此等が常に動搖増減しつゝあるといふことである。即ち心も體力も、何時も一定不變のものにあらずして、量も質も不斷に變化しつゝあるといふことである。但し變化しつゝありとはいへ、各個人に在つては、自から限られたる範圍があることも亦事實である。それ故に、數學的價值としては、或る瞬時に於ける x, y, z とするか、或は其の範圍内の平均價とするか、何れでも差支ない。斯の如くして x, y, z の數價を定め得たならば、心 x, y, z の所在點として、圖上にH點を印し得べく、 z の値と併せ、爰に一立方體を畫き得ること前に述べた通りである。

智と情との増減従つて心の變化如何などに關せず、心が或る方向を取るとき、此の心を稱して意といふ。其の意向が或る時間内一定して動くことなければ、其の意を稱して念といふ。而して意念の數的價值は、智と情との價值如何に繋り、求むる意念の値を w とせば、 w は數學式 $w = \sqrt{x^2 + y^2}$ によつて算出し得られる。

意は此の式の示す通り、智と情との合成以外の何物でもなく、従つて心の組成要素として、智

情以外に意を數ふの要なきことを知り得る。前に心は智と情との合成であるとの假定の下に説を進めて來たが、爰に此の假定は肯定されて然るべきものとなつた。

體は上述の如く力の顯現者であるが、此の力なるものは、實は、體と意との相對から生じ、意あれども體之に伴ふにあらざれば、力として現はるることなく、又體あれども意之に加はるにあらざれば生ける木偶にも等しいのである。故に人の事物を實行する力は、必ず意と體との相對を要し、之を例の數學式にて示すならば、 w, z となるのである。而して其の力の顯現の結果が、正邪善惡の別となるは、一に w の正邪善惡如何により、 $+$ は之に與からない。そこで前の數學式は、正しくは、 $z = |w| + |x| + |y|$ であるべきであつた。此の $(+)$ 符は正善、 $(-)$ 符は邪惡を示すとせば、數學式にても、或る概念丈は把握し得られるであらう。

此の w, z によつて示さるゝ實行の力は、別に勇とも稱し得られる。而して情の至純なるを仁とせば、 x, y, z は直ちに智・仁・勇の三徳を表示すと考ふることを得るであらう。是に於て、如何なる人と雖も x, y, z の所持者ならざるはなく、換言すれば、智仁勇の三徳具備者ならざるはない。唯其の質と量とに大小・高下・正邪等、無限の差等あるが爲、人類は暗愚より聖賢に至る迄、雜然たる顯現となつてゐる迄である。

以上の考察に基き、爰に甲乙丙丁の四例を設け、其の各に數價を配當して、一つの參考に供することゝしよう。但し平凡人の數價を五十、理想人を百と假定して算出せるものである。

	x	y	z	$x \cdot y \cdot z$	w	$w \cdot z$
甲	九〇	九〇	九〇	七二、九〇〇	二七・三	一、四七
乙	五〇	五〇	五〇	一二、五〇〇	七〇・七	三、五二五
丙	九五	八〇	八五	六四、六〇〇	二二・九	一、〇五二
丁	八〇	九五	八五	六四、六〇〇	二二・九	一、〇五二

〔註〕 普通に數の位取りは、西洋流の三位を使用するが、千萬億兆と數へる我國にては、四位に分つて便利である。故に右の例は之による。(以下之に倣ふ。)

此の四例中、乙は所謂平凡人で、其の價值最も低く、甲は偉大なる平凡人ともいふべきもので是れといふ特徴なきも、何れの點に於ても優れた、所謂擗の大きい人である。一見茫漠たる觀なきにあらざるも、其の人格總量は、平凡人の五、六倍にも達する程である。丙は智に於て勝れ、丁は情熱に高く、何れも有用の材たるを失はないが、その人格總量は、何れも甲に及ばざるが故に、自から甲の下風に立たざるを得ないであらう。而して丙の意線は、横軸に傾き居るを以て、圖上からの觀察によつても、其の意思餘り強固ならず、之に反して、丁の意線は縦軸に近く、意

思極めて強固であることが窺はれる。而して前者は薄つべら、後者は偏狭の弊に陥る傾向となる。之を要するに意思の強弱は、智と情との何れかが勝れてゐるかを知れば、大體の判断を下して誤らぬことを得るであらう。

さて上述の考察は、智は叡智、情は至情として取扱ひ、見聞的知識・感情・慾念等は、暫らく除外せるものであるが、人に生ある限り、實際の生活面中には、此等が相綜錯して織込まれ來るを常とする。それ故に、此等のものをも併せ考へねばならぬ。而して此等相綜錯せるものは、本來の至智至情を、大小多少歪曲せしむる結果となるものにして、そこに人生修練の意義があり、従つて向上向下の分岐ともなる譯である。が、今はその點に觸れるべきでないから、引續いて、幾何學的方面からの觀察を進めることにする。

歪曲されたところの智と情とを圖上に示すならば、 α が正しく各軸上に在ることなく、 $\alpha\phi$ の角度を以て、各軸周を廻轉するところの α' 、 α'' 、 α''' 、 α'''' ……となることである。其の結果、正しき心の所在點Hは、 H' 、 H'' ……等に轉移し、正常の心は其の平衡を失ふに至るのである。斯の如くして、中には知識あるも叡智に缺け、慾望ありて純情の閃きなきもの等、千様萬態の心を發現することになる。さうなつては、最早數學式などの解き得る問題ではなくなつて了ふ。唯數學的

方面の解釋により、心は智と情との二者の合成であることが最も明らかにされたことを覚え、此の考察の徒勞ならざりしに満足するものである。

心は既に智と情との合成である。然らばそれが四魂と如何なる關係になるか？ 是れが次に攻究さるべき問題である。

四魂中奇魂は智、幸魂は情、荒魂は勇又は肉體をいふといはる。その説明如何は暫らく之を描き、此の説は上述幾何學的考察とも一致するを以て、差當り問題にせずともよいであらう。唯和魂のみは、從來の解釋にも、首肯するに足るものなく、又幾何學的圖面にも説明されて居らない。然るに此の和魂なるものは、人生問題に絶大な關係を有し、その正しき認識と否とは、人生の正しき認識と否とを決定すといつても可なる程である。由つて次に、各方面から仔細に之に検討を加へることにしよう。

先づ第一に、和魂なる言葉には、如何なる意義が含まれて居るかといふことである。以下順を追うて之を述べる。

第一義——ニギに和なる文字を配してあることは、最も當を得たものである。和とは柔にして精なることの意味であるが、それは剛にして粗なるものに對する比較である。然るに此の比較は

四魂の中に於ての事であるから、粗剛なる魂の何であるかを、先づ決定しなくてはならぬ。が、粗剛なる魂が荒魂であるべきことは、恐らく説明を要せない。尙此のアラが粗剛を意味すると同時に、又現なることをも示す。現とは現體——肉體であることを語り、又あら／＼しき意味の勇を意味すとも考へられる。更にアラには、新の意味も含まる。新たな魂は、新たな肉體と共に發生するからである。が、此の件については、便宜附録に於て解釋を施すこととし、爰では、荒魂は單に肉體のみを意味すと心得ても、事は足りるのである。而して和魂なるものは、肉體の細胞組織を粗剛とする程の柔妙精巧なる魂であることを示す。既に之を魂といふ以上は、何れも或る實相を指していふものなることも亦甚だ明らかである。

第二義——ニギはニゴリと語源を同じうし、濁りとは、是れ亦清らか、澄むなどに對する比較で、四魂中之に比較さるべきは、奇・幸兩魂あるのみなること言ふ迄もない、それ故に和魂の本體・本質なるものは、荒魂の肉體組織と比較すれば柔精、奇・幸兩魂と比較すれば、濁濁せる魂であることを語つて居る。

濁濁せる魂といふことを知らんが爲には、心靈科學に聽くの要がある。心靈科學の告ぐるところによれば、人死すれば、其の魂は肉體より離脱——といふよりは、魂が肉體より離脱するから死なる現象が起るといふ方が當つて居る。何れにしても、肉體から離脱せるところの魂は、所謂靈魂であるが、その靈魂の體質なるものは、やゝ濁濁不透明、半物質的ともいふべき存在で、此の事は既に科學的證明を経たところの、立派な事實であるが故に、之を承認せなければならぬ。而して其の濁濁の甚だしきものは、普通肉眼にも認め得らるゝところの、所謂幽靈ともなる要するに和魂とは、濁れる魂體といふことであり、西洋ではアストラル・ボテイなど稱して居るが、本書では之を幽體と呼稱することに定める。此の幽體なる語は、ニゴリを意味する、ニゴリの本體を指していふ場合に使用することに決めて置く。

凡そ魂といひ、靈魂といふも、それ自體が既に意識的存在で、魂即ち心である。故に和魂とは、取りも直さず、不透明な濁れる心といふことに外ならない。然らば濁れる心とは如何？、是れには佛家でいふ所の、煩惱なる言葉を使用するのが、最も適當するやうである。煩惱とは情慾願望・瞋恚・愚痴等をいひ、心の濁りは煩惱より生じ、煩惱は心の濁りその物で、二者は名を異にするところの同一物である。但し同じく心の濁りといふも、それには濃淡の差もあり、色彩も同じからず、従つて煩惱も亦各人同様といふ譯には行かない。

第三義——ニギには又和熟・媒介といった意義がある。此の言葉の意味するところは、粗剛な

る細胞組織と、清澄なる心——奇・幸兩魂との仲介をなし、之を和熟融合せしむる媒体であると
いふことである。惟ふにわれ／＼人類は、煩惱の媒介なくしては、生を享受すること能はず。既
に生を享受すれば煩惱なきこと能はず。斯くの如くして、人生は相矛盾する兩方面の板挟みとな
つて苦惱を重ね、ばならぬことになる。が、是れは奈何ともなし得ざる因果の法則であるから、
之に善處する所以の道を講ずる以外には、手段も方法もないのである。善處の道とは、各種の修
養法といふに盡きる。従つて古來多くの修養法が講ぜられたのであるが、爰にはそれに立入るべ
きでないから、之に對して私見を加へることは差控へて置く。

尙和熟・媒介を意味すと考へらるゝものに、ニギルがあり、又賑ぎの意味もあることであら
う。賑ぎとは和魂を契機として、人は生の増殖を營み、生々發展の道を講ずるからである。此の
件については附録に述ぶるところと併せ考へられんことを望む。

以上はニギなる言葉の大體の意味であるが、之を再び第一圖に就いて見ることにせば、 x は
正しくはXY軸上に在るべき筈であるのに、それが $\alpha \times$ 角を以て軸周を廻轉するところの x'
…… z' ……となり、従つて眞の心の所在點Hが H' ……等に轉移するに至るのは、所謂煩惱あ
るが爲で、此の H' ……等は和魂を示すと見てよいのである。佛氏は即身成佛を説くが、それは言説

丈で得られるものではない。但し H' ……等をHたらしめんとする努力は、常に怠つてはなら
ず、其の努力を貴しとすべきものなのである。われ／＼は安價な標語などに捕へられて、畢生
の修練を怠るやうなことがあつてはなるまい。

各角度からの觀察により、和魂即煩惱心なることを知るに至つたが、此の煩惱心なるものは、
單に人の生時に於てのみならず、死後に於ても、期間の長短こそあれ、猶依然として存続し、死
して直ちに神佛となるやうなことは、特殊の場合を除いては到底有り得ないことで、死後の精進
努力のみが、能く煩惱から解脱し、生命の淨化を期し得られるのである。そこに人類の眞の進化
がある。人にして若し此の認識を缺くに於ては、刹那主義などに墮し、所謂醉生夢死の徒となる
ことを免れないであらう。生死一貫の原則に立つことが人生の最重要事たる所以である。

以上で大體四魂に對する概念丈は述べたことになるが、それ丈では稍々相互關係を明らかにし
得ない憾みがないとはいへぬ。由つて爰に一つの比喩を設け、その點を更に明らかにしよ
う。四魂の關係を明らかにすることは、やがて人生を説明することになり、従つて古事記解釋の
鍵ともなるからである。

四魂の好比喩として、是れより登場せしめんとするは酒の醪である。即ち醪を四魂の具有者と

看做し、醪の粕が人の荒魂に相當すと考へ得られるといふのである。そこで、此の醪から粕を漉し去れば濁酒となるが、人が死するといふことは、恰も醪から粕を取り去つたやうなもので、その濁酒に相當するのが和魂、即ち濁れる魂なのである。

更に濁酒から其の濁りを除去すれば、正宗・白鷹、その他の銘酒となるが、人も之と同様に、和魂の濁り——煩惱心を除き去れば、個人本來の眞の魂となり、その特性を十全に發揮し得る境地に到達するのである。

然るに正宗・白鷹等の銘酒は、普遍のアルコールに、特異の風味が加はれるものに過ぎない。此の特異の風味に相當するは、人に在つては、其の本來の自我性、特徴あるところの心である。此の特徴の心こそ、個人の稟性——運命——幸不幸の分岐となるものにして、即ち山幸・海幸の如く、幸が岐るゝ原因となるところの心であつて、それは情といふことに外ならない。是れ幸魂が情を意味すといふ所以である。

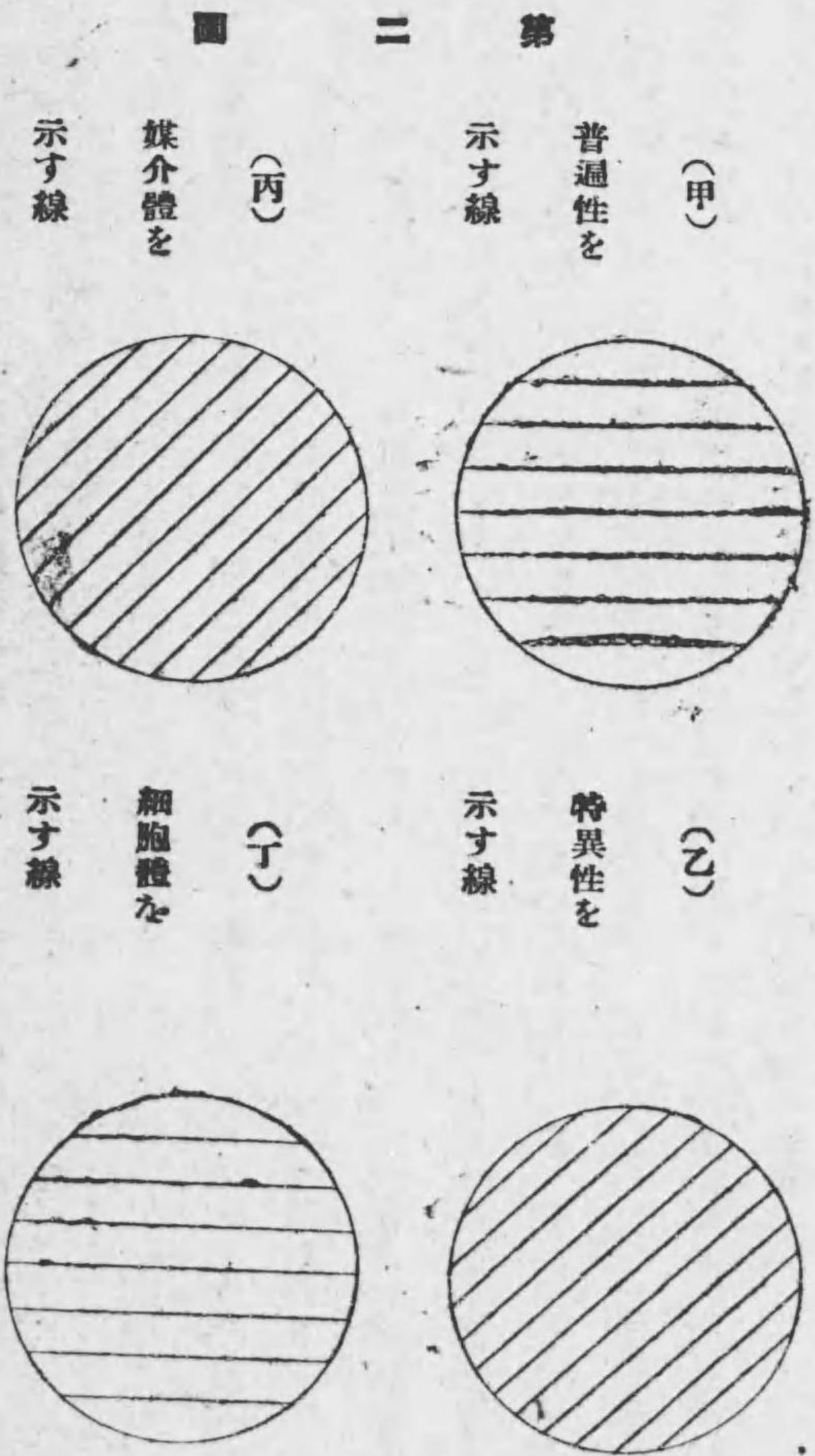
更に正宗・白鷹等の銘酒を蒸餾して、其の特異の風味を除去するならば、そこには一樣普遍のアルコールが得られる。之と同様、人の魂から自我なる特性——幸魂——情を除き去るとせば、無我普遍の、所謂大我の心となること必定である。無我普遍の大我の心とは、通ぜざるはなきと

ころの心を謂ふ。通ぜざるはなき心とは、酒に在つてはアルコール、人に在つては之を智といふ智なるが故に通ぜざるはなきことを得るのである。智なるものは、斯くも靈妙不測の働きをなすものなるが故に之を稱して奇魂とはいふ。

以上酒の醪の比喻によつても明らかなる如く、われ／＼が醪その物を味はつても、直ちに正宗・白鷹等の眞の味は得られず、粕と濁りとに妨げられて、歪める味しか味はれないのを常とする。さればというて、醪の中に正宗・白鷹等の味が含まれて居らぬといふのではない。人に在つても之と趣を同じうし、立派な眞魂を有しながら、肉體的慾望、煩惱心などに妨げられて、眞性を發揮し得ない場合が少しとせない有様に在る。われ／＼は醪や濁り酒を味はつて、其の正宗たるか、白鷹たるかを鑑別し得るが如く、肉體や煩惱心を透して、其の眞性を看破し得るならば、野に遺賢なきを得るであらうが、此の事は蓋し容易な業ではない。此くて或は瓦礫を磨かんとし、或は和氏の璧が棄てゝ顧みられざることにもなる。此の事は、教育上にも至大の關係を有することであるが、是れ亦此に論すべき限りでないから、之を他の機會に譲る。

四魂の説明は以上で一通り爲し得たと信するが、尙此の四魂は、人生の各方面に互り、極めて重要な問題なるを以て、更に其の關係を圖に示すことにする。之が爲には各異なれる線をそれ

く此の四魂に配することによつて成し得られる。第二圖乃至第六圖は、此くして作製せるものである。



而して生ける個人の生命體は、此等四魂の具有者なるを以て、當然第三圖に示すが如きもの

なる。



〔註〕荒魂といへば、その中には他の三魂を含み、和魂には奇・幸の二魂、幸魂には奇魂を含むと解すべきであるが、時としては、荒魂は單に第二圖(丁)のみを、和魂は同じく(丙)のみを、幸魂は同じく(乙)のみを指すことあり、時と場合とにより、その何れにも使用せらるゝことあるを以て、念の爲附記す。

次に四魂具有の生命體に、死なる現象が起るときは、生命體は其の生命を失ふ。——といふよりは、生命が生命體から脱出するから、死なる現象が起るといふ方が正しい。何れにしても、死とは、物質——體と生命との分離を意味し、之を體の方面から見れば、第三圖の如きものが、第二圖(丁)の如きものとなることであり、又生命——魂の方面から見れば、第四圖の如きものとな

ることをいふ。それは和魂に外ならぬから、爰に生命といふは、差當り和魂を指すといつても差支がない。而して一般には之を靈魂と稱しつゝある。

靈魂が既に肉體から分離すれば、肉體との媒介として有用なる和魂——第二圖(丙)の幽體は、最早その用を終つたことになるが、死後に於ても、猶且生存中の惰性といふか、肉臭といふか、煩惱的色彩を其の儘携行するが爲、依然迷悟の間に彷徨することを免れないのが普通である。即ち和魂——幽體の有無が、迷悟の分岐となる譯である。而して此の境涯を指して幽界といふ。

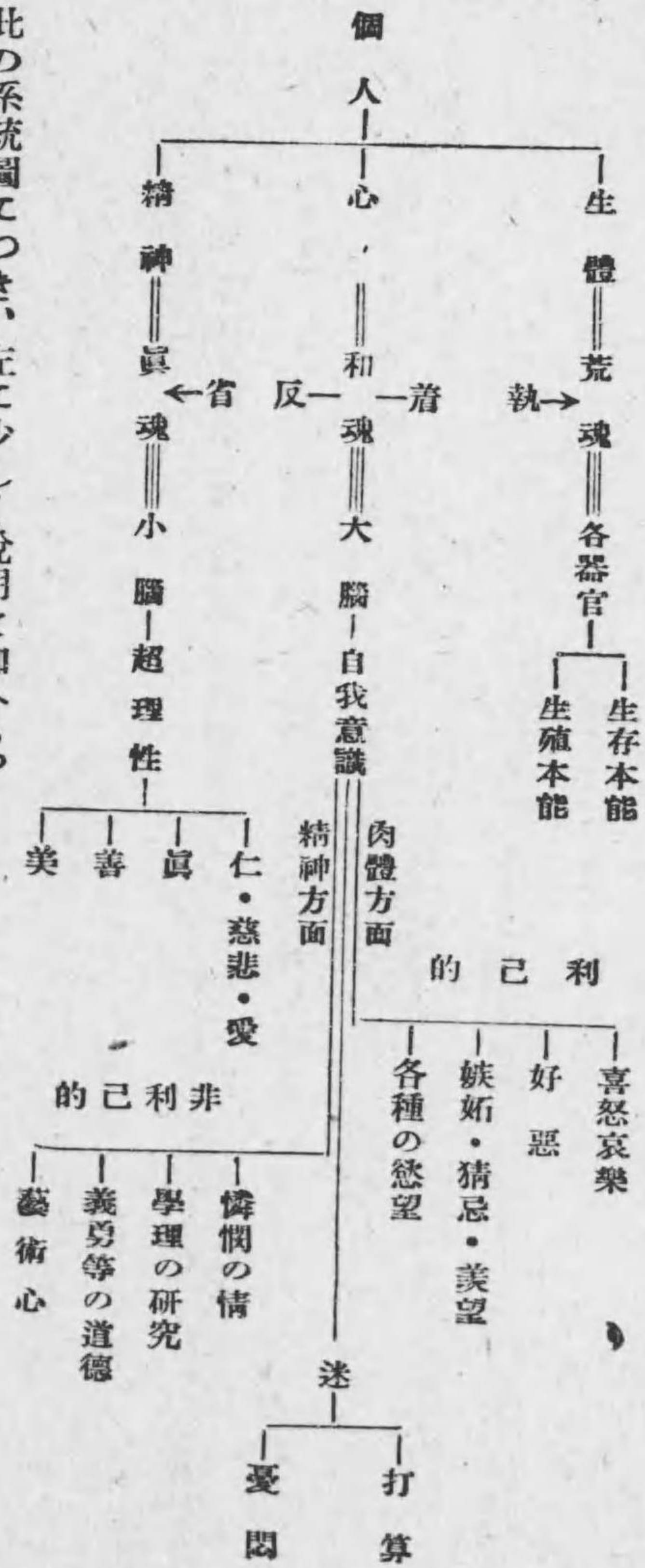
和魂の居住する幽界が、迷悟の分岐となる世界であるならば、われ／＼はそこに安住の地を求むべきではなく、成るべく速かに其の濁りを淨化し、解脱了の域に達せねばならぬ。そして始めて自我本然の眞面目、混りのない幸魂となる。こののである。此の幸魂が個人の眞性なるが故に、又之を眞魂まいたまともいふ。之を圖示せば第五圖の如きものである。



靈魂が其の本然の幸魂に淨化さるゝに至つた曉、爰に神格を獲得すと考へられるが、斯くの如き靈魂の神と、所謂神様とは、根本の相違があつて、之を同一視するやうなことがあつてはならない。其の説明は之を本文に譲ることとするが、兎にも角にも、此の境涯に達し得たならば、之を神界に達したと看做してよいのである。而して神様の世界を神界といふに鑑み、靈魂の神格を獲得するに至れる世界は、之を魂神界と呼び、以て兩者の區別を明らかにして置くを可とするであらう。

幸魂が其の自我性からも離脱すれば普通の奇魂となる。(第六圖)既に奇魂となれば、何も彼も無差別、賢愚の差も、男女の別もなき境地に達するであらうとは、一應は考へられぬこともない。が、一足飛びにさうは行きかねるのである。此の事については後に説明することとし、取り敢へず、奇魂の境涯は之を靈界と呼ぶことにする。靈といふ文字には、普通といふ意味が、多分に含まれるからである。但し普通といふと雖も、其の中には又幾多の差等あることを認めねばならぬ。が、それ等を適當に表現すべき文字も、言葉も見當らぬから、致し方なく、齊しく之を靈界と呼ぶまでである。

心と四魂との説明は、上述を以て大體終ることとし、次に此等を一の系統圖となし、一覽の便に供する。



此の系統圖につき、左に少しく説明を加へる。

和魂とは、又平生の心ともいふべきもので、それにはあらゆる心が含まれて居る。が、奇・幸兩魂の潜在により、人は反省の機會が與へられ、進歩向上の道を辿り得るのである。然るに現體を有する人間としては、兎角有形的な各官能、并に其の要求に引摺られ勝となるから、くれぐれ

も反省の念を等閑に附するやうなことがあつてはならぬ。何となれば反省と否とが、向上向下の分岐となること、圖に示す通りだからである。要するに無反省は私慾の生活に耽り、反省は貴き奉仕の生活に入る所以なのである。

尙此の圖に眞魂とあるは、各人の意識以外に感應する、或る淨化されたる靈魂を指していふ。各人の眞の魂たる奇・幸兩魂も之を眞魂といひ、靈魂の淨化されたものも亦眞魂である。甚だ紛らはしきところあるを以て、各人の眞魂は之を幸魂と呼ぶこととし、靈魂淨化して各人に感應するもののみ、眞魂の稱を與ふることとする。而して此の眞魂は又守護靈ともいふ。守護靈のことは之を附録に述べる。

自我意識とは、心が大腦組織に印象づけるところから生じ、若しも印象づけることをせないならば、意識としては現れない。現はるゝことなき意識は潜在意識である。此の潜在意識なるものは、時として二重人格など、混視せらるゝこともあるが、是れ自ら別の問題で、その説明は稍々複雑性を帯ぶるを以て、之を心靈科學に譲る。

尙此の自我意識は、内省することによつて、圖に示すが如く憐憫・學理・道德・藝術方面の行爲となり、眞魂と相合致せんとするものである。但し眞魂と合致し得たればとて、直ちに仁・眞

善・美なりといふ意味ではない。努力して休むことなければ、遂には到達し得べき理想境なのである。此の理想に到達することが、個人の精神であらねばならぬから、此の眞魂を精神と名づけることにせる次第である。

孟子は『惻隱の心は仁の端なり』と曰うて居るが、此の筆法によれば學理・道德・藝術の行爲は、則ち眞・善・美の端といふことを得るであらう。此の他は圖を一見することによつて、自ら諒解さるべきを以て、絮説することを差控へる。

幸魂は上述の如く、自我の眞性なるを以て、萬物盡くそれ／＼の眞性を發揮するならば、互ひに相犯すが如きことなく、自ら共存共榮の道を履行するに至ること必定である。然らばそこに自ら普遍の意味も含まるといふものである。例へば之を太陽系に見よ。太陽は太陽として、太陽系内に於ける特殊の統御性を發揮しつゝ、しかも恒星的の普遍性に缺くるところなく、太陽系内の各遊星に在つても亦然りて、地球には地球としての特性あり、火・木・土等には又火・木・土としての特性あり、而して其の特性發揮の爲、互ひに相妨ぐるが如きことなく、太陽系内、遊星群としての普遍性に缺くるが如きことはないのである。地球の國々も亦、此の天地の原則に準ずる

ならば各其の宜しきに従つて共存し、共榮し得る筈であるが、實際に於ては、争闘・侵略を事とし、弱肉強食の修羅場を現出しつゝある。それは何故かと問ふ迄もなく、利己的慾望などに驅られて、眞の本性を發揮することを知らないからである。人類個々は猶更然りて、數千年來、其の生命に不忠な行爲を持続し來つて今に及んで居るが、もうそろ／＼眼が覺めても然るべきではないか。之が爲には我日本は、古事記に示されるところの原理を、世界に擴張するの使命を帯びて居ることを、先づ以て自覺するの要があるのである。

幸魂とは前に述ぶるが如く、人の固有の特性である。我國八百萬の神々にも亦、各々特性があり、それは又各々の神性が幸魂であることを語るものである。但し靈魂の幸魂と、神々の幸魂とが同様であるといふのではなく、靈魂の幸魂は、神々の幸魂に相當するものであるといふに過ぎないのである。

さて世界の宗教の中には、無差別平等を理想とするものもあるが、是れは幸魂を認めずして、直ちに奇魂たらんことを要求するものであらねばならぬ。我が神々の道は則ち否らずして、幸魂の洗練を主眼とする。此くして差別裡に平等を藏し、平等裡に差別を認め、敢て相扞格することなきとにろの道である。漫に平等を鼓吹するならば、誤まれる思想の誘導ともなり、弊害百出す

るに立到る憂ひなしとせないから、至大の注意を之に拂ふ必要がある。さればというて、洗練されざる、不純な自我の跳梁は、それにも増して危険極まる行爲となる場合も、蓋し少しとせないから、人生の行路は、一筋縄を以て律し得ないものあることも亦、承知せねばならぬ。

われ／＼人類の靈魂が淨化されて幸魂となり、奇魂となれば、直ちに宇宙の大靈に合致し得るかどうか。是れも一應考ふべき問題である。而して此の問題は、先づ物質方面から検討する方便利である。何となれば世界は、物質と生命と兩々相俟つて發達せるものであるから、其の一方を窮むれば、他を推理して行くことが可能だからである。

さて宇宙間に於ける物質中、普遍性を有するは、蓋し水素原子である。而して我太陽は、宇宙の一特殊存在であつて、それに普通の物質は、ヘリウム原子であるとも謂はる。

〔註〕水素原子は一箇の陽子と、一箇の陰子とから成り、ヘリウム原子は、アルファ粒子と、二箇の核外陰子とから成るといふ。又アルファ粒子は、四箇の陽子と、二箇の陰子との組成であるから、ヘリウム原子は、都合四箇の陽子と四箇の陰子とから構成されて居ることになる。然るときはヘリウム原子は、四箇の水素原子が、或る構成法の下に、ヘリウム原子にな

つたものと見ることが出来る。但し人工的に、此の構成が可能であるといふ譯ではない。が、兎にも角にも、萬物普通の原子は、水素原子であると主張し得る。

天文學者の中には、此のヘリウム原子に、太陽素なる名稱を與へて居るものがある。太陽素とは太陽普通の原子であるといふことである。ところで我地球は、太陽系内の一特殊存在として、それに普通の物質は、水素原子でもなく、又ヘリウム原子でもない。地球普通の物質にして、之に地球素なる名稱を冠して然るべきものは、蓋し酸素である。

酸素は何人も知る如く、あらゆる物質を酸化せんとするもので、是れは地球に關する限り事實である。故に酸化とは、之を地球化するといつても決して不當ではない。彼の萬物普通の物質たる水素も、地球化されるれば、地球に普遍にして、且つ必須の物質たる水となる。此の水の存在なしには、生物は發生もせず、又一日も其の生存を續け得ないのである。即ち酸素を地球普通の物質——地球素といふ所以である。尙酸素については、第六章にも説あり、参照されんことを望む。

酸素が此く地球普通の物質であるとはいへ、之を宇宙間の物質といふ方面から觀れば、一つの特殊物質たるに過ぎない。此の特殊の物質を普遍とする地球上に、更に特殊の存在として棲息す

る人類、そして其の特殊の體軀と、兩々相俟つて發達せるところの魂が、縦令其の特性幸魂から離脱して、奇魂になりたればとて、直ちに宇宙の大靈に合一すべしと考ふる如きは、人間の自負心を満足せしむるには然ることながら、それでは合理的であるとはいひ得ないであらう、即ち人の奇魂なるものも、其の普遍といふことに於て、或る程度内に限られ居る譯である。物心は常に並行す。並行するが故に、物心一如なども謂はれるので、靈魂の奇魂をして、宇宙の大靈に合せしめんとしても、さう安價に達し得られるものではない。此の事は附録に述ぶるところにより、自然に諒解し得るならんと信ずる。

爰に序論を終らんとするに當り、一二注意すべき事項を附け加へて置く。即ち古事記には、四魂の各々が、同じ固有名詞を以て呼ばるゝ場合が、往々にして之れ有るといふことである。例へば天照大御神と記されあつても、それが太陽系主宰の大生命であらせらるゝこともあり、或は現人神の御先祖であらせらるゝ御魂を意味することもあり、或は太陽大生命の分靈を意味することもあり、加之、物質としての太陽、即ち荒魂を意味することもあり、時としては、同時にその幾つかを含む場合もある。而して其の何れを意味するかは、場合に應じて諒解するより外に途がな

い。が、之を一貫して流通無礙ならしむるものは、四魂に包藏さるゝ生命觀があるのみである。此の生命觀に立脚することによつて、一つの記載が或は歴史となり、或は哲理を語るものとなり、或は神道觀・道德觀ともなり得るのである。

之を要するに、古事記が、或は古代のお伽嘶視され、或は荒唐無稽の代名詞たる如き神話を以て遇せられ、或は性の赤裸々たる描寫でもあるかの如く見られんとするは、一に生命の神祕、四魂相互の微妙なる關係を窮めざるの罪に坐す。併しながら、如何なる見解を之に施さうとも、そこに何等かの相を語るものあるべきを以て、一概に此等を否定せんが爲に、本書を成すものではない。唯著者としては四魂の原理、一貫の生命觀のみが、何等の牽強附會を要せず、矛盾も撞着もなく、全體として、能く古事記を眞解し得るものなることを信じ、其の闡明に微力を致し、以て洪恩の萬一に報いんとするまでである。

第一章 天地の初發

古事記は劈頭第一に、筆を天地の初發に起して居る。凡そ天地間の象相にして、根源を天地初發の原理に發せざるはなく、人類生活の種々相、亦此の原理に基づかざるはない、故に若し此の原理を無視し、若しくは之に背反するに於ては、紛擾と混亂とに陥ることを免れないであらう。即ち末であるところの世に處せんが爲には、本であるところの天地の原理を窮むる要ある所以である。本を窮めずして、末明らかなるものは、未だ會て有つた例しがなく、天地を窮めて、始めて萬物の眞に到達し得べく、重大な關心を之に寄するの要ある所以である。

人類生活の基準となすべきものに、世に所謂經典なるものがある。經典は古來世界の各地、各民族間に起り、其の數亦少しとせない。我古事記も無論其の一つである。唯古事記の序述は、多くの經典と趣きを異にし、お伽噺とも見らるゝやうな形態をなして居る。之が爲、それに包含されある内容が極度に韜晦され、之に對する解釋も從來少なからずあるが、未だ全く闡明さるゝに至らず、以て今日に及ぶといふ有様である。

著者は私かに思ふ、天地創造の原理を明らかにしたものにして、始めて眞の經典たる資格があ

ると。舊約書の如きも、稍々此の趣きがないではないが、語つて具體的なること、到底古事記と同日に談ぜらるべきではない。それは兎に角、是れより逐次古事記の記載を抄出して、各方面より之に檢討を加へ、其の眞の相が如何なるものであるかを明らかにしよう。古事記は先づ第一に

天地初發ノ時、高天原ニ成リマセル神名ハ、天之御中主神。次ニ、高御産巢日

神。次ニ、神産巢日神。此ノ三柱ノ神ハ、並、獨神成リマシテ、隱身也。

と記してある。ところで天地間の諸象相、萬有一切は、天地剖判後に顯現し、展開せるものなるを以て、顯現、展開の由つて來るところを知らんが爲には、此等一切を其の始源に還元し、然る後、事象發展の内面的次第順序を、出來得る限り合理的に、又客觀的に觀察して行かねばならぬ。單に展開後の事相を外面的に眺めたのみでは、その眞實を把握し得べしとも思はれない。是れ古事記が、天地の初發を語る所以であらねばならぬ。

ところで、あらゆる事相を、その未だ發せざる始源に溯らんとせば、如何なる手段方法に由るべきかは、第一に逢着するところの問題である。恰も好し自然科学の發達は、其の手段方法をわね／＼に提供してくれる。自然科学——物質科學なるものは、物の根源を窮めんとする學問なるを以て、天地を其の始源に溯及する如きは、蓋し其の本領とするところである。以下其の原理に

基づいて説を進める。

物質科學によれば、天地萬物は、九十有餘の元素より成るといふ。故に萬物が如何に雑多であり、事相が如何に複雑であらうとも、それ等が悉く元素に還元されるとせば、萬物は僅に九十有餘の元素に分類され得る筈である。是れ固とより一の推理に過ぎないが、此の推理は、科學が根柢より覆へされざる限り、肯定さるべきものである。而して萬物の元素還元を、假りに第一次還元と名づける。

次に科學は、元素は原子より成り、原子の一般構成なるものは、核を中心として、其の周邊を至大の速度を以て、電子が廻轉するところの形式を取るものであるといふ。而して核とは要するに帶陽電氣、電子とは帶陰電氣をいふから、簡單の爲前者を陽子、後者を陰子と呼ぶこととし、第一次還元によつて、九十有餘に分類されたところの元素を、更に原子に還元し、原子の構成を更に陽子と陰子との二つに分つとすれば、萬物は結局陰陽の二元から成り、此の二元が、種々様々な結合様式を取ることにより、萬物の形成となつたことを知り得る。而して陰陽二元に還元されたものを、假りに第二次還元と名づける。而して此の第二次還元が、萬物展開の基調をなすと考へられる。

然らば第二次還元が萬物の窮極で、最早それ以上には溯り得ないかといふに、われわれ人類の理性は、それに満足することを欲せず、二元の由つて來るところを求めて止まざらんとする。而して二元の由つて來るところは、唯一つのものであるべきことは、之を察するに難しとせない。是れより其の一つのものゝ何であるかを極めよう。

二元が既に陽と陰とであるならば、その由つて來る一つのものは、陽にもあらず、又陰にもあらずること言ふ迄もない。何となれば陽あれば陰あり、陰あれば陽も必ず有るべき筈で、其の一方のみが獨立に存在すといふことは、到底有り得ないからである。

こゝで再び科學の語るところを見るならば、陰子（科學の電子）は一の粒子で、其の直徑は、 2×10^{-10} センチメートル、其の質量は 9.08×10^{-31} グラム。又陽子の直徑は、陰子の幾百分の一に過ぎないが、其の質量は、却つて陰子の千八百四十倍もあるといふことである。縱令今後此等の數字に、多少の出入あるとしても、それ等が極度の微粒子であり、又極度に小質量のものであることに變りはない。しかしながら、如何に微にして小なりとはいへ、苟も大きさを有し、従つて質量を有する以上は、そこにはエネルギーの働きあることを認めねばならぬ。既に働きあればそれは一つのものといふことが出來ないのである。

然らば働きのなくなるが爲には、如何にすればよいか。われ／＼が前に陽子と陰子とに還元したところのものに、更に一步を進めて、此等が粒形をなさぬところまで溯ればよいのである。換言すれば、二元が大きさのなくなるまで、其の各々に推理的還元を行ふのである。然るときは、エネルギーは最早測定し得ないものとなり、従つて働きも亦なくなつて了ふ筈である。此の測定し得ざるエネルギーは、唯一無二であること必定で、之を潜在エネルギーと名づける。

今便宜の爲、陽を示すに(+)符、陰を示すに(-)符を以てし、(+)も(-)も粒形をなさぬ迄還元されたと假定すれば、陽から還元されたものも、陰から還元されたものも、最早(+)でも(-)でも有り得ないから、之を示すに(○)符を以て示してよいものとなる。(○)符は故に潜在エネルギーを示すことにもなる。然るに(○)符は發しては(+)符、(-)符を以て示さるゝものとなるから(○)符は又(±)符を以て示すことにしても差支ないであらう。その何れで示さるゝにせよ、此の還元を、假りに第三次還元と名づける。

ところでわれ／＼の理性は、此の第三次還元以上には溯り得ないから、之を萬物窮極の一元と考へるより外はない。此の第三次還元の状態、即ち一元の絶對が、それ故に天地の初めであるといふ結論に達するのである。而して此の状態を無と呼ぼうとも、渾沌と呼ぼうとも、それは各人の自由である。

以上は古事記の解釋に必要とする科學的考察であるが、是れは一つの準備工作に過ぎないから、以下古事記の解釋に移らねばならぬ。而して古事記は前掲出の通り、天地の初めからの記載であるが、此の天地とは、剖判して天となり地となるもので、其の未だ剖判せざるに當つては、無論天地の對立などいふことは考へられず、唯無限無際的空間ありしのみなることが想像される。而して此の空間に在るところのものは、(○)符又は(±)符を以て示さるゝ、第三次還元状態であるが、古事記は之を稱して「高天原」といふ。高天原の説明は之を後に譲り、此の時に成りませる神、天之御中主神について、先づ考察を進めて行かう。

古事記は例のお伽噺式の記載法によるのであるから、見らるゝ通り、神に對しての説明などは施されて居らない。故に神の本質、並に其の働きを知らんと欲せば、神の御名の解釋による以外に道がない。而して御名の解釋に、主觀點獨斷などがあつてはならず、又理路明らかならず、學理と矛盾するやうなことがあつてもならない。本書が科學を引用せるも、主として此の用意に外ならぬ。神と科學とは、相容れざる兩方面などいふものもあるが、是れこそ一の謬想に過ぎない。科學は萬物の眞を窮めんとして起れる學問であり、神は正しき道の現れであり、そこに一致

するところがなくてはならぬ筈である。一致するところがないやう見ゆるは、それを連絡すべき何等かの手段に缺くるところあるが爲であらねばならぬ。本書は敢てその任に當らんとするものなるが、幾分なりとも、其の目的を達し得るならば幸である。

さて「天之御中主神」の御名には、如何なる意味が含まるゝかを考察しよう。アメとは無論天といふことである。但し天地未だ發せざる以前に在つては、地と相對するところの天ではなく、單に虚空——空間、又は宇宙といふ程の意味に解すべきである。此の如き天は、科學の追窮によつて得られたる、第三次還元状態以外では有り得ない。無或は渾沌の状態——絶対一元の存在である。日本書紀には、

『古へ天地未だ割れず、陰陽分れざるとき、渾沌たること雞子の如く云々』

とあるが、それは如何に形容されても差支ないところの、單に想像し得るに過ぎない状態を指して、之を天といふものと解す。

ミは敬稱。ナカは中身又は内容といふこと。ヌシは主體又は本體といふ如き意味であるから、アメノミナカヌシノ神とは、宇宙の内容本體たる神といふ義となる。天地未だ割判せざる以前の宇宙の内容本體が、第三次還元(○)符、又は(±)符を以て示さるゝ、前に潜在エネルギーと名

づけたところのものを本體とする神といふ以外には有り得べきやうもない。是れは科學者も、神學者も、亦何人も承認し得るところであると思ふ。尙神の意義については後に説明する。

次に「高御産巢日神・神産巢日神」。此の二柱の神は、前に述ぶるが如く、宇宙發展の基調をなすところの神である。例により御名を解釋することにより、其の働き如何を窺ふことにする。

ミムスビのミは敬稱。ムスビは結び合ふことの結びであることと言ふ迄もない。而して結びとは二つ以上の交渉によつて行はるゝものなるが故に、是非共第二次還元以降であらねばならぬ。而して第三次還元から、第二次還元へと發展するが爲には、先づ如何なる様に於てか、陽子と陰子とに分れるものと想像し得られる。故に結びとは、此の陰陽二元の結び合ひを意味し、神といひ萬物といふも、此の陰陽の結び合ふことの以外には考へられない。是れ結びが宇宙一切の形式・法則・作用の根本義となる所以である。而して結びに二柱の神あることは、何をわれ／＼に啓示するか。それは是れより攻究さるべき問題である。

ところで説明の便宜上、先づ神産巢日神について述べる。ミムスビは既に御結びなるを以て、カミムスビとは、カの御結びといふことである。カとは、此の場合に於ては、幽なることを意味するところのカである。それ故にカミムスビとは、幽な御結びであることを語る。然らば幽とは

如何なる意味であるか。幽は顯の反對なるが故に、結局裏面内側に在つて、外面に現れないことを意味する。是に於てカミムスビとは、裏面内側にて行はるゝ結び合ひといふことになる。

凡そ二つのものが相交渉して、結び合ひが行はるゝに當つては、一方は必ず能動、他方は必ず受動であることを通則とする。而して陽とは能動の方に名づけられたる名、陰とは受動の方に名づけられたる名なるを以て、能動の陽子が裏面内側に在つて、受動の陰子が外側表面に在るところの結び合ひは、之を裏面内側の結びといふ。即ち幽な御結び——カの御結び——カミムスビである。

一方に於て科學は、此くの如き陰陽結合の様式を取るものを、一般に原子と呼ぶこと、前に述べた通りである。然るときは、カミムスビとは原子、若しくは原子の働き、或は原子的法則といつたものを示し、神産巢日神はそれを司どる神と考へられる。此の解釋には推理はあるが、決して牽強附會の説ではなく、又獨斷でもないことを、著者は固く信ずるものである。

こゝに原子問題が登場することになつたので、それに對しての考察を、少しばかり加へて見ることにする。原子中、其の構成の最も簡單なるは水素原子である。水素原子の核である陽子は、其の質量、陰子の千八百餘倍もあるといふが、カミムスビの働きの方面から觀るならば、必ずし

も千八百餘倍たることを要せず、千七百倍でも、千五百倍でも、千倍でも、或はそれ以下でも、或は又その中間何倍のものでも、結びの働きに制限がないのである。故に水素類似のカミムスビは、幾ど無數といつてよい程有り得る譯である。但しそれ等が實際存在するか否かは明らかでなく、唯存在の可能性があるといふ丈である。然るに他方、恒星のスペクトラム中、往々水素類似の線あることを見るに於ては、或は單に可能性があるといふに止まらず、實際存在するものであるやも測られない。兎に角水素類似の結びがあるべきことを假想し、之に卑屬水素なる名稱を與ふることにする。

宇宙間には、無數の波長の線があつて、其の幾つかは既に捕へられて居るが、今後どれ丈捕へ得らるべきかは何人にも判らない。而してそれ等無數の線の中に、前記の卑屬水素によるものもあるべく、又後に述ぶるが如きエーテル線も、生命の線もあるべく、その他想像だになし得ないものもあるであらうが、此等は後の人に待つこととし、兎に角爰には、卑屬水素の提唱文に止め

さて神産巢日と原子とは、結局同一の働きであることの諒解が得られたとせば、是れこそ時と所とを異にして、序述表現の方式を異にせるものであらねばならぬ。老子は『萬物は陰を負ひ陽

を抱き』といつて居るが、負ふとは之を外にすることであり、抱くとは内にすることであるから是れ亦原子形を道破せるもので、神産巢日といふよりは餘程簡明である。が、卑屬水素までをも含む神産巢日には、その深さに於て及ばぬところがある。兎に角原子形なるものは、昔しから知られて居つたと謂はれぬこともないが、唯科學の如く實證し得なかつたことは、時代の相違で致し方がない。

次には高御産巢日神。此の神の御名の、神産巢日神との相違は、カとタカとの差丈である。故にタカの意味するところを明らかにすれば足る譯である。タカに高の文字が當嵌められてあるが是れ丈で大體の意味が示されて居る。高とは顯はれることを意味し、幽とは全く反對である。故に幽が内側裏面とせば、高は外側表面となる。而して御結びは陽子と陰子との結合であるから、タカミムスビとは陰子内面に在つて、陽子が却つて其の外面に在るものでなければならぬ。然るに科學は、此の如き結合様式の存在を、未だ認むるに至つて居らない。尤もそれはさもあるべきことではある。何となれば、科學は物質に即しての學問で、物質を窮極すれば、悉く原子——神産巢日の働きとなり、それ以外のものを捕へ得ないからである。

併しながら、われ／＼人類の理性から推しても、爰に陽と陰との二つが與へられて、それが唯

一つのものしか出来ぬといふことでは、到底満足されないのである。が、こんな理窟はどうでもよいとして、著者はタカの御結びを認めるものである。此の御結びは直ちに物質とはならないものであるから、如何に物質科學を追究したところで、此の結びの形式は現れて來ない。即ちタカミムスビは物質科學以外のものなのである。但し科學者も、大體エーテルなるものを認めて居り此のエーテルとタカの御結びとが同一であるや否やは、遽かに斷定すべくもないが、タカの御結びが既に物質にあらず、物質にあらざるものをエーテルと呼ぶことゝすれば、タカの御結びがエーテルであるといつても、強ち不合理でなく、高御産巢日神は、此の非物質的働きを司どる神といふことに解釋し得られる。

タカの御結びが、原子形と表裏相反するものであることに對し、大凡次のやうな論難が豫想される。

(イ) 陽子の質量は、陰子の千八百餘倍もある。此の質量大なる陽子が核となり、質量小なる陰子が、其の周邊を廻轉する原子形は、太陽と遊星との關係にも似て、首肯されることであるが、質量大なる陽子が、質量小なる陰子を中心とする如き結びは、到底認めることが出來ない。

(ロ) 天文學的に、光線にも屈曲あることが證せられて、光線の傳達に、強ひてエーテル説を藉らずともよい。即ちエーテルの存在を必要とせない。

以下此等の論難に對し、一と通りの釋明を施すことも無駄ではあるまい。

(イ)に對して——前に述べたる如く、陰子は一の微粒子であり、陽子(水素原子の核)も亦微なる粒子である。然るに此等の粒子をどこまでも還元して、粒形なきに至らしめたとせば、陰子も陽子も、遂には一に歸すべきことをも知つた。然らば陽子還元の方にのみ、質量あることは許されない。若し陽子還元の方にのみ質量あることを許すならば、それは一元に歸したとはいはれぬ。故に陽子から還元されたものも、陰子から還元されたものも、何れも共に質量もなく、陰陽もなく、唯潜在エネルギーあるのみである。此の事も既に前に述べた通りである。而して此の潜在エネルギーは、遂に顯現のエネルギーとなるが、其の動機如何は之を別とし、その陰陽として分るゝ發端に在つては、陰も陽も、直ちに粒子としてではなく、謂はゞ萌芽的兆候といふ如きものであつたであらうと想像される。而して此の兆候が漸く發達すれば粒形をなすに至るが、陰子粒の質量を一とし、陽子粒の質量のみが、一躍して陰子の千八百餘倍になるといふ如きことは、到底考へられないのである。故に陽子が千八百餘倍となるには、陰を下積みとして、凝集に凝集

を重ねた結果であらねばならぬ。現に陽子は其の質量陰子の千八百餘倍に上りながら、粒子の大きさは、却つて陰子粒の幾百分の一しかないのである。

此く考ふることにより、陰陽の分るゝ發端に於ては、陰も陽も質量相等しく、能動であるところの陽は、原子の陰子が、核の周邊を廻轉するが如き運動を取るのではなくして、前に述ぶる如く陰を下積みとして凝集を重ね、遂に陰子の千八百餘倍もの質量となり、それが遂に物質原子——水素の核となるにも至つたものと推察される。近來原子核は、中性子から成るといはるゝに至つたが、中性子とは、陰陽凝集の結果に外ならず、而して凝集には、能動の陽が、必ず陰の外側に在ることを要するので、その理亦甚だ明らかである。是れ即ちタカの御結びである。タカの御結びは、故に物質原子の核に先行すと考ふべきものである。

宇宙の空間は、勿論物質を以て充たされては居らない。併しながら此の空間には、物質核の前身たるタカの御結びが、今猶熾んに行はれつゝあるものと見られる。それは宇宙は常に發展しつゝあるものだからである。古事記に高御産巢日神が、神産巢日神に先だつ神として記されあるのは、かゝる次第によるからであらう。而してタカの御結びが陰子の千八百餘倍となり、水素原子核となる迄には、卑屬水素に於けると同様、無数のタカの御結びの働きがあるべき筈である。

(ロ)に對して——物理學によれば、アルファ粒子(陽子)と、ベータ粒子(陰子)とは、電場に於て進行方法を異にするが、ガンマ線と稱する光線は、電場の影響を受けるが如きことはないといふ。即ち光線は電場などに無關係であるといふのである。然るに或る天體より發する光線が、他の天體の近傍を通過するときは、之が爲には或る程度の屈曲を起されるといふことが實證されたのである。其の結果として、エーテルの存在を假定せずとも、光線傳達の説明に事缺かぬこととなり、エーテル否定の説をなすものもあるといふ譯である。一體光線なるものは微なる粒子であり、その進行には振動もあり、波動もあることを認めながら、猶且エーテルの存在を必要とすることは、次の理由によつて明らかである。

彼の月・金星、その他の遊星から來るところの光線は、太陽光線の反射光である。然るに此の反射光にも屈曲あることが、未だ證明されて居らないのである。又實際に於ても、反射光には恐らく屈曲などはないであらう。といふのは、光線は既に微粒子であり、太陽より射出されたところの此等微粒子は、月球面(遊星も同様であるから、以下之を略す)に達すれば、其の運動のエネルギーは、物理學の法則に従つて熱と光とに化し、微粒子は月球面に吸収されて了ひ、唯其の振動・波動のみがエーテルによつて傳達され、熱の伴はぬ月光となつて、われ／＼に映するので

あらうと考へられるのである。若しも月光にも微粒子が在るならば、運動のエネルギーも無き能はず、従つて熱が伴はぬ筈がない。然るに事實は之に反するが故に、エーテルなどの假説なくとも、光線の傳達に事缺かぬといふ如き説は、反面の理由としかならない。即ち光線は微粒子であり、それには振動も波動もあり、その振動と波動とは、エーテルによつて傳達されるといふのが恐らくは合理的の解釋である。

此のエーテルなるものに對し、其の質量は極めて大であるやう主張する論者もある。併しながら、一元分れて二元となり、タカの御結びとなれるところのエーテルは、水素原子など、比較にもならぬ程、質量小なるものであることは、上述によつて明らかであり、又單にエーテルといふ中には、前述の卑屬水素も、亦後に述ぶる生命の線もあることであらうが、茲では簡單にタカの御結びのみを指すと解せられたい。

之を要するに、科學は物質を對象とする、謂はゞカの御結びの學問である。然るに古事記はカに先行するタカの御結びを垂示して居る。著者は科學を尊重することに於て、人後に落つるものではないが、古事記の垂示は、此の科學にも、或る示唆を與ふるものなることを知り、單なる科學の研究のみを以てしては、宇宙を窺むることの至難なるを覺ゆるもので、世の識者の研究に待

つの意切なるものがある。

事の序でであるから、産巢日神について少しく附け加へることにする。古事記には、上記二柱の御産巢日神の他に、和久産巢日神の名が記されてある。同じく産巢日神であつても、其の意味は甚だしく異なる。和久は湧くで、生物が湧き出づることをいふ。生物學者は、生物は湧き出づるものにあらずと力説するが、生物は湧き出づることによつて、其の進化が遂行されつゝあるのではないか。古き地質時代、氷河時代から、生物の多くは幾度か絶滅に歸して居る。而して其の次に來るところの生物には、必ず何がしかの進化が伴なつて居る。人類とても亦さうである。で、種が絶滅して、新たに湧き出づるか、又は何かしらの保護が加へられるのでなければ、進化がなればかりか、却つて退化さへもあり得ると考へられる。但しそれにも例外がないとはいはぬが、一般的にさうといへると思ふ。而して此の湧き出づることを説明するものは、心靈科學の靈の物質化現象なるものであるが、その事は第三章に説くべきを以て、爰には略して置く。然らば湧き出づることに、何故産巢日神の言葉を用いたか。それは恐らく蒸生といふ如き意味で、御産巢日二柱の神とは、意味自から異なるものがあるであらう。念の爲附記する次第である。

天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神三柱の神の成りませるは、前掲の如く高天原に於てである。三柱の神の内容本體が上述によつて明らかにされた上は、高天原が何を意味するかは、絮説するまでもなく、宇宙の空間といふ意味にしかならぬ。尙高とは人類から望見すれば無限に高く、天原とは涯しなき天空といふことである。

然るに此の高天原なる言葉が、後には漸く其の本來の意義を喪失し、或る地方又は地點を指すものゝ如く考へられるに至つた。天地の未だ割判せざる時に、高天原を地球上の或る地方、又は地點の稱でもあるかの如く考ふることは、全く條理をなさぬものである。此の如き誤謬を來すに至れる原因は、神代の卷は實は超現象界の物語り、神の世界の記載であるが、之を人に擬して説けるところから、遂に其の認識を失ひ、其の結果之を單なる歴史と見んとするところから起れるものと思はれる。が、此の如き説あるに於ては、之に對しても一應の説明を施さねばなるまい。

宇宙間の一切は、陰陽二つの結びに根源を發すること、既に知る通りで、之を神といふ。故に神の普遍的本質は陽陰である。又神産巢日神の原子の働きは物質となり、物質は之を體といふ。一方物質とはならない高御産巢日神のエーテル(假稱)を、體に對する相對語として、靈といひ得るな

らば、神は又靈體である。但し靈なる文字に含まるゝ意味は、主として普通の生命といふことであるが、差當り適當なる文字を見出し得ないから、暫らく之を借用せるものである。

更に物質元素の始源的なるを水素とし、物質にあらずして、水素に相當するものを、水素と反對の意味に於て、之を火素と名づくるならば、神とは又火水の謂ともなる。要するに宇宙の萬有は靈と體、火と水、陰と陽との組合せ、噛み合ひといふことに盡きる。而して其の働きの組み、噛み、又醸みの意味を取つても神である。即ち萬有即神である。庶物崇拜の起るも偶然ではない。尙神の意義については、附録にも述べることにする。

ところで靈と體、陰と陽といふ如き神は、所謂普通の神性である。此の普通の神性發達すればやがて個別の神性となるが、神なる言葉には、それ等の區別なく、何れにも流通されて居るから其の何れを意味するかは、場合に應じて判斷するより外はない。語簡なれば簡なる程、それに含まるゝ意味多くして且深いのを常とする。尤も個性を有せらるゝ神を、特に神様と呼んでよいと思ふが、神なる言葉には、今のところ、其の何れも含まれ居ると承知されたい。

さて祝詞には『高天原に神つまります』とあるが、つまるとは遍滿、填充の填まるとも解せられ、又神様の鎮座される意味の鎮まるとも解せられ、更に神々の集合を意味する集まるとも解せ

られる。既に三柱の神は普通の神性であるから、宇宙に遍滿、填充するところの填まるとあり、従つて高天原は宇宙である。天照大御神は太陽系の主宰神として、太陽にお鎮まりなると考ふれば、高天原とは太陽系内のことであり、又其の中心たる太陽でもある。而して太陽系内の諸々の神様は、悉く天照大御神の統制に服せらるゝのであるから、遍滿も、鎮座も、集合も、同時に意味すと考へて差支ない。そしてそこに何等の矛盾も撞着もなきことを得るのである。

併しながら、此の意味漸く下れば、遍滿の意味が失はれて、單に神様の鎮座さるゝ地點、或は神と崇め奉るお方の統治さるゝ地方のみを指すことになり、各地に高天原と呼はるゝ所を生ずるに至つたのである。此の筆法によれば、現人神の鎮座まします東京を、又其の御統治下の日本國を高天原と稱しても、少しも不合理ではないと思ふ。歴史家は地上の事跡にのみ即して考證するを任とするが、それにのみ偏するときは、遂に其の本來の意義迄喪失するに立到らぬとも限らぬ。三柱の神の成りませる高天原は、斷じて地上の地點などにあらずして、宇宙の空間の意味であることを、爰に重ねて強調するものである。

次に「獨神、隱身」とあることについて解釋する。獨神とは、雙神に對する單神などゝ解すべきではなく、直截簡明、ひとりで、或は自然に、或は獨自的に成れる神といふことで、どこか

ら生れたのでもなく、又誰が造れる神といふやうなこともない。「成りませる神」とあるに見ても、容疑の餘地などはない。宇宙の本體たる天之御中主神は、既に絶對獨存の神であらせられ、結びの二柱の神は、天之御中主神の兩方面の顯現として、他に依存することなきところの獨神である。換言すれば、此の三柱の神は、其れ自身造化の神で、それはひとり、自然に成りませる神なのである。

「隱身」は之を隠り身と訓すべきで、身を隠すなど、讀んでは意味をなさない。身とは相貌あることをいひ、隱とは視識に上らぬといふことである。視識に上らぬものに無形と、無色との二つがある。無形といふ中には、極微にして形を成さぬものと、無邊大にして形貌し得ないものがあるが、此の極微と極大とは、遂に一致するものなのである。但し爰に記されある隱身とは、未だ一定の成形をなすに至らぬことを意味し、換言すれば、普通の神性といふことである。是の事は從來述べたところによつても明らかにされ居る筈である。獨神隱身の四文字を一見した丈でも古事記が如何に含蓄深きものであるかを窺知するに足るであらう。

第二章 宇宙の組織

宇宙とは無際・無窮の時空をいふが、本章に於ては、無数の天體が散在する空間といふ意味に使用する。而して此等無数の天體中には、比較的若きものあり、漸く老境に入れるものもあり、或は既に光を失へるものもあるべく、他方に於ては、猶星雲状態に在るものもあるといふ有様なので、宇宙の組織といつたところで、天文學者の如き説明を試みようとする譯ではなく、實をいふと、無数の星の中の一つでしかないところの、我太陽系の、それもホンの一端を語らんとするに過ぎないのである。但しその原理に至つては、之を他の星にも推し及ぼし得るであらうことを疑はない。即ち第一章に於て、萬物を天地の始源に還元すれば、遂に一元に歸することを知り得たのであるが、此の原理は、恐らくは他の如何なる星にも適用し得られる。然るに此の如き謂はゞ抽象的事柄を述べたからとて、それ丈では人生哲學を組立て得る譯でもなく、又人生の指導原理となすには、餘りにも縁遠い感あるを免れない。そこで本章に於ては、事柄を太陽系内に限ることとするが、われ／＼人生に於て、それで不足を感ずるやうなことは、先づ以て無いといつてもよいと思ふ。

宇宙を此く太陽系に限るとしても、其の組織を論ずることの至難なるは、著者と雖も承知し居らぬではない。或る有名な天文學者は、われ／＼の銀河宇宙には無数の星があつて、それ等の星が勝手氣儘な運行をなすところから、どうかすると、偶然衝突を起すことがある。その結果遊星が出来て、そこに生命(生物の意ならん)の發生となつた。我太陽系も幾十億年かの昔、此くして生じたものであると説いて居る。爰に其の説の當否を云々せんとするものではないが、第一章の原理は、斯んな場合にも適用されて、少しも撞着するやうなことはないこと丈は確かである。

凡そ學說なるものは、如何やうにも組立て得られるが、それは畢竟學說たるに止まる。彼の量子論の如きも、物質を説明するに重要な説たることを失はないが、原子核の説明さへ、未だ全く盡されてゐるとはいひ得ないのである。眼前接觸しつゝあるものに對してすら、猶且此の如しとせば、天文學的の事柄に、臆測の分子があればとて、それは止むを得ないとせねばなるまい。著者は第一章に於て、高御産巢日の神性は、凝集を條件とする御結びで、それは兼ねて、遂には物質原子の核ともなるといふ結論に達したものである。此の他天文學的の事についても、猶且古事記の解釋により、或る解決に達せんことを期しつゝある。それは自から學說とは趣を異にするもので、しかも獨斷的所説にはあらずと信じつゝある。

或る學者は、宇宙は、宇宙の自由意念によつて組成されると説いて居るが、此の説は、天之御中主神を造化の神と考へ、其の意念が宇宙の發展となるといふことであらう。しかしながら、如何にして宇宙の發展となるか、その徑路や次第が明らかになれないから、肯定も否定も出来ない。著者は第一章に於て、天之御中主神を、一元の潜在エネルギーを意味する神と申したが、實はそれは科學的の便に従つたまで、之を未だ發せざる神の靜止意念と申すべきものであると思ふ。その靜止意念が發しては、二つの御結びとなること既に知る通りで、その意念の發動たるや、自然にさう成るのであるといふ。此の自然に成るところのものは、次第に自主的となつて行くが、是れは後に述ぶるところによつて諒解されたい。

二つの御結びは、要するに宇宙發展の基本原則である。然らば如何なる過程によつて、此の基本原則が發展さるか。是れよりその検討に當らうとするものである。が、それを要約するならば、御結びの組合せといふことに盡きる。更に然らば、如何なる組合せが行はれるか。それは大凡次の四大系に分類される。

第一。高御産巢日・神産巢日の組合せ。並に其の組合せの組合せ。此等の組合せは之を生命と曰ふ。生命のことは後に説明す。

第二。神産巢日其れ自身の間に行はるゝ組合せ。此等の組合せは、之を原子・元素と曰ふ。並にその組合せの組合せ。之を無機・有機の化合物と曰ふ。而して此等を總稱して物質と曰ふ。

第三。高御産巢日其れ自身の間にも、神産巢日の其れと同様の組合せが行はれるものと推察される。しかしながら、其の詳細は直接には知られて居らない。が、此の存在を、假りにエーテルと呼ぶことにする。而して此のエーテルの凝集は、遂には物質原子の核ともなる。

第四。第一乃至第三の間に行はるゝ、種々雑多な組合せ。中に就いて、第一と第三の有機化合物との組合せは、之を稱して生物と曰ふ。生物と生命とは、故に嚴格に區別されねばならぬ。

以上列挙せる組合せ中、物質科學は主として第二の分類を取扱ひ、かねて第四分類の物質に関する方面にも及ぶが、物質科學は、生命が獨自の存在であることを認めない。そして生命なるものは物質附隨の現象であるといふに止まる。そこに物質科學の不備がある。心靈科學に至つては生命と物質とは、獨立しても、亦融和しても存在するものなることを認め、又之を證據立てゝも居るから、此の學問は、蓋し物質科學を一步前進せるものといへるであらう。本書は前にもいふ通り、此の心靈科學をも併せ考ふるものであるが、それにも自から到達し得る限界があるから、

古事記に臨んでは、更に推理を加ふるの要があるのである。

以上準備的考察を終り、是れより第一章に掲載せる古事記本文を續掲して、之に検討を加へることにする。

次ニ、國稚ク、浮脂ノ如クシテ、くらげナス、たゞよへるノ時、葦牙ノ如、萌
 エ騰ルモノニ因リテ、成リマセル神名ハ、宇麻志阿斯訶備比古遲神。次ニ、天
 之常立神。此ノ二柱ノ神モ、亦、獨神成リマシテ、隱身也。

「國稚ク」とあるクニのクは、組みのクで、組合せといふことを意味する。ニは土であるから、クニとは組合せが行はれて、遂には天に對する地となるものを意味することになる。「稚ク」とは無論其の初期に於てはといふことで、其の状態は水に浮べる油脂の如く、又海月の漂ふ様にも似るといふ。此の形容は何をわれゝに語るか。疑もなく、最も巧妙適切なる言ひ現し方を以て、星雲状態を描寫せるものである。即ち地も初めは星雲状態であつたといふのである。

但し爰に國といひ地といふも、太陽系全般に互る描寫なるを以て、直ちに地球の謂であると速

了してはならぬ。清輕騰りて天となり、重濁滯りて地となり、そして天地分るゝものなるが故に地とは、太陽系内の各遊星は言ふにも及ばず、太陽それ自身でさへも亦、謂ふ所の國であるといふを正しとする。唯我地球より觀望して、太陽及び各遊星が、天の存在となつて居るに過ぎないのである。それ故に此の記載は、火星にも、金星にも、或は又太陽人にさへも、等しく相通するところの原理である。太陽人などいへば、途方もないこととして、一笑に附せられる方があるかは知らぬが、それは無論われゝと同一物質の所有者であるなどとは、著者と雖も主張する程の愚を敢てするものではない。若し神靈的意識を有するそのものを人と呼び得るならば、取り敢へず、その意識を指していふと解せられたい。

他方科學方面を覗いて見ると、天文學でも、恒星の前身は星雲であることを認めて居る。が、序述表現の方式は、見る通り、全く相違せるものとなつて居る。而して古代人が星雲に對して有してゐたであらうところの觀念と、現代人の觀念とが、如何に相違するかといふ如き穿鑿は、著者に在つてはその必要を認めない。著者は現代人として、現代的解釋を施して足れりとするものである。

太陽系が星雲状態に在りし時、成りませる神が、宇麻志阿斯訶備比古遲神であるといふ。此の神が三柱の神に續いて記されあるに見て、先づ其の重要なことが窺はれる。例により、左に御名を解釋する。

ウマシとは快・美・好等に感じて發するところの聲であるが、當然の事が當然行はれたときには、決してウマシとはいはない。不可能とさへ思はるゝ程の事が、首尾克く遂行された時、感歎して之をウマシとはいふ。

今や天地分れんとして、二柱の御結びの神の働きが起つたのであるが、何がウマシと感歎せらるべき事件であつたのか。以下之を考察する。

第一には、高御産巢日それ自身の間に行はるゝ變化、組合せといつたものが先づ考へられる。が是れは寧ろ當然發展すべき過程を辿るもので、之を稱してウマシといふべきではない。

第二には、高御産巢日と同様の事が、神産巢日についてもいはれ得る。故に是れもウマシではない。

第三には、高御産巢日の働きと神産巢日の働きとが交渉合體して、そこに一つの組合せが行はれるであらうことが考へられる。そして是れこそ最後唯一のウマシである。何故ウマシといふかといへば、神産巢日は物質的の働き、高御産巢日は非物質的の働きで、此く性質相反するものが

交渉して組合せが行はれ、そこに新たなる神が生るといふ事は、不可能とさへ思はれる程のものを可能とせるもので、是れこそウマシと稱さるべきものである。又神産巢日の外相は陰、高御産巢日の外相は陽で、此の陰陽の組合はせといふ方から觀ても亦、ウマシである。斯くして新たに成れる神を、アシカビヒコチと曰ふ。是れより此の神の御名を解釋する。

アシカビとは葦の芽。ヒコは日子又は靈子。但し靈子についての説明は之を附録に譲り、差當りヒコとは男性的——能動的な生命といふ義に解して置く。尙ヒコには藥の如く、次ぎ／＼に發芽する意味も含まれる。チは物質的にあらざるものを言ひ現し、靈の字が之に當嵌めらる。血液をチといふは、血液中には生命を意味する靈が含まれて居るところからの名であり、又乳汁をチと稱するの、乳兒の生命を養ふといふところからであらうと察せられる。チ即ち靈である。

古事記は此のアシカビヒコチ神に限り、「葦牙ノ如、萌エ騰ルモノニ因リテ、成リマセル神。」として、可なり委しき註釋を加へて居るが、それは生命といふ、眼には見えないものを、形容を以て諒解せしめんとせる用意に外ならぬと思ふ。で、爰には更に、その註釋に説明を施すことにする。

葦の芽は、或る何物かによつて萌え騰るが、其の萌え騰らせもののがヒコチノ神であるといふ

から、ヒコチ神は、早速生氣又は生命といふものであること明らかである。それ故に此の神は、之を生命の神と稱することを得るであらう。尙此の神は、前記組合せの四分類中の第一に屬するものであること言ふ迄もない。

生命なるものは、古事記を研究して、既に星雲時代に萌芽發生せるものであることが上述によつて知り得られる。即ち生命は獨立的存在なのである。が、後に至り、之が物質と融合して、所謂生物となる。生物は無論星雲時代などには發生せず、唯生命の萌芽があつたのみである。爰に重ねて、生命と生物とを同一視してはならぬことを宣言する。若し之を同一視するならば、古事記は一つのお伽噺として残るより外はないことであらう。

生命を表徴するに、何故葦の芽の萌え騰ることを以てしたかは、大凡次の如き理由によるものと察せられる。

古事記の垂示が、如何なる時代になされたかは、別方面の詮索に待つこととするが、可なり古代であつたことは争はれない。而して其の時代に於ては、葦が繁茂し居れることも事實で、その葦の嫩芽がスク／＼伸び行く様は、蓋し古代人の眼前に横はるところの光景である。此の眼前の

光景を直ちに取入れて、無形であるところの生命を説くのに好題材とされたもので、其の用意・苦心の程が窺はれる。勿論葦の芽は藉りて以て説明の便に供せられたに過ぎず、星雲時代に葦が生えて居つたなど考ふべきではない。

葦に關聯して、序でながら一言せんとすることは、豊葦原水穂國といふことについてある。豊葦原水穂國とは、恰く草樹繁茂し、禾穀成熟する沃野といふ意味に解し得られる。即ち葦とは葦そのものゝみではなく、草樹を代表しての名であるやう考へられるのである。此等草樹の芽の伸び行く様が、生命を表徴するに、最もふさはしいものであるべきことは、充分首肯し得られる事柄だからである。

此の神によつて表徴されたところの生命は、諸々の生命の起源となるものであるから、之に生命素なる名を冠して然るべきやう思はれる。而して此の生命素は、物質が簡単な原子から、漸次複雑な元素・化合物となるが如く、是れ亦初めの簡單から複雑化の路を辿り、遂に組合せの四分類中の第四類、生物の生命となるのである。が、生命の起源としてのアシカビヒコチ神は、高御産巢日神・神産巢日神二柱の神と共に、宇宙の三大原理となり、獨り太陽系のみならず、恐らく他の天體にも通ずるところの原則である。世間往々宇宙の大靈なる言葉を使用するが、宇宙の大

靈とは、宇宙の大生命といふことで、此のアシカビヒコチ神を指す以外ではない。

星雲時代既に生命の萌芽を見たのであるが、それについて天文學方面では、何の認めるものがないかといふに、天文學では星雲素なるものを認めて居るものがあり、之に $H\beta$ なる符號を與へて居る。 $H\beta$ と符せらるゝからには、單なる水素原子 H にあらざること明らかである。が、それが卑屬水素であるのか。それとも生命素の如きものなのか、輕々決めて了ふ譯には往かぬが、兎に角天文學でも、或る何物かを認めて居るといふことを附け加へて差支ないであらう。

前に生命と生物とは、同一視すべきでないことを述べたが、生物のことについても、少しく述べ置くの必要を感じる。地球の生物の起源については、幾つかの説がある。が、何れも生命と生物とを混視するところに、過誤が伏在することを指摘せずには措かれぬ。

或るものは、地球生物の起源は他の天體に在つて、それが地球に移動して來つたものであると説く。是の説を唱へたものが、有名な生物學者であるところから、可なり耳を傾くるものが多かつたやうである。そして其の説の根據は、微細な生物は能く空間を移動して、地球に到達する可能性があるからといふに過ぎないのである。然しながら思へ、宇宙間無数の恒星は、元來我太陽類似のもので、何れも星雲時代を経過して、中には遊星を分出するものもあるであらうが、それ

等遊星は我地球と、謂はゞ兄弟の間柄である。然るに我地球に生物の發生となるは、他の類似の天體からの移動であるといふのでは、自己の解き得ない謎を、自家と等しかるべき他の天體に、些細な事柄に藉口して轉嫁するもので、それではホンの氣休め遁辭としかならぬと言はれても致し方があるまい。われ／＼は生物の起源を、是非とも地球上に求めて、其の神祕を開く義務がある。而して古事記は、星雲時代に於て、既に生命の萌芽を語つて居るので、恐らく近視眼者の夢想だもなし得なかつたところであらう。古事記は此の一事丈でも、低迷せる學界に一大光明を投じたものといつてよいであらう。

此の他にも、唯物觀の上に立つて、生物の起源を説けるもの二三にして止まらぬが、一々之に論難を加ふるの要もないことであるから、此等は略して置く。

次に「天之常立神」——「天」とは地に對する天であつても、單に虚空を意味する天であるとしても、何れでも差支ない。「常立」とは其の文字が示す通り、恒久不變に存在するものといふ意味。天に在つて恒久不變の存在となるものは、前掲組合せの第三分類、各種のエーテルである。若しエーテルが波長を以て示さるゝとせば、其の波長なるものにも、自から或る限界があること、猶物質元素が九十幾つかの範圍内に在ると同様であらう。而して其の幾つかの波長を以て示さるゝ

エーテルが、天の恒久存在なので、天之常立神が之を司どる神と申すのである。

比古遲神と共に天之常立神は、亦、「獨神隱身」と記されてある。其の意味も大體前に述べた通りであるが、三柱の神と別々に記されてある理由については、少しく説明を加ふるの要がある。といふのは、三柱の神は御結びの獨神隱身なるが、此の二柱の神に至つては、既に御結びの組合せにまで發展し、従つて其の働きにも趣きを異にするところがある。が、猶自然に成りませる神たることに於て異なるものではない。その同じくして異なる意味を、他の言葉にて適當に表現し難く、各別記載の法によつて、それを示さんとせるに外ならぬと思はる。否らざれば、古事記が次に

上ノ件、五柱ノ神ハ、別天神コトアマツガミ

と記しあるの同一筆法を以て、

(上の件、五柱の神は、獨神成りまして、隱身也。)

と、當然記さるべき筈だからである。然るに上記の通り各別に記されてあるところより見て、意味同じきも、其の質異なるものがあるからであらうと推察される。以下國之常立神・豐雲野神二柱の神に對しても、各別に記載されてあるが、是れ亦同様の意味であると解せられる。

上記の如く五柱の神は別天神で、それが特に記されあることは、何かそこに或る意味が含まれ居るからのことであらう。神といへば、われ／＼は直ちに個性の神様を聯想するが、五柱の神はその所謂神様ではなく、宇宙遍滿の神性であることを示さんとして、此の註脚を加へられたものに相違ない。是れは上來述べたところによつても、既に諒解されたであらうと信ずる。それにしても、その用意の周到なるには、今更ながら驚歎せざるを得ない。神の垂示たる所以である。

續いて古事記の本文。

次ニ、成リマセル神名ハ、クニノトコメチノカミ國之常立神、次ニ、トヨクモツノカミ豊雲野神、此ノ二柱ノ神モ、亦、
獨神成リマシテ、隱身也。

「國之常立」のクニも、トコダチも、前に説明せる通りである。即ち組合せが行はれて、遂には土となるものがクニ。そしてそれは常立、恒久不變の存在であるといふ。然らば、それは、神産巢日の働きが發達して原子・元素となれることを語る以外の何物でもない。原子・元素が、地上物質の恒久的存在であることに、異論のあらう筈がないからである。

「豊雲野」のトヨは、其の文字が示す通り豊富といふことである。クモのクはクニ、クムのクと同じく組合せのこと。又は野又は沼が、はつきりとした境界といふものもなく、つまり茫漠たる神

あることを示すところの語である。それ故にトヨクモとは、原子・元素が際限なく、豊富に組合はさるといふ意味となる。然らばそれは無機・有機の化合物を指すことに明らかである。但し國之常立神も、豊雲野神も、主として其の働きを示し、未だ具體化されるに至らないので、之を「獨神隱身」とはいふのである。而して此の二柱の神は、組合せの四分類では、第二に屬するものである。

續いて古事記の本文は、

次ニ、成リマセル神名ハ、ウヒヂチニカミ宇比地邇神。次ニ、スヒチニカミ妹須比智邇神。次ニ、ツクヒノカミ角杵神。
次ニ、イクグヒノカミ妹活杵神。次ニ、オフトノカミ意富斗能地神。次ニ、オホトリノカミ妹大斗乃辨神。次ニ、オモダケルノカミ淤母陀琉神。
次ニ、イザナノカミ妹阿夜訶志古泥神。次ニ、イザナギノカミ伊邪那岐神。次ニ、イザナミノカミ妹伊邪那美神。

此の五對の神々につき、其の基づくところを考ふるに、宇比地邇・須比智邇一對の神は、國之常立・豊雲野二柱の神に屬し、角杵・活杵、意富斗能地・大斗乃辨二對の神々は、阿斯訶備比古遲神に屬し、淤母陀琉・阿夜訶志古泥、伊邪那岐・伊邪那美二對の神々は、以上神々の發展性を總括すと考へられる。

それは兎に角、此等の神々は何を意味するか、第一に之を検討せねばならぬが、我太陽系は、猶獨神隱身の状態に在ることを念頭に置いて、そこから考へを進めて行くことを要するのである。

ところで「宇比地邇・須比智邇」の神であるが、此の神の名にあるヒヂは泥、ニは土であるから。ヒヂニは直ちに泥土である。然るにヒヂニの中から、ヒヂの泥を省略しても、意味に變化を來すやうなことはないから、便宜之を省略すればウニ・スニとなる。スは沙の^サス、ニは既に土であるから、スニは沙土、既ちスナである。又ウニのウは、生む又は初のウなるべきも、之には左程の意味はなく、接頭詞と考へても差支ないであらう。海とは水のミをいふが、此の水のミに接頭詞を加へればウミ、即ち海となる。然るに此のウは、又生みのウでもあり、生むは初^{ハツメ}であり、初であるから、ウニがウミとの混同を避けんが爲、彼此流通の便により、ウニのウに代ふるのに初のハを以てすれば、ウニ即ちハニの埴土となる。然らば此の一對の神は、土壤の性分を司どる神といふことになるであらう。

土壤の性分が既に出來て、次に成れる神は「角杙・活杙」の神であるといふ。クヒとは地面に樹つものをいひ、ツヌとは角の如く芽ぐむこと、イクとは生きて生長し行くことであるから、そ

れは取りも直さず植物の性分を司どる神であることを示して居る。即ち土壤が出來た後、植物の發生となつたことを語るものである。

「意富斗能地・大斗乃辨」のオフ、オホ、何れも共に生ふのオフで、オフに大の字を以てせるは偶ま音便によると考へられる。オフとは故に生あるものといふ如き意味。トは所のト。チは此方^{コなた}べは邊で彼方^{カナタ}をいふ。然るときは此の一對の神は、生あるものにして此方より、彼方へと移動し得るものを司どる神なることを語つて居る。それは即ち動物の性分といふ以外ではない。

「淤母陀琉・阿夜訶志古泥」のオモは面^{オモ}で、形貌のこと。ダルは足るので、オモダルとは、形貌が或る程度で具足すといふことである。アヤは綾、文といふことで、千種萬様であるといふ意味。カシコは畏^{かしこ}などのカシコで、慎ましげなる意味。ネは根で、根本的にといふに同じい。そこで此等を綜合するならば、動植物を通じて、萬物悉く或る一定の範圍内で形貌具足し、根本的にきちんとした恰好となる成分があるといふことになる。例へば松は松として、杉は杉として、又犬猫は犬猫として、或る程度の大きさにしかならず、又其の形も他と紛れるやうな、ふしだらなものではないといふことである。彼のアメーバの如き單細胞動物でさへも、自ら固有の形と大きさがあり、其の大きさも或る程度に達すれば、自然に分裂して了ふのである。即ち此の一對の神は

動植物を一貫するところの性分を司どる神なのである。

「伊邪那岐・伊邪那美」二柱の神には、種々様々な意味が含まれ居るも、それは次章及び附録に述べることとし、爰では單に雌雄・男女の性別を司どる神であると考へて事は足りる。凡そ生あるものにして、進化を遂げんが爲には、性別が其の基調となること架説を要せない。彼のアマメバの如き單性物に進化が伴はないのは、もとより當然である。是に由つて觀るも、此の二柱の神は、動植物を通じて、進化發展の原因を司どる神性であることが判明するであらう。

第三章 國土の固成

宇宙無始の始源、及び其の發展の次第は、大體前二章に於て説明を終る。之を要約すれば、二つの御結びの働きが起り、其の御結びが或は單獨に、或は複合して、天となり地となるところの要素が成る。その天となるところのものはエーテルと生命、地となるところのものは元素と化合物であるといふ。

此の如き發展は、恐らく各恒星にも通ずと考ふることを得るであらう。従つてエーテルと生命とは、全宇宙の天でもある。が、地となるところの物質は、各天體必ずしも同一ではなく、元素・化合物も従つて異なる。併しながら其の原則・方式等は、さう異なるものでないであらうことは、略と推察し得られる。

それは兎に角、普遍の生命たる阿斯訶備比古遲神は、植物普遍の生命角杵・活杵となり、動物普遍の生命意富斗能地・大斗乃辨となり、生命の此の二大別は、千様萬態の文をなすところの個別的形貌と、或る限度の大きさを有すべく、淤母陀琉・阿夜訶志古泥によつて限定され、遂に伊邪那岐・伊邪那美の性別生命にまで發達せることを語つて居る。此の性別生命なるものは、サチ

が分るゝところの原因であるから、四魂關係からいへば幸魂である。即ちサチの岐るゝ根本原因は畢竟するに陰と陽、雌と雄、男性と女性との差別に在る。而して男性生命を代表する伊邪那岐神、女性生命を代表する伊邪那美神は、共に何れも幸魂で、そこに何の變りはないが、附録にて述ぶる通り、其の性質は大いに異なる。以下此の幸魂の生命を、普遍の生命と區別する場合に、性命なる文字を使用することあり。念の爲附記す。

前章掲出に續く古事記の本文、

是ニ、天神諸ノ命以チテ、伊邪那岐命・伊邪那美命、二柱ノ神ニ、此ノただよへるノ國ヲ、修理固成セヨト、詔リゴチテ、天之沼矛ヲ賜ヒテ、言依サシ賜ヒキ。故、二柱ノ神、天之浮橋ニ立タシテ、其ノ沼矛ヲ指シ下ロシテ、晝キタマヘバ、鹽、許袁呂許 袁呂ニ晝キ鳴シテ、引上ゲタマフ時ニ、其ノ矛末ヨリ垂落ル鹽、累積リテ島トナル。是レ、淤能碁呂島ナリ。

前二章に見る通り、天之御中主神より、伊邪那岐・伊邪那美二柱の神に至るまで、悉く「成リマセル神」である。成りませる神とは、自然に成るといふことで、意識的に生産されたといふ意味などではない。此の點古事記は、造化の神なるものがあつて、宇宙を創造したといふのと、全然趣きを異にする。造化の神を別に立てることは、宇宙の神祕の一切を、此の造化の神に轉嫁せんとするもので、造化の神の説明を求めらるゝならば、恐らく窮せざるを得ないであらう。然るに古事記は、三神即造化の神、造化の神即宇宙であると説く。而して其れは自然に成るといふのであるから、是れ以上追窮の途がないのである。

自然に成るところの神は、初め普遍性のものであるが、漸次發達して個性的のものとなる。個性的とは、自主的意念の發露となるといふことである。而して其の發露は、伊邪那岐・伊邪那美二柱の神に始まる。古事記は此の區別を明らかにし、普遍の神性なるときは、伊邪那岐神・伊邪那美神とし、本章の如く個性、自主的意念なるときは伊邪那岐命・伊邪那美命と記してある。此の普遍と個別とを混同する時、古事記の解釋は蓋し至難である。一は主として原理を語り、他は主として行爲を語るからである。

〔註〕ミコトのミは敬稱、コトとは生命のことである。命なる文字を充てゑることは、故に最も適切である。絆切れとは生命の絶えることをいひ、又事無しとは生命に別條なかつたといふことである。言語をコトノハといふは、コト即ち生命の現れの端が、言語であるといふ。

生命なきものは言を發せず、言を發するものには生命がある。「言葉は神なり」といふのも、強ち理由のないことではない。

コトには又別の意味がある。故に命とは、個別的な生命なることを示し、その個別的な生命の現れが、伊邪那岐命・伊邪那美命なのである。

ところで神とは陰陽交渉の意味。命とは個性生命の意味。魂とは心といふ意味で、何れも同一存在ではあるが、觀點を異にするに従ひ、其の呼稱も亦異なるのである。而して神も、命も、魂も、何れも普遍的には靈と稱せられる。

さて是れより上文の解釋に移るが、先づ「天之浮橋」とは如何なる意味であるかといふことから検討しよう。橋とは彼と此とを連絡するものをいひ、彼とは天を指し、此とは地をいふから、天と地とを連絡する或る何物かを意味して、之を橋といふこと明らかである。而して伊邪那岐命・伊邪那美命は、既に性命の幸魂なるを以て、無論天の存在である。地は國之常立神・豐雲野神の働きの元素・化合物等一切の物質的成分をいふから、天の性命と、地の物質的成分とを連絡するものが、則ち橋である。而して其の橋なるものが、空間的存在であることを示して、之を浮橋といふ。

是に至り、序論四魂の説明を顧みることを要する。四魂の幸魂と、物質的細胞組織との仲介となり、之を和熟融合せしむるものは、酒の醪に於ける濁りに相應する、和魂であることを述べて置いたが、此の場合、天の性命幸魂と、物質たる地の成分とを連繫するものも亦、和魂と稱せらるべきものであること言ふ迄もない。然らば天之浮橋とは和魂をいひ、和魂とは、性命の發展複雑化に外ならず、そして是れ無くしては、性命と物質とを融合せしむることを得ないのである。「立タシテ」とは、立脚してといふ意味である。

「天神諸ノ命以チテ」とある天神は、如何なる神々を指していふか。惟ふに天地の初發より、此の二柱の神に至るまでの神々は、天之御中主神より、天之常立神に至る五柱の別天神、並に國之常立神より、此の二柱の神に至る神世七代の神々である。而して此等の神々は、何れも自然に成りませる神であるから、天神ノ命といふも、實は自然の法則・陰陽進展の道・普遍の神性といふことに過ぎないのである。即ち特定の神にあらざることは、諸とあるに見ても明らかである。

尙此に一言附け加へるが、自然の法則・陰陽進展の道・普遍の神性といふも、實は宇宙意念の發露に外ならぬから、別の宇宙に在つては、又別の宇宙意念なるものがあることであらう。が、同じく宇宙である以上、必ず共通點があるに相違ない。その共通點とは造化の三神に外ならぬが

それに迄深く立入つて論ずることを避けて「天神諸ノ命」とあるは、宇宙意念を體してといふ意味に解して足るであらう。

「此ノただよへるノ國ヲ修理固成セヨ」とあるは、國となるべき元素・化合物、土沙、動植物の成分が備はるに至つて、之を整理すべき時機に至つたことを、性命意識が意識して、其の手段に出でたといふ意味である。古事記を貫流するところのものは神、神即ち生命であるから、天體も萬物も、生命の存在を無視しては解釋不可能となる。又生命が天地萬物に通することは、何人も認めない譯には往かぬであらう。

「天之沼矛」のヌは、前章にて説明せる通り、限界がはつきり決まらぬといふ如き意味。ヌは又タマの瓊でもある。矛とは棒様のものをいふ。故に沼矛とは、はつきり形の決まらぬ棒。之を玉杖といふのなら、それでも差支ないが、後に來るところの記載と、彼此見較べるならば、それが假想の軸を意味するものなることが諒解されるであらう。

「鹽」とは水火。陰陽結合して生ずる元素・化合物等一切の謂で、それは既に國之常立、豐雲野の神性。及び宇比地邇・須比智邇の神性によつて成立を遂げて居ること、前に述べた通りである。

「許袁呂許袁呂」とは物の廻轉する狀、並に其れに伴なつて生ずる音をもいふ。

「淤能碁呂島」とは、自轉島なる文字を之に當嵌むれば、假想の軸周を自轉し、廻轉するところの天體を意味すること、幾ど説明を要せない。是に至つて沼矛が、その假想の軸を意味すといふことも問題ではなくなるであらう。但し島といふことについては、尙説明の要がある。

島とは四周水を以て圍まれたる陸地をいふ。シは水、マは圓き陸地を意味して之をシマといふ。併しながらシは暴風・旋風・木枯風等の如く風をも意味する。風とは雰圍氣が動いて生ずるものであるから、シは直ちに雰圍氣その物を指す。然るときは、空間に懸り、雰圍氣を以て圍まる、圓き天體、我地球の如きは、謂ふ所のシマであらねばならぬ。それが後に、地球上で、水に圍まれた陸地を意味することになつたのであるが、自轉島としての島の意味の方が、寧ろ先行的である。

自轉島が上記の如きものなりとすれば、空間に懸り、自轉し、廻轉しつゝある天體は、凡そ此の中に含まると解するを至當とす。故に太陽も、地球は勿論、其の他の遊星も亦皆自轉島である。

オノコロ島は是非共自轉島である。古事記が天地の初めから説き起して爰に到るのは、自然の

順序から見ても、洵に當然だからである。然るにオノコロ島を淡路の一島などとし、それは何島であるかなど穿鑿するものあるに至つては、單に地面のみを見つめて這ひ廻らんとする類で、共に天地を論ずるに足りない。

爰で從來述べ來つたところを回顧し、之を要約することも無駄ではあるまい。といふのは、一貫せる原理を辿るに便せんが爲である。即ち、

生命の幸魂であるところの兩性の神は、宇宙の自然律に則とり、和魂の組織を取り、之を浮橋連繫として、性命と物質とを連結融合せしむべく、假想軸周にコロ／＼廻轉せしめて、自轉島なる天體を創造したといふのである。是に由つて觀るときは、天體、少くとも我太陽系は、自轉を以て其の生命の表徴とするものなることが分る。是れは古事記の記すところであるが、此の事は恰も動物が、運動を其の生命の表徴とする如きものであると考へることが出来る。即ち古事記は天體も生物も、同一原則の上に立つことを語り、天地創造といふ如き深玄な原理も、往々人生卑近な事柄を以て語られ、そこに矛盾も、悖理もなきことを得るのである。而して之を能くし得るものは、唯お伽噺式物語りあるのみといつても可なりである。が、此の形式の爲に、往々其の根

本原理に到達し得ずして、宜い加減に辻褄を合はさうとするにも立到る恐れが、蓋し少しとせな
いから、われ／＼としては、どこまでも條理を離れることなく、その検討に力を致さねばならな
5。

以上の如く自轉島は、太陽系内の總ての天體を意味するが、われ／＼地上の人類としては、原則上は兎も角、自轉島とは地球その物をいふと考へても、事は自から足りる。古事記には別に斷わつてもないが、それが自然に地球の事に移つて行きつゝあることが看取されるのである。

古事記は次に、

其ノ島ニ天降りマシテ、

と記してあるが、實は自轉島を成す時、幸魂の神が、天之浮橋なる和魂組織を取り、物質的要素を、其の性命の周圍に集め、之を荒魂とせるものである。故に天體、といつても之を地球に限ることとして、その地球は爰に一生命體となつた譯である。故に地球に生を享くる生物は、悉く此の原則によつて支配されるのである。此の原則は極めて重要であるから、左に之を特記する。
生物なるものは、性命を樞機として、之に物質的要素を集成せるものゝ謂である。

と。然るに天體の生命といふことについては、尙一應の説明を要するやうであるから、序でを以て次に之を述べる。

太陽の生命は、宇宙普遍の生命——奇魂より見れば、特殊の生命なるを以て、即ち幸魂に該當するものである。然るに此の幸魂も、太陽系内に在つて普遍なるが故に、我地球の生命は、太陽の幸魂を奇魂とするところの幸魂といふことになる。之と同一筆法により、地球上に棲息する生物は、地球の幸魂を普遍の奇魂とするものであるといふ推理に導く。而してわれ／＼人類の生命は、更に複雑せる性命であると考へられるから、人類の靈魂が、縱令奇魂になりたればとて、猶且つ淨化の餘地甚だ大に、従つて直ちに宇宙の眞理に合致すべきやうもなく、迷悟の間を彷徨すと覺悟せなくてはならない。此の事は序論に於て、例を物質に取つて論じたことであるが、重ねて之に言及し、彼の無差別平等の謂れなき所以を明らかにせんとするものである。差別が幾重にも折り重なる現界に於て、漫に平等を唱ふるが如きは、多くの弊害を伴ふに役立つものとしかならぬであらうことを恐れる。

談は少しく脱線の傾きとなつたから、之を生物といふところまで引き戻して、そこから説を進めることにする。そこで生物とは生命が主動となり、物質を集成したものであるといふことであるが、此の物質集成の方法手段は、各生物必ずしも同一ではない。但し之を説くことは、本書の領域外であるから、唯生物學の所説を瞥見する文に止める。ところで生物學では、生物發達の初めを、アメーバの如き單細胞動物であると説く。そして其れを構成する細胞なるものは蛋白質・含水炭素・脂肪・水及び若干の無機鹽類を主成分とする有機化合物で、生命なるものがそれ以外に別にあるのではなく、生命はそれ等化合物の現れに過ぎぬといふのである。若し果してさうであるならば、此等有機・無機の化合物を、其の分析が示すが如く配合し、適當な物理的操作を施すならば、所謂生物を製造し得る筈である。又此の考の下に研究を進め、細胞——正しく云へば原形質であるが、その原形質の製造を試みた學者もないではなかつた。が、是れは勿論成功せずして終り、止むを得ず、

生物は生物のみより生ず

との結論に到着するより外はなかつたのである。今後と雖も、此の結論が覆へされるやうなことは起らないであらう。何となれば、人工を以て生物を製造することは、天地生成の原則に逆行するものとなるからである。既に前にも説けるが如く、生命先づ生じ、其の生命が物質を集成して

生物を生ずといふのが、其の根本原則なのである。で、原形質製造を試みた學者は、間接消極的に、此の原則の證明に役立つたやうなものであるから、強ち無益の努力をしたものとのみはいへぬであらう。

天地生成の原則が、生命を基調とすることに於ては、植物も、動物も、人類も、天體までも、盡く同一であること、既に明らかであり、我地球も無論一生命體であることに變りはない。生命體なればこそ、そこに植物も、動物も、あらゆる生物が発生し、發育生長を遂げ得るのである。此の事は植物について最も明瞭に指示し得るところであるが、餘りにも煩瑣に陥らんことを恐れ讀者の諒解に待つことにしよう。

凡そ生物には、生に伴ふところの死がある。そして死は天體に在つても同様である。生物の生死については、之を次章に述ぶることとし、爰では天體の死といふことにのみついて、卑見を述ぶることとする。

天體の死とは、天體が自轉島として成れる経緯に鑑み、自轉の失はるゝことであらねばならぬ。それは恰も動物が死すれば、運動がなくなるのと同様である。天體生命の失はれた手近な例は月である。月の自轉は既に公轉と一致して居るから、月に自轉のないことを言ふ迄もない。即ち

月は天體として既に死せるものなのである。此の死せる天體に、生物が棲息し得る筈なく、事實亦其の通りである。是れ丈でも、地球に生物が存在して居るのは、それが生命體であるからだといひ得るであらう。生物學者は、生物は生物のみより生ずと結論して居るが、原則的には、

生物は生命よりのみ生ず。

とすべきものである。果して然らば、和久産巢目を認め、靈の物質化を認めようとも、矛盾を感じるやうなことはないであらう。事は些細なるが如くに見えもするが、其の意味には重大な相違點があることを見逃がしてはならぬ。

次に古事記の記載、

天ノ御柱ヲ見テ八尋殿ヲ見立テタマヒキ

とある。柱とは、家に在つては直立して、總ての構成を可能ならしむるものをいふ。故に「天ノ御柱ヲ見立テ」とは、宇宙の法則・天地生成の原則を、しかと想定認識してといふ如き意味となる。

「八尋殿」のヤシロとは、彌廣といふ意味である。ヤヒロもイヤシロも轉訛すればヤシロとなる。社とは神の鎮座するところといふ意味であるが、實に彌廣に含まるゝ意味は、或は地點を

基地として、益々生命を擴張して行くといふことなのである。産土神の性命は、氏子の生命として擴がり行くが、それが即ち彌廣である。生命の擴がるといふことは、所謂人類の増殖といふことに外ならぬ。

「八尋殿」は後の神社となるのであるが、爰ではまだそんな意味ではない。何となれば、今は主として無形の生命について述べつゝあるので、まだ國土の分布さへ定まらぬ時代だからである。殿とは所といふに同じい。

凡そ性命の擴張には、天時地理に順應するの要があるから、之を「見立テ」るのである。即ち太陽の性命は、各遊星を八尋殿とし、地球の各地點を見立て、八尋殿として以て、今將に國土を産ませられんとしつゝある。故に之を産土神といふ。而して其の中心となるは、地球性命の分靈である。それは伊邪那岐命・伊邪那美命の分靈が各自轉島を生めると、全く同一原理による。彼の天之沼矛に相當するものは、此所では「天ノ御柱」である。然るに産土神の根本義が後には失はれて、或る土地に或る神を奉齋して、それを産土神と稱するやうにもなつた。

古事記國産みの記載は、次に掲げる通りである。

是ニ、其ノ妹伊邪那美命ニ、汝ガ身ハ、如何ニ成レルカト、問ヒタマヘバ、吾

ガ身ハ、成リ成リテ、成リ合ハザル處、一處在リト、答白シタマヒキ。爾ニ、伊邪那岐命、詔リツラク、我ガ身ハ、成リ成リテ、成リ餘レル處、一處在リ。故、此ノ吾ガ身ノ成リ餘レル處ヲ、汝ガ身ノ、成リ合ハザル處ニ、刺シ塞ギテ國土生ミ成サント爲フハ、奈何ニト、ノリタマヘバ、伊邪那美命、然カ善ケント、答白シタマヒキ。爾ニ、伊邪那岐命、然ラバ、吾ト汝ト、是ノ天之御柱ヲ行キ廻リ逢ヒテ、美斗能麻具波比セナト、ノリタマヒキ。此ク云ヒ期リテ、乃チ、汝ハ、右ヨリ廻リ逢ヘ、我ハ、左ヨリ廻リ逢ハムト、詔リタマヒキ。約リ竟ヘテ、廻リマス時ニ、伊邪那美命、先ヅ、阿那邇夜志愛袁登古ヲト、言リタマヒテ、後ニ、伊邪那岐命、阿那邇夜志愛袁登賣ヲト、言リタマヒキ。各、言リタマヒ竟ヘテ、後ニ、其ノ妹ニ、女人ヲ、言先ダチテ不良ト、告リタマヒキ。然レドモ、久美度ニ興シテ、子、水蛭子ヲ生ミタマヒキ。此ノ子ハ、葦船ニ入レテ、流シ去テツ。次ニ、淡島ヲ生ミタマヒキ。是亦、子ノ例ニハ入ラズ、是ニ、二柱ノ神、議リタマヒツラク、今、吾ガ所生リシ子、不良。猶、天神ノ御

所ニ白スベシト、ノリタマヒテ、即チ、共ニ參ヒ上リテ、天神ノ命ヲ請ヒタマヒテ……云々。

此の記載を一見するものは、恰も男女行爲の描寫でもあるかの如く思ふものがないでもない。従つて道學先生の眉を顰むるところでもあるが、是れ迄の古事記の記載を仔細に點檢するならば初め天地開闢の神々が出現し、それ等の神々は、初め普遍性のものであつたが、次第に發達して個性的となり、四魂關係からいへば、幸魂となられたといふので、それが伊邪那岐命・伊邪那美命二柱の神なのである。而して地球は自轉島としては成れるも、未だ海陸の分布さへ定まらず、山川草木もなく、唯土壌の成分や、動植物の素質やがあつたのみであるといふから、之を男女行爲の描寫と考ふるが如きは、到底有り得べき沙汰ではない。若しも四魂は相通じ、天體も動植物も同一原則の上に立つものであるとの理解があるならば、所謂擬人法によつて、之を男女行爲に藉りたとしても、何等の不都合あるべき筈がない。道學先生請ふ意を安うせよである。況んやその行爲によつて産み出されたものが、國々島々たるに於てをやである。或は國産みとは、國土の處女經營なりと説くものもあるが、産むはどこまでも産むで、強ひて之を曲解するの要などはない。そしてそこに根本的の合理性があるのである。

上掲記載によつて窺はるゝことは、

(イ)、男性は左より、女性は右より事を始むべきこと。此の件については後に述べべきも、尙其の理由に至つては、諄々しきを以て、附録に述べることにする。

(ロ)、男女相愛するも狎れず、其の間には別と律とが嚴存すること。

(ハ)、女人言に先立つべからず、所謂夫唱婦隨たるべきこと。

右の中には西洋流の道德・習慣と相反するものもある。が、天地の原則に基づける此の二柱の神の自律は、その儘に天地の原則なのである。従來世界に紛擾の種が絶へなかつたのは、此戒律が行はれないのに基因すること、蓋し少しとせないであらう。われ／＼はモ一度神の言葉なり行爲なりを見直して、之に聽従すべきではないか。

女人言に先だつは不良。不良を遂行する結果は、所産が不具になるといふ。是れは今日でも、親が子を戒めて、何々すべからずなどいふ代りに、何々をすれば罰が當るなどいつて、慣用さるゝところの同一筆法である。而してその事を過誤とし、爰に過誤は改むるに憚る勿れの戒律をも伴生せしめて居る。いかにお伽噺式手法が、他の追隨し得ざる妙味に富むかを看取し得るであらう。

さて水蛭子と淡島とは、「子ノ例ニ入ラズ」とあるが、水蛭子とは、形態がしつかりして居らぬといふことなるべく、又淡島とは、淡く消え去るといふ程の義と解せられる。それは如何なる意味であるか。此の解釋は心靈科學に待たねばならぬ。そしてそれは靈の物質化現象を固定化することの失敗を語るものと考へられる。此の現象は、新らしき種の發生、即ち和久産巢日、并に進化の原則を語るものと信ぜらるゝが、爰にそれを説く邊を有せないから、詳細のことは附録に譲ることとし、差當り男女左右の件についてのみ述べる。

一體左右といふことは、或時は同等の意味に使用され、又或時は右をよい方の意味に、左を悪い方の意味に使用される。さうかと思へば、左が上位に、右が下位にされたりする。今暫らくそれについて論ずることを止めて、上掲古事記の所載に解説を施すことにする。

「天ノ御柱ヲ見立テ」とは上述せる如く、宇宙の法則・天地の原則、即ち神がそこに在ますものと想定してといふ程の意味である。此の御柱を男神は左より、女神は右より行き廻らるゝのであるが、その行き廻つて相會せられた時が、則ち事の初めとなるのである。而して此の事の初めに當つて、天之御柱、即ち神に面するならば、男神は右、女神は左となる。

然るに此の男女の神が、他の禮拜を受ける場合には、その儘向き直つて禮拜者に面せられるか

ら、天之御柱を背後として男神は左、女神は右に位置することになる。それ故に事を始めんとして禮拜するときは男は右、女は左となるが、禮拜を受くる場合は、事をなさぬ時である。此の時は左右相反して、男は男と、女は女と相對することになる。お雛祭りの際などに、男女の雛を左右何れにすべきかに迷ふものもなしとせないが、此の記載により、男雛は向つて右、女雛は向つて左にすべきであることが知らるゝ。是れが日本の原則なのである。

次に古事記本文を續掲す。

子、淡道之穗之狭別島ヲ生ミタマヒキ。次ニ、伊豫之二名島ヲ生ミタマヒキ。此ノ島ハ、身一ツニシテ、面四ツアリ。面毎ニ名有リ、故、伊豫國ヲ、愛比賣ト謂ヒ、讚岐國ヲ、飯依比古ト謂ヒ、粟國ヲ、大宜都比賣ト謂ヒ、土左國ヲ、建依別ト謂フ。次ニ、隱伎之三子島ヲ生ミタマフ。亦ノ名ハ、天之忍許呂別。次ニ、筑紫島ヲ生ミタマフ。此ノ島モ亦、身一ツニシテ、面四ツ有リ、面毎ニ名有リ、故、筑紫國ヲ、白日別ト謂ヒ、豊國ヲ、豊日別ト謂ヒ、肥國ヲ、建日向日豊久士日泥別ト謂ヒ、熊曾國ヲ、建日別ト謂フ。次ニ、伊伎島ヲ生ミタマフ。

亦ノ名ハ、天比登都柱ト謂フ。次ニ、津島ヲ生ミタマフ。亦ノ名ハ、天之狹手
依比賣ト謂フ。次ニ、佐渡島ヲ生ミタマフ。次ニ、大倭豊秋津島ヲ生ミタマ
フ。亦ノ名ハ、天御虚空豊秋津根別ト謂フ。故、此ノ八島ゾ、先ヅ生ミマセル
所ナルニ由リテ、大八島國ト謂フ。

尙生みませる國として、吉備島、亦の名は建日方別。小豆島、亦の名大野手比賣。大島、亦の
名大多麻流別。女島、亦の名天一根。知訶島、亦の名天之忍男。兩兒島、亦の名天兩屋がある。
此の亦の名とあるは、國々島々の生命であるべきことは、自轉島の生命として、伊邪那岐命・伊
邪那美命があるのと同様であるが、それ等別名が、如何なる意味を有するかは、未だ考ふるに至
つて居らない。

さて上記大八島國とは、案するに世界各地の大陸などで、其の大陸を、假りに眼前に横はれる
日本の國々として取扱はれたのではないかと思ふ。即ち世界の國々島々の移寫なのである。何と
なれば、地球が自轉島の一員として生れ、其の自轉島に、海陸の分布が行はるべき時代となり、
地球全體から見れば、一の局地たるに過ぎない日本の國々島々が、先づ造られたとすることは、

如何にしても首肯し得られぬ事だからである。或は説をなすものがある。それは日本の國々島々
を先づ雛形として造り、之に倣つて世界の陸地を造つたのであると。しかし此の説は、地質など
も查べた上でなければ、何とも決められないことであらう。が、説くものは曰ふ、日本の地形を
一見するならば、四國・九州・本土・北海道・臺灣が、それ／＼濠洲・亞弗利加・歐亞大陸・北
亞米利加・南亞米利加と背て居ることでも、さういへるといふのである。即ち九州と本土との間
の馬關海峡は、亞弗利加と歐亞大陸との間のジブラルタル海峡に該當するのである等、相對の地
勢等迄比較して、之を主張するのである。成る程此等相對國の中には、相似形的に匹似せるもの
もあり、又さほどでもないものもあるが、大體似て居るといへば、いひ得ぬこともない。少くも
世界の何れの國にも、こんな地形を有するものはないこと又は事實である。一つの参考として
爰に之を収録する所以である。

翻つて日本文化史の語るところによれば、我日本民族は、其の基調とするところのものに、數
種民族が合流したものから成るといふ。是れあることにより、日本民族は、其の基調を失ふこと
なしに、如何なる文化をも攝取・吸收する能力を有し、支那の儒教も、印度の佛教も、物質文明
も、其の他のものも、來るもの拒まず的態度で應接し、咀嚼吸收し、世界文化市場といつたやう

な観を呈して居るといふ。が、古事記は地球性命の意識を語り、従つて各國々島々にも、各性命意識あることを認めて居る。上記の如く、日本國が世界の縮圖移寫であるやうなことを別問題とするも、文化史の語る如く、世界文化を綜合し得る所以のものは、世界國々島々の性命を綜合するに足るところの性命があるからだと見ることが、寧ろ根本的の所見であらねばならぬ。果して然るならば、日本國としては、世界の各民族をして其の特性・特長を發揮せしめ、之を綜合指導することを以て、其の性命とすべきであることを覺える。彼我共に此の自覺に達した時、世界の平和が始めて招來されることになるのであらう。

之を要するに國土産みの記載は、現日本描寫の觀あり、従つて之にのみ膠着する傾向となるが天地の原理は斯くの如き狭小なものではない。が、此の語り傳へが日本國土にて行はれたところから、そんな解釋に導くことになつたのも、強ち無理とはいへぬ所がある。併しながらわれは、最早世界を一丸として考ふべき時機となつたことを自覺し、その眼界を擴張して、古典の精神を、どこ迄も發揮するやう努力せねばならぬことを痛感する。

第四章 生物の生死

大八島國を産みて、更に六つの島々を産める二柱の神は、爰に海陸の分布を終り、次に諸の神を生み給ふ。古事記の記すところ、其れ等の神々は三十五柱の多きに上る。が、それ等神々の名を列擧することは之を略し、唯それ等の神々は山野・河海・風雨・雲霧・水火等の性命であることを述べるに止める。尙水は能く生物を生ずるが、火は之に反して、生物を死に致すものであることを序し、而して生あれば、死も亦免れぬものであることを示して居る。元來生は物の複雑化にして、死は其の簡單化である。凡そ天地間の萬物は、或は複雑化し、或は簡單化し、生死往來の間に、無限の象相顯現となつて、進化が遂行されるのである。即ち生死は形影相伴なひ、既に生を語れば、死も亦語るの要ある譯である。

凡そ生物に即して、生とは生命の賦與、死とは生命の喪失をいふ。伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は、生命の幸魂として生成發展の活動に入らせられ、前章記述の通り、國土産みの大業を成し遂げられたのである。併しながら、生死は相伴なふものである以上、死も亦語るの要あり、爰にそれを語るべき順序となつた。

火が生物を死に至らしむることについて、古事記には次の通り記されてある。

伊邪那美神ハ、火神ヲ生ミマセルニ因リテ、神避リ坐シヌ。

是の事は、簡単に火が生物の生命を奪ふことを示したものと見える。然るに火は又靈、靈は體に對しての生命を意味するから、生命が體より脱出すれば、死なる現象が起るといふやうに解し得られる。「神避り」の神とは、生命といふのと同じく、其の生命が生體から去れば、則ち死となるのである。但し生命が體より去らうとも、其の生命は生命として存在すること、前にも述べた通りであり、又古事記の之に續ける記載もさうなつて居る。

是ニ、其ノ妹伊邪那美命ヲ、相見マク欲ホシテ、黄泉國ニ、追ヒ往デマシキ。

「黄泉國」とは、體より離脱せるところの靈魂——委しくいへば序論に述べた通り、和魂なる生命であるが、此の和魂の住する世界が則ち黄泉國である。此の世界をわれわれは幽界と呼んで居るが、黄泉國とは此の幽界の謂に外ならない。何故此の幽界をヨモツといふかは、ヨモツクニはヨミノクニ、即ち暗黒界と考へてのことであらう。但し體を葬つた土中といふ如き意味に解すべきでないと言ふ迄もない。而して此の幽界なる境涯は、十萬億土の遠きに在る譯ではなく、適當な手段方法を講ずるならば、之を眼前に咫尺せしむることも可能なのである。が、其の手段方

法を講じないならば、十萬億土は愚かなこと、無限に遠いといつても可なる位である。伊邪那岐命が黄泉國に追ひ往かれたとあるは、伊邪那美命の和魂と會見したといふ迄で、何の不思議もないことである。若し伊邪那岐命の性命が、此の幽界に到られたものとするならば、それでも差支ない。但し此の場合は、幸魂が假りに先づ和魂の組織を取らるゝことを要するのであつて、是亦心靈科學の領域内に於て領解さるべき事柄である。

次に古事記の記載するところ、

爾チ、殿騰戸ヨリ、出デ向ヒマス時、伊邪那岐命、語詔ヒタマハク、我ガ那邇
妹命、吾、汝ト作レリシ國、未ダ作り竟ヘズ故、還リマサネト、ノリタマヒ
キ。伊邪那美命、答白シタマハク、悔シキ哉、速ク來マサズテ、吾ハ、黄泉戸
喫シツ。然レドモ、愛シキ我ガ那勢命、入り來坐セル事、恐コケレバ、還リナ
ムヲ、且ニ、具ラカニ、黄泉神ト、相論ハム。

とある。此の事は先づ第一に、生者と死者との間に、交通可能なることを語り、又其の情緒を赤裸々に開陳されたもので、何人も此の感なきを得ないであらう。生者必滅・會者定離といふ如き

冷酷なる一片の理窟のみで、律し得らるべきことではない。若し此の情緒を缺くに於ては、人生は蓋し落莫極まるものとなることを免れぬであらう。

「黄戸戸喫」とは所謂黄泉の客、鬼籍に入つたといふことで、一旦鬼籍に入れば、縦令神の力を以てするとも、黄泉還らせざる事は不可能なのである。

生命の和魂は幽界に入るとして、然らば肉體はどうなるか。それに就いては次の通り記されてある。

宇士^{ウツ}タカレ、とろろぎテ、頭ニハ大^{オホ}雷^{ライ}居^イリ、胸ニハ火^ホ雷^{ライ}居^イリ、腹ニハ黒^{クロ}雷^{ライ}居^イリ、陰ニハ析^{ホト}雷^{ライ}居^イリ、左ノ手ニハ若^{ワキ}雷^{ライ}居^イリ、右ノ手ニハ土^ニ雷^{ライ}居^イリ、左ノ足ニハ鳴^{ナリ}雷^{ライ}居^イリ、右ノ足ニハ伏^{フシ}雷^{ライ}居^イリ、併セテ、八雷神成リ居^イリキ。

初め伊邪那美命神避りますや、伊邪那岐命は、其の子迦具土神、火之神の頸を斬られた。此の時其の刀の血によりて八つの神生れ、又斬られた迦具土神からも。八つの神生まれた由記されてある。火は靈、血は靈であるから、畢竟靈なる生命が、幾つもの分派——分靈となつたことを語

るものである。それ等分派の神々にも亦、自から異なる働きがあり、それら神名によつて、略と其の働きを察知し得ないではないが、之を略して、上記八雷神のみの解釋に止める。但し此等神々が成れる所の頭・胸等には大なる意味がある譯ではなく、語り傳への記憶に便ならしめんが爲の用意に外ならぬやう思はる。

さて肉體に死なる現象が起れば、個體は崩壊作用を起して、漸く腐敗糜爛す。が、物質その物としては増減することなく、不滅に存在すること云ふ迄もない。而して此の物質なるものは、力を以て表現し得るものなることも亦論がない。力は動・靜・引・弛・解・凝・分・合の八つとして數へられる。

そこで「雷」が何を意味するかを、先づ考へねばならぬが、イカとは嚴又は大、ツはノと通じチは力のチなるを以て、雷とは偉大なる力、偉大とは力を稱へての言葉であつて、結局單に力といふことになる。

「大雷」の大とは多いことである。多くなり大となるには、物の合併を條件とする。即ち大雷は合ふ力で合力を意味する。但しオホはアフと國音相通するところから、合雷とすべきを、大雷とせるものとも考へられる。何れにしても、大雷即ち合力である。

「火雷」の火は能動を意味し、能動なるが故に、火雷は動力となる。

「黒雷」のクロは、コロ・コルで凝るの轉訛なるべく、黒雷即ち凝力である。

「析雷」のサクは解くことであるから、析雷は之を解力といふ。

「若雷」のワキは、分きなるを以て、若雷即ち分力である。

「土雷」のツチは、同じく力のことであるから、土雷は力の力となる。然るに普通、力は引くか押すかの何れかである。其の引く方の力を取るとせば、土雷を引力と考へることを得るであらう。

「鳴雷」のナルは、音の鳴ることである。音が鳴るには、一旦引き緊めて、急に之を弛めることを要するから、鳴ることの直接動機は弛めることである。故に鳴雷を弛力といふ。

「伏雷」はその儘力の雌伏鎮靜を示し、伏雷即ち靜力である。

以上八雷神は、それ程重要なものとも考へられぬが、それが不思議な存在でもあるかの如く誤解されんことを慮り、一應解釋を施すことにせる次第である。

さて物質なるものにつき、以上言及せる序でを以て、宇宙間に於ける物質的存在に一瞥を加へ

置くことも、強ち無駄ではあるまいと考へる。先づ我太陽系について見ることにするが、太陽系とは申す迄もなく、太陽及び遊星から成るところの一群をいふ。而して太陽及び遊星が、其の系内唯一の物質的存在である。此等遊星中最も遠きは海王星（第九遊星として冥王星が発見さるゝに至つたが、まだ普通には親しみが薄いやうであるから、暫らく海王星を最遠星として取扱ふ。）である。此の海王星軌道の直徑は約二十三億里ある。が、此の如き天文學的數字では、概念を構成するに不便であるから、假りに其の軌道面を二丈三尺のお盆と見做し、太陽及び遊星が、如何なる有様を以て其のお盆面に印せらるゝかを見ることにしよう。

太陽實際の直徑は、約三十五萬里あるが、之をそのお盆面に印することにすれば、その大きさは僅かに三厘五毛大の小球に過ぎないものとなる。太陽直徑の百〇九分の一しかない我地球は、顯微鏡的存在となつて了ひ、最大遊星たる木星も、三毛餘の微粒として、僅かに肉眼的認識を贏ち得るのみである。此の他の遊星は地球と似たり寄つたり、何れもお盆面の微分的存在としかならない。

然らば體積の方から見ればどうなるか。之が爲には、海王星軌道の直徑を直徑とする一の天球を假想し、此の天球の容積と太陽及び遊星の體積を併せたものとの比較をすればよいのである。

さうした計算の結果は、五十石の水の中に米一粒を置いたものに該當する。これが太陽系内の物質的存在としての位置を占める割合となるのである。是に觀るも、唯物觀なるものは、米一粒内の經緯を云々するに過ぎないものであることが判るであらう。唯物觀の宇宙間に立脚するところの世界觀、その世界觀に立脚するところの人生觀が、如何にはかなきものであるかと、以上で詳々しく云々する必要もなくなつた筈である。

太陽系丈ならば、まだどうやら比較の取りやうもあるが、一たび眼を太陽系外に轉ずるが最後全く桁外れの數字となるから始末が悪い。事の序でであるから、参考のために、次の如き數字を列べることにしよう。

天空に散在する無数の恒星中、我地球に最も近きは、南天のアルファ・セントウリの四光年三月餘、及び同星座の十一等星プロキシマ・セントウリの四光年二月餘である。光年とは光線の走行速度を、毎秒十八萬六千マイルとし、一年間に走行する距離をいふ。そこで一光年の距離は五、八六五、六、九六〇〇、〇〇〇〇マイルとなる。之を日本里數に換算して、約二兆四千億餘里となる。更に之を海王星の軌道面を二丈三尺と假定せる比例尺に換算するならば、此等の星迄の距離は約八里となる勘定である。彼の光度の大を以て知らるゝ犬星までが八光年餘、織女星までが二

までが十六光年といふが如く、星は皆遠距離に在るものゝみである。而して其の遠いものになると、何千、何萬、何億光年を以て數へられるものもあるといふから、比較も何も取れたものではない。而して此等星と星との間は、所謂宇宙の空間である。

是に由つて觀るときは、太陽・地球、其の他の遊星は申すに及ばず、滿天無數の星も、空間無邊の廣さに比すれば、全く物の數にも入らぬ程の、微なる存在であることが判る。然らばその空間なるものは果して何であるのか。著者は古事記を解釋することによつて得たる概念を、爰に披瀝するより他に途あるを知らない。そしてそれは第一章に述べたる「別天神」の一語に盡される。是に於て宇宙の實在なるものは、星その物などではなく、此の星をも含むところの空間を指していふこと明らかである。

宇宙の實在なるものが、理論上からも、實際上からも、空間を指していふとすれば、單なる物質なるものは、澄める宇宙の滓渣の如きものであるといへぬこともない。然らばそれには一顧の要もないかといふに、それは大いに否らずである。われ／＼人類並に一切の生物は、此の物質に藉りて、その生命の顯現となり得るからである。凡そ物は小を大とし、大を小とし、有を無とし、無を有とし、其の中道に處する所以を求むべきで、常に兩方面の凝視を怠つてはならないのであ

る。われわれ人類は、大と有との世界の居住者たると同時に、小と無との世界の居住者でもある。無の世界とは簡單には生命の世界をいひ、宇宙眞の實在なるものである。有の世界とは無論物質の世界をいひ、生命顯現の媒體の役をなしつゝある。而して此の生命顯現の世界は、其の範圍極めて狭く、又其の時間も長きを得ないが、唯此れあることによつて、宇宙の實在を認識し得るともいへる。即ち認識の世界觀がそこから生れるので、その狭く短かいのは、却つて貴いのであるかも知れない。

生命顯現の世界には、生死流轉の象相を伴ふが故に、有無の世界に通ずる道を以てするにあらざれば、正しき人生觀に達すること、蓋し至難である。伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は、國々島々を産むに當り、能く擬人的描寫法を以て、此等の消息を傳へられたものである。

上述少しく餘談に互つたが、生命離脱後に於ける屍體は、「宇士タカレとろろぎテ」とあるが如く、醜穢見るに堪へないものとなる。是れは勿論物質的方面であるが、兎に角死は見るべきにあらざること示して、

伊邪那岐命、見畏ミテ、逃ゲ還リマス。

とある所以である。又伊邪那美命よりすれば、其の醜き姿を暴露したることになり、

吾ニ辱見セタマヒテ。

の怨言ともなる。是に由つて觀るも、生の美なるは之を愛つべく、死の醜なるは速かに藏すべきで、是れが死者に對するところの禮と知るべきである。然るに伊邪那岐命は、其の醜きを見られたのであるから、伊邪那美命怒つて、

豫母都志許賣ヲシテ、追ハシメキ。

の行爲を取らるゝことにもなつた。今日われ／＼が死者に對する行事中には、之に鑑みて、少しく訂正を要する箇所がありはせぬかと思ふ。

次に古事記の本文、

爾ニ、伊邪那岐命、黒御鬘ヲ取り、投棄テタマヒシカバ、乃チ、蒲子生リキ。
是ヲ撫食ム間、逃ゲ行デマスヲ、猶追ヒシカバ、亦、其ノ右ノ御美豆良ニ刺セ
ル、湯津間櫛(五百箇爪櫛で澤山の爪ある櫛)ヲ引キ闕キテ、投棄テタマヘバ、
乃チ、筭生リキ。是ヲ拔キ食ム間ニ、逃ゲ行デマシキ。且、後ニハ、其ノ八雷

神ニ、千五百之黄泉軍ヲ副ヘテ、追ハシメキ。爾、御佩カセル十拳劍ヲ抜キテ後手ニ布伎(振さ)ツ、逃ゲ來マセルヲ、猶追ヒテ、黄泉比良坂ノ坂本ニ到ル時ニ、其ノ坂本ナル桃子ヲ三箇取リテ、待チ撃チタマヒシカバ、悉ニ逃ゲ返リキ。爾ニ、伊邪那岐命、桃子ニ告リタマハク、汝、吾ヲ助ケシガ如、葦原中國ノ、有ラユル宇都志伎青人草ノ、苦瀬ニ落ちテ、患惚マム時ニ、助ケヨト告リタマヒテ、意富加牟豆美命トイフ名號ヲ賜ヒキ。

此の記載が何を意味するか。著者としては、未だ之に合理的説明を下し得ないのを遺憾とする或は危難を免れんが爲には、食はずに利を以てずべきことを示せるものとも考へられるが、それはホンの思ひつき程度のものに過ぎない。又歴史家の中には、之を九州系と出雲系との争と見る向きもあるが、これとて充分首肯するに足る説とも思はれぬ。で、これの解釋は之を後日に保留し、單に「意富加牟豆美命」に對する解を述べるに止める。オフカムは大神、ツはハ、ミは愛づることであるから、オフカムツミ命とは、大神の愛づるものといふ程の意味である。次の記載、

最後ニ、其ノ妹伊邪那美命、身自ラ追ヒ來マシキ焉。爾チ、千引石ヲ、其ノ黄泉比良坂ニ引キ塞ヘテ、其ノ石ヲ中ニ置キテ、各對キ立タシテ、事戸ヲ度ス時ニ、伊邪那美命、言シタマハク、愛シキ我が那勢命、此ク爲タマハハ、汝ノ國ノ人草、一日ニ千頭絞リ殺サムト、マヲシタマヒキ。爾ニ、伊邪那岐命、詔リタマハク、愛シキ我那邇妹命、汝、然カ爲タマハハ、吾ハヤ、一日ニ、千五百産屋立テムト、ノリタマヒキ。是ヲ以テテ、一日ニ必ズ千人死ニ、一日ニ必ズ千五百人ナモ生ル。

伊邪那岐命と、伊邪那美命と、以上の如き問答を交されたことは、死者の靈魂が他界に存続することを、立派に語つて居るもので、今日の心靈科學の證するところでもある。若しも靈魂が他界に存続することを否定するならば、之に對して迂遠な説を以て、何とかコジツケねばならぬであらうが、それこそ無益の勞を費すものとしかならぬであらう。

幽明交通の可能なることに論が無いとして、さて無制限に之を行はんか、それより來るところの弊害も亦少なくない。特に他界の幽魂が、勝手氣儘に遊離しようものなら、現世生活を擾亂す

ることになるやも測られない。乃ち巨石を以て、幽魂の迷ひ出づるを防がんとする所以である。此く幽明境を異にせんとするに當つて、相互に別辭ことばが交はさるといふことは、極めて自然な情味を序したものとといへるであらう。尙巨石云々は有形的のことであるが、此の有形的行爲により人の無形の心にも巨石を置くことになるのである。

幽明の境は此くして遮斷されたが、それも久しきに及べば、遂には靈魂の他界存續を否定することになり、人生哲學を誤まる結果ともなる。此の際われ／＼は何れにも偏せず、古事記の記載を科學的にも證明し、以て日本哲學の樹立に力を致さねばならぬ。

「一日ニ必ズ千人死ニ、一日ニ千五百人生ル」とあるが、此の數字には、必ずしも拘泥すべきではない。死する者も多數であるが、生るゝ者は更に多く、人口は次第に増加し行くものであることを示すと考へてよい。祝詞に「天之益人」とあるのも、此の事實を指すものに外ならぬ。それ故に、人口が若し増加せぬことゝもなれば、其の國は自然に衰亡の運命に陥るものと覺悟せねばならない。

世界は既に論じたるが如く、結び生れることにより、次第に發展を遂げたものであるが、死も亦免るゝことを得ないところの因果關係に在る。又死あるが爲に、生の進化が行はるゝのである

から、生死流轉の道を窺めて、誤まらざる人生哲學を樹立し、人の世に處する所以の道を明らかにする必要がある、われ／＼の眼前に迫りつゝあることを痛感する。

一方に於て、生を呪詛せんとする惡魔的存在があつて、美名の下に、人を誘惑に驅るものもある。佛教にも從來そんな分子がないではなく、歐米文化に至つては、露骨にそれを宣傳するものさへある。我國でも、不知不識の間、之に感染せるものも少なからずあつた。近來厚生が唱へられつゝあるが、生の呪詛の根柢は、相當深いものがあるから油斷はならない。古事記を論じて此に至れば、談は是非共之に及ばざるを得ないのである。

本章は主として生と死、並に死後靈魂の存續を語るものであるが、それが例により、眼前に展開しつゝあるものを資料とせる爲、多少紛らはしいところあるを免れないものとなつた。が、四魂相關の理は、能く之に一條の通路を發見せしむるであらうことを疑はない。

尙伊邪那美命が、死を司どる神として記されあるが、此の件に關する解釋は、可なり複雑で、別方面で考へらるべきものなるを以て、差當り古事記記載の儘として置くものである。

第五章 生物の發達

本章に於ては、生物が如何なる順序により、發達し來れるかを、古事記の記載から抽出せんとするものであるが、之に先だち、例により前章の梗概を一應顧みることとする。

伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は、自主的性命幸魂なるが、其の幸魂は、天之浮橋なる和魂の組織を取られ、之を媒體として、物質的要素を其の周圍に集積し、之を想定軸周にコロコロ廻轉せしむることによつて、自轉島を生む。地球は此の自轉島の一員であるが、これに性命が賦與さるゝことによつて、一生命體となり、此の生命體は更に其の性命を分派することになるが、その分派性命が所謂産土神である。此の産土神は其の名の示すが如く、國々島々を産むこと、自轉島の生成と同一原理による。但し國々島々には無論自轉などはない。それは自轉島の一部に過ぎずして、猶われ／＼個體の臓器に、單獨自由な運動がないやうなものである。

産土神の本質は、元來以上の如きものであるのだが、後には其の意味の喪失となれること、前に述べた通りである。意味は縦令喪失されるに至つても、其の實質に於ては何等の變化なく、國々島々にはそれ／＼の幸魂があつて、其の特徴を發揮しつゝあるのである。例へば江南の橋も、

之を江北に移せば枳に化すといはるゝが如く、土地の魂異なれば、之に生ずるところのものも、亦自から異なるものとなるのである。が、之を唯物觀からすれば、單に土壤成分の差異にのみ歸することであらうが、われ／＼天地生成の原則を認め、土地にそれ／＼の性命あることを認むるものに在つては、土壤の成分と共に、土地の性命の特徴をも認めない譯には往かないのである。

世界の人類は、元と同根から出發せるものならんと説く者がある。今途中の發展の經緯を無視して、どこ迄も溯り行くなれば、もとより然りであるが、それでは意味を成さなくなる。何となれば、世界は既に國々島々に分れ、其の各々に特性が賦與されるに至つた以上、それに生ずるところの一切が、特異の生産となることを認めねばならぬからである。然るに土地の魂に特性あることを認めないといふのでは、到底全幅的の説明となり得ないことを知らねばならぬ。

古事記を一貫するところの原理なるものは、凡てに生命あることを認めるものである。故に人類の如きも、或る時代に達するや、世界の各地に、幾ど時期を同じうして發生したと認めらるべき理由がある。それは外ではなく、水蛭子と淡島との記載に見て、さう推定されるのである。これは世界各地に、靈の物質化現象が起るべき時機となつて、それが一樣に起つたと考へられるからである。

さて人の特性なるものは、近來唱へらるゝ血液の型、體質等を主なる原因となすものにあらざりて、生命に特性——幸魂あるが爲であつて、其の特性は、土地の幸魂の影響を、多分に感受するものであると考へられるのである。

而して人の特性の偉大なるものは、他を鑄陶感化する力も亦偉大であるが、是れは單に人にのみ限られたことではなく、此の理は之を土地に就いても見ることが出来る。我日本歴史を緝くものは、何人も知る通り、神功皇后の三韓征伐以來、多數の朝鮮人・支那人が移住し來つて、時には一大部落を形づくり、治外の民の如き觀を呈したこともあつたが、何時とはなしに、それ等は悉く日本人化し、日本魂の發揮者となつたものも少くないのである。

此の如きことは、勿論日本のみに限られたことではないから、此の一事を捕へて、お國自慢をしようなどとするものではない。が、土地の同化力の強いといふことは、其の國土の幸魂が偉大であるからだとはいひ得る。然らば他を同化し得ずして、之を憾みとするものゝ如きは、却つて宜しく其の國土の魂の劣弱さを歎すべきであらう。勿論他を同化するには人爲的、政治的施爲の加はれることを輕視してはならぬが、要は國土の魂に負ふ所少なからずといふに在る。

偶ま同化といふ問題に觸れて、些か横路へ外れた嫌あるものとなつたが、其の結末をつけんが爲に、モ少し此の事に關する筆を進める。

凡そ同化とは、人なり國なりの魂が、他の魂を其の鑄型に入れることで、之が爲には有形的に多大の犠牲が伴ふのを常とする。我日本も、從來之に頗る困しめられたことは事實である。それも民俗同化といふこと丈なれば、さ程のことゝも思はれぬが、之に幾層倍するところの困難は蓋し宗教に對するものである。宗教なるものに對する學問的の解釋・定義の決定などは、著者の任とするところでないが、宗教の本質ともいふべきものについては、著者亦一隻眼を有せないではない。それは、

宗。教。と。は。其。の。起。る。國。の。魂。を。以。て。他。の。民。俗。の。魂。を。同。化。せ。ん。と。す。る。一。切。の。行。爲。で。あ。る。といふに在る。我國に渡來せる宗教としては、先づ儒教と佛教とである。儒教は或は宗教ではないといふものもあるが、兎に角紀元千四百年頃、隋唐と交通するに及んで、其の文物制度を摸し我國の面目を一新する程の影響を及ぼしたことは事實である。尤も儒教は、我國本然の道德と合致する點甚だ多く、それより來るところの餘弊を除けば、大して問題とするに足らぬものである。ところが佛教に至つては、前述宗教的本質を以て襲ひ來り、印度魂を我國の魂に置き替へる。

べく、その計畫を着々進めて、或は佛舍利を神社に納め、或は諸國に國分寺を置き、以て神社制度に代らしめんとして、津々浦々に至るまで讀經の聲を漲らせ、或は本地垂跡などの説を巧みに流布し、或は佛を奉ぜざるものは人にあらずと迄威嚇し、あらゆる手段術策を講じて、其の目的の達成を期し、甚だしきに至つては、累を皇統にまで及ぼさんとせることさへあつた。日本國の魂としては茲に、容易ならざる思想國難に逢着した次第である。

元來日本の生命の意圖は、常に其の正しきを養ひ、之を世界に光被せんとするに在る。故に來る者は之を拒まぬばかりか、却つて之を懐柔同化せずには措かないのである。佛教の如きも、漸を追うて之を普遍的な大乘説に導いて、其の毒素を取り除き、以て日本化するに成功したのであるから、名は佛教であつても、其の魂は既に日本魂と成り切つたといふも妨げない程になつてゐる。それかあらぬか、大乘僧侶中には、口に佛を唱へながら、日本の特色を發揮せるものさへ、蓋し少なからずある。而して佛本來の特性が既に失はれたところの經典觀を、其の誇りとするものあるに至つては、之に拂はれた犠牲甚だ大なるものありしとはいへ、文化發達の途上、亦止むを得ない一過程であつたといへぬこともない。

儒佛兩教に對しては、上記の如きものであるが、今日の日本は、世界のあらゆる思想に直面す

る状態に置かれてある。が、日本固有の神の文化と、其の後蓄積せるところのものとを以てすれば、自から取捨の道を誤まるが如きことなき筈である。若し夫れ漫然之に臨んで、其の新らしきにのみ眩惑するものあらば、それは歴史の貴き教訓を無視するもので、好んで覆轍を踏むものとなることを免れないであらう。

此等の事項については、尙述ぶべき多くを有するが、もともと國々島々には、それ／＼の生命——魂のあることを主張せんとし、それより派生せる岐路に立入ることになつたのであるから、再び之を本來の軌道に上らせ、徐ろに本章命題の検討に進むことにしよう。

生物の發生は、地球が一生命體なるが爲であること、前にも述ぶる通りであるが、各國土にも亦それ／＼の魂あつて、一樣でないことをも述べた。が、生物と生命とを動もすれば同一視するところから、謬説に導く場合も決して少しとせない。世界文化史などを見ると、生物は往昔地球の廻轉が今よりずつと速かなりし時代、潮汐の干満が頻繁に行はれて、それに暴された海岸を、其の搖籃地とせるならんと説くものがある。或は又多數の菌類の胞子は、可なり長き間、零下何十度もの低溫に堪へ得る事實より推して、下等の生物は、他の天體より移動し來れるならんと説

く者もある。生物の天體移動説に對しては、既に其の不合理なることを指摘して置いた。が、生物が初め海岸に發生したものなるべしとの説には、稍々首肯し得らるゝ點がないではない。併しながら、生命が獨立的にも存在するものなることの認識を缺くことに於て、何れも過誤の同一轍を踏むものといへるであらう。

爰でも一度古事記の垂示を回顧するならば、古事記は星雲時代に生命素が發生し、次に植物の生命となり、動物の生命となり、それ等生命が物質を集成して生物を發生し、生物は漸を逐うて發達し、遂に今日見る如きものとなつたといふので、其の間幾千萬年の歳月を要したか、又其の發達の次第はどんなものであつたかは、之を生物學的序述に待つこととし、爰では單に、生物は初め無意識的動作を爲すに過ぎないものであつたが、漸く意識的動作を營爲するに至つたことを述べれば足るのである。

生物が意識を有するものとなつて、其の初めに意識し得たものは何であつたか。是れは疑もなく、光と闇との識別であらねばならない。それ故に、光と闇とを識別し得るに至つたことを序すれば、間接に生物の發達を語ることになるのである。古事記は此の間接序述の方法により、次の如く記して居る。

是ニ、(伊邪那岐命)左ノ御目ヲ洗ヒタマヒシ時、成リマセル神名ハ、天照大御神。次ニ、右ノ御目ヲ洗ヒタマヒシ時、成リマセル神名ハ、月讀命。

凡そ物が存在するとも、それがわれ／＼の意識に上らない間は、われ／＼の存在とはならない。今生物が發達して、光が其の視識に上つたといふのであるなら、太陽と月とが、始めて生物からの存在となつた譯である。則ち太陽と月とが、目を洗つて生るといふ所以である。此の場合天照大御神は太陽、月讀命は月を意味するが、古事記は例の筆法により、總て生命の方面に即して、此く神名を記載せるもので、此の事は序論に述べたところによつても既に承知の筈である。

爰に少しく注意を要することがある。それは第三章に於て、身體のどこ／＼に、何々の神が成るとあるのは、語り傳への記憶に便ならしめんが爲で、他に意味なきことを述べて置いたのであるが、それは大體に於てさうであるといふ迄で、此の場合の目、及び次章の鼻については、その目及び鼻が大切なのである。但し單に目及び鼻とのみ記さるゝことなく、洗ふといふ行爲が伴なつて居ることは、その異なる點である。

太陽が星雲時代を經過して、現今見る如き太陽系を成すまでに、凡そどれ程の年數を要したか元とより知ることが得ないが、科學者達の説によれば、地球が太陽から分離したのは、最短八千

萬年より、最長三十億年に及んで居る。本書ではそれを穿鑿するにも及ぶまいから、漠然可なり古い昔といふ位に考へて差支ないであらう。又月が地球から分離したのは、約五千四百萬年前ともいはるゝが、是れとても、昔しながらの存在であるといふ程度に止めて置いて可なりである。

地球に生物が発生して、此の昔ながらの存在を意識し得たのは、凡そ如何なる時代であつたか。是れ亦はつきりとは断定し難く、又その必要も認めないが、兎に角此の光を認めたとはいふことは、生物が漸く意識的動作を營爲するに至つたことを語るところの、生物發達史の側面描寫とも見らるべきものである。

太陽系は既に述ぶるが如く、自轉を條件とする一生命體系である。而して月は既に自轉を失つて居るから、天體としては既に死せるものであることをも述べた。水星も自轉と公轉とが一致して居るといふから、是れ亦月と同じ運命に陥つたものである。我地球も、潮汐が不斷海岸に激突することなどを、自轉減衰の一原因として、何時かは月の運命を追ふことにもなるのであらう。で、月なる言葉は、地球の附屬としての附きを示すと共に、月及び地球運命の最後を示唆する盡きるといふ意味も含まれ居ると思はれぬこともない。

月にも古くは、生物が棲息したことであらうが、月自體の生命が失はれるに至つて、生物も自

然絶滅に歸し、月體は滿地荒涼、今は唯爆發の殘墟があるのみである。故に之を月讀命（盡黄泉命）といふ。第三章及び其の他に於て、地球に生物の生ずるは、地球が生命體であるが爲である由を、繰り返して述べて來たが、月の現状は、消極的にそれを裏書きして居るやうなものである。

月の辿り來つたと覺しき徑路は、遠き未來には、亦地球の辿るべき徑路なのでもあらう。其の隣には、一切の生物は、地上から影を潛めることになるであらう。が、生命——靈魂は依然其の存在を續け、一切の繫累から離脱して、太陽普遍の生命に合流するか、或は他の天體の生物生命として、再び生命的躍動を演ずることになるか。恐らく其んなことであらうと想像される。生物が他の天體から移動し來るとの説も、此所まで徹すれば、始めて耳を傾くるに足るものとなる。

さて天照大御神・月讀命は、伊邪那美命神避りませる後、伊邪那岐命が生ませてまふたのであるが、伊邪那岐命單神としての所生の神々が、古事記の記載するところによれば、二十三柱の多きに上つて居る。之が爲、種々の臆説をも生ずることに立到るが、元來此の二柱の神は、生命の幸魂なること、前に述べた通りで、幸魂が分靈を派出することの可能なるは、學問的にも認められた事實である。されば單神とか雙神とかいふことは、強ひて問題とするに足らぬ筈である。唯

生むといふことに就いて、兩性を表徴するを可とする時は、之を雙神とするまでである。

伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は、男性神・女性神として、或は生命の幸魂として、或は單なる生命、生物生命として、場合に應じて種々表現されるが、更に伊邪那岐命は、伊邪那美神の守護神たることをも意味する。前に月は天體としては既に死せるものであることを述べたが、月の伊邪那美命たる月讀命も、其の守護神も、今猶實在すと考ふべきであつて、此のことは蓋し古今東西を通するところの眞實である。

伊邪那岐命は、初めより生體を有せられないから、生體を有せらるゝ伊邪那美命の如くに、死なる現象が起らない。されば古事記にも、單に、

淡海ノ多賀ニ坐レマス。

とのみ記され、又日本書紀には、

『日之少宮に止まる。』

と記され、どこにも神避りませる記載などはない。それは無論さうあるべき筈である。書紀に記されある日とは靈で生命を意味し、少とは不老不死を意味する。即ち生命の無窮に存在することを物語るものである。更に之を簡単に表明すれば、

伊邪那岐命は本來の活神、

伊邪那美命は生物生命の神、

となる。古典を読むものは、しかと此の別を立つるにあらざれば、とんでもなき誤解に陥らぬと限らぬ。此の二柱の神に對し、少しく諄々しくはあるが重ねて説明を加ふる所以である。

本章に於ては、生命一貫の理路を辿らんとして、天照大御神・月讀命の成りませる所以を述べたが、初め伊邪那岐命が、黄泉國に伊邪那美命と相見て、逃げ還られた時、次の行事が行はれたのである。即ち、

伊邪那岐大神、詔リタマハク、吾ハ、いなしこめ、しこめき、穢キ國ニ在リケ
リ、故、吾ハ、御身ノ禊セナト、ノリタマヒテ、竺紫日向之橘小門之阿波岐原
ニ到坐シテ、禊祓タマヒキ。

と記されてある。其の時投げ棄てられたものとして、御杖・御帶・御裳・御衣・御禪・御冠・手纏等が記されあるが、此等投げ棄てられた御物により、それ／＼の神成れる由記されてあるが、爰には之を略して、單に「禊祓」についてのみ所見を述べよう。

禊が身滌ぎなること申す迄もない。そしてそれは上記の如く、一切を投げ棄てることを条件とする。是に觀るときは、禊は又身殺ぎでもある。身殺ぎとは一切の慾念・妄執等から離脱し、それ等から解放さるゝことを意味するのである。從來神々は、物に即して成りまされたのであるが、禊によつて成りませる神々は、物を投げ棄てられたことによつて成ります。彼は他力により此は自力更生の道に入るべきを示された、一大教訓であると考へられる。

祓とは拂ふことの本義である。禊することによつて心も身も、既に清く、明るく、正しきものとなれば、始めて他の惡を排除し得ることになる。若しも先づ自己を正しうすることなくして、徒らに他を排除せんとせば、そこには唯惡と惡との葛藤を醸すことになるばかりである。故に祓には、是非共禊の先行を要するのである。世界に紛擾の斷へざる原因は、自己の惡は之を不問に附し、好んで他の惡を假借なく剔抉するが爲である。禊と祓とは並び行はるべき行事で、神の垂示たることをよく心得べきである。

祓に含まるゝ意味を擴張すれば、尙武となる。が、此の事は重ねて後章に述べることとし、伊邪那岐命が、禊祓につき告らせられたる記載を左に掲ぐ。

上瀬ハ瀬速シ、下瀬ハ瀬弱シト、ノリタマヒテ、初メテ、中瀬ニおりかづきた

滌ギタマフ時ニ、成リマセル神名ハ、八十禍津日神、次ニ、大禍津日神。此ノ

二神ハ、其ノ穢キ繁國ニ到リマシシ時ノ、汚垢ニ因リテ成リマセル神ナリ。次

ニ、其ノ禍ヲ直サムトシテ成リマセル神名ハ、神直毘神。次ニ、大直毘神。次

ニ、伊豆能賣神。

此の記載には、甚だ重要な教訓が含まれて居るから、次にその解釋に移ることにする。

禊祓は上述せるところにより、要するに、一切の行事施設の根本義をなすものとなることが知られる。故に禊祓は直ちに一切の行事、施設をいふと考へられる。で、「中瀬ニ滌グ」とは、上にも下にも偏することなく、中道に處すべきであることを示す。上に偏すれば急に失し、下に倚れば緩に流れるからである。而して之を瀬といふは、停頓沈滞せずして、常に流通活動すべきであるといふことを語つて居る。

此の事を解釋せんが爲には、中庸に在る一節を引用するを便とする。即ち

「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中なるものは天下の大本なり。和なるものは天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す。仲尼曰く、君

子は中庸をし、小人は中庸に反す。君子の中庸は君子にして時に中す。小人の中庸に反するは小人にして忌み憚ることなし。』とある點である。前の中道に處するといふことは、中和・中庸でなければならぬといふのと、その意味を同じうする。而して中道に處して中庸を得んが爲には、時に中せなくてはならない。即ち時宜に應じて善處することを要するのである。漁父辭には、『聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す』とあるが、是れ亦同様の意味である。何となれば、世と推移するにあらざれば、時に中することを得ないからである。

さて伊邪那岐命が中瀬に滌ぎたまへることは、中庸に處せられたところの行事である。然るに成りませるところの神は、豈圖らんや、八十禍津日神・大禍津日神である。此の事は一見不合理の觀あるものなるが、仔細に考ふれば、決してさうではないといふのは、凡そ如何なる行事でも施設でも、之を固執墨守して、常に改むるといふことを怠るならば、必ずや禍根、弊因とならぬものあることなく、孔子の曰ふ如く、時に中することを得ないものとなるのである。それ故に時に中せんが爲には神直毘・大直毘たることを要する。八十禍津日とは、個々の雑多な禍根、大禍津日とは、全體としての禍根といふことであつて、之を是正し、時に中せしむるものは、個々の禍根に對してはそれ／＼の神直毘、全體としての弊因に對しては大直毘たることを要するのであ

る。換言すれば、如何なる行事施設でも、禍根弊因とならぬものはないから、常に流通活動して是正を怠つてはならぬといふ意味である。

神直毘・大神毘により、毎に禍を直すべきであること上述の通りであるが、發して皆節に中ることを得んが爲には、それ丈ではまだ充分とは謂はれず、伊豆能賣神たることを要するのである。伊豆はいづ、賣は直ちに眼なるを以て、畢竟神直毘・大直毘に、更に嚴密なる監視檢討を加ふべきであることを示されて居るのである。是に於て我古典の垂示は、中庸などに比して一層徹底したものであることを覚えしめられる。

以上註し來つて感ぜらるゝことは、神直毘・大直毘が常に併行するにあらざれば、如何なる行事施設でも、失敗を免れぬものであるといふことである。歴史を繙けば、全體の機運が未だ醸成されざるに、局部的に、或は單獨に、或る改革を行はんとして失敗に終れる例、一二にして止まらないのを發見し得る。それにつけても、明治維新が、神直毘・大直毘の併行によつて成就されたものであることを、われ／＼はしかと銘記すべきであらう。

さて黄泉比良坂は、出雲の伊賊夜坂をいふとあるが、日向と出雲とは、地理的には可なりの距

離があつて、何かしら辻褄の合はぬ感がないでもない。で、伊邪那美命の神避りは、主として出雲に語り傳へられたもの、伊邪那岐命の禊祓は、主として日向に語り傳へられたもので、此の二つを綜合して、古事記に上記の如く記載されたのではないかと臆測されぬでもない。が、此等の點については、後考を待つこととして、一と先づ此の章を終ることにする。

第六章 天然力の脅威

地球の生物が漸く發達して、意識的に光と闇との別を知るに至れば、天然力の脅威も自然感受することを免れない。天然力とは暴風・暴雨・地震・雷霆・爆發等である。之を語る古事記の記載は、先づ

次ニ、御鼻ヲ洗ヒタマヒシ時、成リマセル神名ハ、建速須佐之男命、

とあるところから、逐次考察を進めるのを順序とする。そこで差發り「鼻」といふことであるが、鼻とは人の生氣が出入往來するところである。が、暫らく擬人の觀點に立ちながら、又地球が一生命體であるといふ事實から展望して、その雰圍氣の往來を、生物生氣の往來する鼻と見立てることの、如何に絶妙な比喩であるかに感歎せしめられる。

鼻に生氣が往來して生ずるものは風であり、雰圍氣の往來から生ずる風は、時として暴風の猛威を逞しうすることがある。此の暴風が先づ建速須佐之男である。何故に先づといふか。それは單に暴風のみを意味しないからである。ところで、建速須佐之男とある神名を、例によつて解釋することから説を進める。

「建速須佐之男」とは、簡単に健剛・疾速・粗暴・男性的といふ如き意味であることは、何人も首肯し得られるであらう。古事記には、タケといふ言葉に建の文字を使用するを常とするが、建とは直立することであり、直立より生ずる行動は直進である。直進は必然的に疾速・粗暴・男性的となるから、此の神名は、建の一字に盡きるといつてもよい位である。

ところで、伊邪那岐命が、天照大御神・月讀命に詔らせられたことについては、之を後に述ぶることとし、須佐之男命に對しては、

建速須佐之男命ニ詔リタマハク、汝命ハ、海原ヲ知ラセト、事依サシ賜ヒキ。

と記されてある。問題は此の海原の解釋如何によつて、須佐之男命の本質、使命といつたものが或は地球的の大となり、或は一局部的の小ともなるから、われわれは慎重な考察を之に加ふることを怠つてはならぬ。

天地の初發より前章までに明らかとなつたところを總括すれば、大凡次の通りである。

天地の初めに當つて、二つの働きが起り、此の二つの働き合して生命なるものを生じ、此の生命は自轉島を産む、地球は其の自轉島の一員であるが、そこに海陸の分布が行はれ、又諸々の神の發生となり、生物を生じ、その生物は漸を追うて發達し、後に記すが如く、天照大御神には高

天原を知らせ給ひ、月讀命には夜之食國を知らさるゝことになり、次に須佐之男命には、上記の如く定められたのである。此の場合、天照大御神は太陽を、月讀命は月を意味すと考ふべきであること、既述の通りなるを以て、須佐之男命が地球を意味するならんとは、概念的にも考へ得られる事柄である。

地球は既に空間に懸れる自轉島である。而して其の周圍は雰圍氣を以て被はる。第三章に於て島の意味を説明して置いたが、地球が島であるといふならば、雰圍氣は即ち海であらねばならぬ。それ故に海原とは、雰圍氣その物を稱していふことは自然の成行きである。而して雰圍氣は地球普通の物質にして、前に地球素とも名づけた酸素を主成分とし、酸素は生物生命の必須物であるところから、雰圍氣は取りも直さず、地球生命の放射圈ともいふべきものである。従つて海原たる雰圍氣は、地球其の物を代表する場合が有り得るのである。

若し此の海原を、單に人文歴史の方面からのみ觀察するならば、海外の土地經營などいふ説ともなるであらうが、それでは天地の初めから説く古事記の本旨と、餘りにも懸隔することになつて了ふ。天照大御神は高天原の天界を主宰せられ、天地相合して始めて、生命の躍動が期待され得る。後の此の二柱の神の盟も亦、此に基づく神事であるのである。

これより古事記の記載を逐次に掲載して、之に検討を加へることにしよう。

須佐之男命、命シタマヘル國ヲ知ラサズテ、八拳須、心前ニ至ルマデ、啼キイ
さちキ。其ノ泣ク状ハ、青山ヲ、枯山ナス泣キ枯ラシ、河海ハ、悉ニ泣キ乾シ
キ。

「國ヲ知ラサズ」とは、海原たる雰圍氣を統御し得ず、之を靜穩なる状態に在らしめることなきをいふ。「八拳須心前ニ至ル」とは、人が吹き荒ぶ暴風に面するとき、その長き鬚が胸もとに吹きつけられる状の形容。「いさちル」とは足摺りして泣くこと。「青山ヲ枯山ナス」とは、暴風の爲に青い草木が吹き枯らさるといふこと。「河海ヲ泣キ乾ス」とは、是れ亦暴風の爲に、河海の水も吹き飛ばされて、涸れんばかりであるとの形容。此等一として、暴風の荒れ狂ふ有様の形容でないものはない。是れ建速須佐之男が、先づ暴風を意味すといふ所以である。

雰圍氣なるものは、地球に是非とも無くてならぬものである。その無くてならぬものが、何故なれば、此くも猛威を逞しうするのであるか。是れ解決を要する問題であらねばならぬ。されば伊邪那岐命は、

何ニ由リテ、汝ハ、事依サセル國ヲ知ラサズテ、哭キいさちル。

との問を發せられて、其の答を待たせられたのである。須佐之男命の之に對する答は、

僕ハ、妣國根之堅洲國ニ罷ラムト欲フガ故ニ、泣ク。

である。「妣國」とは母國。「根之堅洲國」とは、海原が由つて生ずる根本たる、堅き地面といふ意味である。雰圍氣なるものは、地球あつての所産であるから、此の一見不可思議とさへ思はれる問答中にも、自から天地の眞を語つて餘すところなきを覺ふるものである。

雰圍氣なるものは、元來フワ／＼したもので、之を制壓して常に平穩な状態に在らしむることは、到底出来るものではない。若しも暴れることが宜しくないといふならば、その母國たる、もとの堅い地面に復歸せしめられたいといふ。是れも一應尤もな要求であるに相違ない。

須佐之男命は、實は地球の守護神で、地球そのものゝ生命ではない。そしてそれは雰圍氣を主宰すといふことで、その個體生命にあらざることが示されて居る。序論系統圖の眞魂即ちこれである。が、時として眞魂が個體生命を代表することもある。須佐之男命の地球に於けるが如きはそれである。地球個體の性命は伊邪那美命であつて、妣國と謂はるゝのも之が爲である。要するに個體生命は、悉く伊邪那美命なる總稱を以て呼ばらるゝのである。守護神のことについては、

附録に述ぶるを以て、参照されんことを望む。

須佐之男命なる名を以て示されたる霧圍氣が、いかに暴威を揮ひ、泣き叫ばうとも、固とより堅い地面に復歸さるべきではない。されば伊邪那岐命は、

汝、此ノ國ニハ、不可往ト、詔リタマヒテ、神夜良比ニ、やらひ賜ヒキ。

との處置に出でられたのであつて、是れ亦何の不思議もないことである。「此ノ國」とは母國の根之堅洲國たる地面。「夜良比」とは追ひ拂ふこと。即ち霧圍氣は、地面に復歸すること罷りならぬとして、追ひ拂はれたといふのである。お伽嘶式、擬人法描寫を以て、霧圍氣の發生と、其の性質を語つて居るところ、自からホ、笑ましくも感ぜしめられる。

此の霧圍氣も、月には既に存在せぬといふから、月の須佐之男命は、最早海原主宰の役目を終られたのであらう。が、地球は是れより發展の途に上るべく、生物を生じ、之を發達せしめて、漸く意識的の行爲をなし得る迄に至つたところなので、無論月の須佐之男命となつてはならぬ。但し地の須佐之男命も、何時かはさうなるべき運命に在ることは、此の記載によつても示唆されて居る。又地球が生命體である以上、何時かは其の生命の失はるゝ時期が來ることでもあらう。餘談ながら附け加ふるものである。

次の記載。

是ニ、速須佐之男命、言シタマハク、然ラバ、天照大御神ニ請シテ、罷リナムト、マヲシタマヒテ、乃チ、天ニ參ヒ上リマス時ニ、山川悉ニ動ミ、國土皆震リキ。

とあるは、勿論暴風などの形容ではない。然らば何を意味するか。是れは疑もなく爆發や地震などを起して、爆烟空を蔽ひ、幾ど天日に迫るといふ程の形容である。即ち須佐之男命は、單に霧圍氣が暴風の猛威を逞しうすることのみを意味せず、爆發・地震などを起すことも、其の勢力範圍に屬するのである。然るときは、須佐之男命とは、所謂天然力の發動を語ると解すべきである。そしてそれは直ちに地球を意味することにもなる。伊邪那岐命が、

吾ハ、子生ミ生ミテ、生ミノ終ニ、三貴子ヲ得タリト、ノリタマヒテ、

とある三貴子とは、天照大御神の太陽、月讀命の月、須佐之男命の地球を指していふこと疑ふべくもない。が、實はそれ等の生命を指して、子とはいふのである。但し古事記は、其の慣用の筆法により、彼此流通せしめつゝあることを知らねばならぬ。

「天照大御神ニ請シテ云々」とあるは、地球は元來太陽の分身として、其の統制下に在るが、界圍氣としては暴風となり、又地球その物としては爆發・地震ともなるが、それでも太陽として差支ないかといふ程の意味であらう。が、爆發・地震を際限もなく起されては、何とかせねばならず、之に對する處置を要するのである。そこで天照大御神に於かせられては、

待チ問ヒタマハク、何故上リ來マセルト、トヒタマヒキ。

である。之に對する須佐之男命の答としては、

僕ハ、^{キタナキコロ}邪心ナシ、唯、大御神ノ命以チテ、僕ガ哭キいさちル事ヲ、問ヒ賜ヒシ故ニ、白シツラク、僕ハ、妣國ニ往ラムト欲ヒテ哭クト、マヲシシカバ、爾、大御神、汝ハ、此ノ國ニハ不可住ト、詔リタマヒテ、神夜良比ニ、やらひ賜フ。故ニ、罷往リナムトスル状ヲ、請サムト欲ヒテコソ、參ヒ上リツレ、異シキ心無シ。

となつて居る。そして或は暴風、或は爆發・地震となるも、元より地球性命に惡意あつての事にはあらず、發展の途上、止むことを得ざる天然力の發動なのである。是れ「邪心ナシ」とも、又

「異シキ心無シ」ともいふ所以である。尙次の問答を見よ。

爾ニ、天照大御神、然ラバ、汝ノ心ノ清明キコトハ、何以シテ知ラマシト、詔リタマヒキ、是ニ、速須佐之男命、各モ各モ、宇氣比テ、子生マナト、答白シタマフ。

と記されてある。天地生成の原則を、是れ程簡明率直に、又是れ程嚴肅に宣言されたものが、世界の經典中に、果して見出し得らるるであらうか。此の記載を讀む者、何人と雖も襟を正しうせざるはなく、又自ら省みて、嚴然たらざるを得ないであらう。

抑も生成は天地の原則であるが、此の原則を遂行せんが爲には、唯清明の心が要求さるゝのみである。天照大御神が、「何故上リ來マセル」と問はせられたる答としては、正に奇想天外ともいふべきものである。が、實は奇想天外でも何でもなく、生成の原則に副はんが爲に外ならないのである。

或は上掲の記載を以て、兄弟姉妹の間に行はれたる、結婚を語ると解する向きがないでもない。併しながら、此の如き卑見を以て、天地の原則を語るところの、貴き記載に臨んではならな

い。若しも此の如き見地にのみ立たんとするならば、我古典の眞理は、どこまでも闡明されずに終ることであらう。

天照大御神と、須佐之男命との盟は、上述せるところにより、太陽性命と、地球性命との合流を語るものであること、略と諒解されたと信するが、事極めて重大なるを以て、次に古事記の記載を載録する。

天照大御神、先ヅ、速須佐之男命ノ佩カセル、十拳劔ヲ乞ヒ度シテ、三段ニ打折リテ、ぬなとモもゆらニ、天之眞名井ニ振り滌ギテ、さがみニカミテ、吹キ棄ツル、氣吹ノ狭霧ニ成リマセル、神ノ御名ハ、多紀理毘賣命。亦ノ御名ハ、奥津島比賣命ト謂ス。次ニ、市寸島比賣命。亦ノ御名ハ、狭霧毘賣命ト謂ス。次ニ、多岐津比賣命。

速須佐之男命、天照大御神ノ、左ノ御美豆良ニ纏カセル、八尺勾瓊ノ、五百津美須麻流ノ珠ヲ乞ヒ度シテ、ぬなとモもゆらに、天之眞名井ニ振り滌ギテ、さがみニカミテ、吹キ棄ツル、氣吹ノ狭霧ニ成リマセル、神ノ御名ハ、正勝吾勝

勝速日天之忍穗耳命。亦、左ノ御美豆良ニ纏カセル、珠ヲ乞ヒ度シテ、さがみニカミテ、吹キ棄ツル、氣吹ノ狭霧ニ成リマセル、神ノ御名ハ、天之善比命。亦、御鬘ニ纏カセル、珠ヲ乞ヒ度シテ、さがみニカミテ、吹キ棄ツル、氣吹ノ狭霧ニ成リマセル、神ノ御名ハ、活津日子根命。又、右ノ御手ニ纏カセル、珠ヲ乞ヒ度シテ、さがみニカミテ、吹キ棄ツル、氣吹ノ狭霧ニ成リマセル、神ノ御名ハ、熊野久須毘命。

「天之眞名井」とある井とは、水の溜る所をいふ。地上に水の溜るは、天に在るところの水が降下するからである。即ち井の本源は天に在るのである。天に在るところの水は水蒸氣、又狭霧である。故に天に在つて、眞の井であるところの水蒸氣は、之を天之眞名井といふ。然らば天の眞名井が、一地點の名などにあらざること言ふまでもない。然るに、日向の高千穂にも、丹後にも、天之眞名井と稱する地點がある。水蒸氣であるべき名が、どうして一地點などに名づけられることになつたかといへば、それは宇宙の空間を意味する高天原が、或る場所の名となつたのと同様な徑路によるものと考へられる。

「ぬなと」は瓊な音、即ち珠が揺れる音。「もゆら」はゆらく揺れる有様、従つて音も立てゝといふこと。或は又珠は魂で生命を表徴し、「もゆら」は萌え出でんとする躍動の形容でもあるやう考へられる。何れにしても、眞摯嚴肅さを表現するところの記載であることに變りはない。

「さがみ」は細噛み。噛むは醸み組むなどと同じく、仔細に融合が遂行されるといふ如き意味。以上の解釋を基として、上記の記載を要約すれば、

天照大御神が、地の性命の表徴たる、須佐之男命の劍を三つに分ち、最も嚴肅なる態度を以て水蒸氣中に滌ぎ清め、性命の融合を執り行はせられて、三女神の誕生となり、須佐之男命が、太陽性命の表徴たる、天照大御神の珠を乞うて、最も嚴肅なる態度を以て、水蒸氣中に滌ぎ清め、性命の融合を執り行はせられて、五男神の誕生となるといふのである。

意味は大體以上の如きものであるが、原文を一見すれば、優麗莊嚴の氣が、いかに横溢せるものであるかは、何人にも看取されることであらう。是れこそ新たなる性命の誕生を語つて、餘蘊なきものといへるであらう。或は此の記載は、現體を有せらるゝ神の行爲を、美化して序述せるものゝやう考へるものもないではない。が、そんなことでは、到底古事記の哲理を窮極し得べくもない。

空中に性命の合流が行はるなどいへば、之を一笑に附せんとする向きも、決して少なしとはせないであらう。が、上記の記載を強ひて曲解せない限り、是非共さうなるのであるから致し方がない。そして之を認めるものは、單に古事記のみならず、西洋にもその消息を傳ふるものが、そろ／＼現れて居る。左にマイヤースの「個人的存在の彼方」中から一節を抄出して、参考に供することにしよう。

「日頃、共鳴的に働いて居る、日界の年若き一群の男女が、生成の愛念に刺戟せられ、互に心を合せ、力を合せて、熾烈なる思慕と、想像との概念を送り出すことによりて、茲に忽然として、一個の獨立せる、光焰的存在を創造するのである。無論それは容易の業ではない。それは實に藝術的努力と、奮闘と、長期間に互る忍耐との、最後の結晶なのである。かるが故に、この世界の出生は、寧ろこれを「生命の具象的創造」と稱した方が當れるに近い、何となればそれは人間のやうに、一つの魂が母の胎内に宿るのでなくして、體外に放射されたる、想像の雰圍氣内に宿るからである。創造の原則には、そこに何等の相違もない。しかしその手續きの上には、正に天地の相違がある。」

右の一節は少しくバタ臭いが、三女神・五男神誕生の記載を、別の言葉でそつくり描寫したも

のともいへる。日本人が唯物的、神に對する固陋觀、又は歴史的穿鑿にのみ没頭して居る間に、却つて他の國の人から古事記の解釋を聽かされることにならぬとも限らぬ。それでは生を日本に享け、そして寶典古事記を有する日本人として遺憾でもあり、又此の上なき耻辱でもあらねばならない。

以上記載により、性命の一般原則ともいふべきものが抽出される。即ち、

男性性命の成るには、女性性命を表徴する珠を中心として、男性性命を表徴する劍を、その外圍となす。女性性命の成るには、男性性命を表徴する劍を中心として、女性性命を表徴する珠を、その外圍となす。

といふことである。今()符を以て珠を、△符を以て劍を表徴すとせば

男性性命は 符、女性性命は 符

を以て示さるゝ如きものとなる。而して女性は内剛にして外柔、男性は之に反して外剛内柔なることを語る。更に特殊の場合を除き、一般には、

父性を繼承するは女性、母性を繼承するは男性

であるともいひ得るであらう。

尙最後に、

男性の成るには、各出所を異にする珠。

女性の成るには、前身・中身・後身などの別なき劍。

であることも示されて居る。同じく幸魂であつても、男性は嚴格に特異の性格たることを要し、女性はそれ程でなく、比較的普遍性であつて宜しいといふことになるやう考へられる。果して然るならば、人の個性なるものも、男女によつて其の程度を異にし、教育上などにも、深く思ひを致さねばならぬ問題たることを失はない。男女同學などを唱ふるものもないではないが、我古典の示すところによつて、一顧の價值だになき説であることを斷言し得る。

佛教では女性に對して、外面如菩薩、内面如夜叉などいひ、又俗間では、女子は氏無くして玉の輿に乗るなどいひはれるが、女性に喜ばるゝところのものは、主として其の外面を飾る玉である。が、其の内面は劍であることを忘れてはならない。又此の劍あるが爲に、死して其の節を守り得るのでもある。何れにしても、劍の性質如何によつて、如夜叉ともなり、又節婦ともなる。是に於て古典の眞理を體得して世に臨むならば、希くは大過なきを得るであらうと信ずる。

次に古事記の記載

爾ニ、須佐之男命、天照大御神ニ、白シタマハク、我が心清明キ故ニ、我が生
ノリシ子、手弱女ヲ得ツ。此ニ因リテ言サバ、自ラ我レ勝チヌト云ヒテ、勝佐
備ニ、天照大御神ノ、營田ノ阿離チ、埋其溝、亦、其ノ大嘗聞看ス殿ニ、尿麻
理散ラシキ。

「勝佐備」は勝ちすさび、勝に乗じて突進する意。是れは地に在つては、地の性命が主となるべきであるといふ意にも解される。田の畔を毀ち、溝を埋め、汚物を撒布する等の行爲は、其の本質たる暴風の所爲であるが、地球性命のあらん限り、此の天然力の猛威は止まないものである。されば天照大御神に於かせられても、

尿ナスハ、醉ヒテ、吐キ散ラストコソ、我が那勢命、此ク爲ツラメ、又、田ノ
阿離チ、溝埋ムルハ、地ヲアタラシトコソ、我が那勢命、此ク爲ツラメト、詔
リ直シタマヘドモ、

と仰せられて怒し給ふ。「醉ヒテ」とは其の本心でないといふことで、其の本心の清明なることは

既に證せられて居り、少しの疑も有せられて居らない。然るに天然力なるものは、其れのみならず、既に證せられて居り、少しの疑も有せられて居らない。然るに天然力なるものは、其れのみならず、

天照大御神、忌服屋ニ坐シマシテ、神御衣ヲ織ラシメタマフ時ニ、其ノ服屋ノ
頂ヲ穿チテ、天班馬ヲ、逆剝ギニ剝ギテ、墮シ入ル、時ニ、天衣織女、見驚キ
テ、梭ヲ陰ニ衝キテ、死ニキ。故、是ニ、天照大御神、見畏ミテ、天石屋戸ヲ
閉テテ、さしこもり坐シキ。

とある通り、人を死に致すことにもなつた。天石屋戸隠れについては、之を次章に述ぶることとし、右の記載が何を語るかを先づ検討しよう。

「神御衣ヲ織ラシム」とは、天の衣、即ち雲を造ることである。雲の蒸生は、地球と太陽との作用によるが、天に生ずるところから、天照大御神之を織らしむといふ。

「天班馬」の馬とは、驅けるものといふ意味。天に在つて驅けるところのもの——電光を、「逆剝ギニ剝ギテ」即ち天から逆しまに、雲を剝いて落下せしむるといふことは、取りも直さず落雷といふことである。故に此の記載は、落雷人を震死せしめたことを語り、是れ亦天然力猛威の現

れの二つで、速須佐之男命の行爲に歸せらるべきものである。

「梭」は火、即ち雷火或は電光。「陰」とは靈を陽としての陰で、肉體を意味す。故に「梭ニ陰ヲ衝ク」とは、雷火身體を衝撃すといふ意味となる。

此の物語りの構成は、如何にも巧妙を極む。雲を神衣と見立て、それから織るといふ行爲を導き、織ることの行爲に伴なふ梭を誘ひ來り、そして織ることの行爲は女人であるところから、陰を點出して、それが肉體なることを語り、その肉體が梭(火)に衝かれて死すとし、由つて以て震死を語つて居るのである。或は又之とは反對に、雷火の火を梭と見立て、梭から織るといふ思想を導き、織ることから服屋となり、遂に雲を神衣と見立てたものとも見られる。何れにしても、其の構想絶妙なるが爲に、其の事實を正確に掴まんには、細心の考察を要するのである。

〔備考〕 著者は、工學博士伊東忠太氏が、龍に關する文献に精しき由を傳聞し、一日氏を帝國大學にお訪ねして、其の考證の開示をお願いしたことがあつた。氏の快諾により、略々次の如きことが明らかとなつた。

龍は今より約千八百年前、支那の漢時代、始めて畫として現れて居る。そして其の圖様を一覽するに、斑紋あるところの馬その儘の形を感して居り、現今見るが如きものとは全く異

なる。で、其の由つて來るところを察するに、前世界動物などから構想されたものではないかと思はれる。而して我國が往時隋唐と盛んに交通せる結果、或はそれ以前に、朝鮮などから此の圖が輸入され、その天を驅けるものといふ意味から、之を天斑馬と呼ぶことになつたのではないかとも思はれる。或は我國の傳説の方が古かつたとすれば、斑馬の思想が支那に傳はつたものかも知れない。此等の點は考證家に一任する方がよいやうである。

兎に角天斑馬は龍であることに間違ひはない。龍を我國ではタツといふが、タツとは火柱が立つといふ意味なのであらう。而して之を主宰するところの性命があつて、その性命をわれは、龍神と稱してゐる。

天然力が此くも猛威を逞しうして、脅威と損害とを與へつゝありとはいへ、

速須佐之男命ニ、千位置戸ヲ負セ、亦、鬚ヲ切り、手足ノ爪ヲモ拔カシメテ、とあるが、「千位置戸」の千位は千座で、數多きこと。置戸は被物を置く臺。それに負はせるとは猛威を抑壓してといふ如き意味。「鬚ヲ切り」とは、男性的兇暴の相を失はしめること。「手足ノ爪ヲ拔カシメ」とは、所謂爪牙を收めしむること。然るときは此の同じ天然力が、却つて蠶・稻種・粟・小豆・麥・大豆等五穀を生育せしむるのである。之に關する記載は、單にそれ程の事な

るを以て原文の抄録を略す。

須佐之男命は、既に地の性命として、天然力の發動を語るが、同じ名の神が、又武勇の神として語られて居る。此の事はたしかに歴史的事實で、多少前述せるところとは、趣きを異にするものである。が、此の事實も亦無論閑却さるべきにあらざるを以て、左に之を述べる。

その事實といふのは、彼の有名な「八俣遠呂智」に關する物語りである。此の物語りは出雲方面に傳はれるもので、紀元前餘り遠き事ではないやう考へられる。

民族史によれば、紀元前日本に居住せる民族は、アイヌを基調とするものであつたことを告げて居る。然るに一方に於ては、露西亞民族——オロシヤ族——オロチ族が、日本海沿岸に、數次に互つて、大舉移動し來つたことも明らかにされて居る。「八俣遠呂智」を解釋せんが爲は、此の事實と睨み合はせねばならぬ。そこで遠呂智とは、オロチ族であるといふ事を、先づ承認することを要する。

「俣」とは又、「八」は多數といふことであるから、「八俣遠呂智」とは幾つもの又、即ち部隊をなした、オロチ族の集團といふ意味となる。古事記には、「高志之八俣遠呂智」とあるが、高志とは

抑も如何なる意味であるか。

我國にては東風をコチといふ。然るにチは恐らくシの訛りである。コは木、シは風で、コチは實は木風なのである。其の故は、春が來れば木の芽が芽出ち、其の時吹くところの風は東風である。東風即ち木風、木の芽が芽出つ時吹く風といふ意味である。序でに附け加へるが、秋冬の候木の葉が落ちる時に吹く風を木枯風といふ。木枯風は西風であるから、若しもオロチが、出雲より見て、西の方から來たものとすれば、必ず西風のオロチと記されたことであらう。で、高志の遠呂智とは、東風の吹いて來る方に居るオロチといふことで、結局出雲から見て、東の方に居るオロチといふことになる。

此の出雲の東の方に居るところのオロチ族が、毎年幾つかの部隊をなして、秋の收穫物であるところの「稲田姫」掠奪に襲來するので、出雲族は之に困しみ、救を須佐之男命に哀願したといふのが、此の物語りの大要である。

「稲田姫」は、古事記には「櫛名田比賣」とあるが、櫛名田は奇稻田で、奇とは稻田をたゞへての言葉である。又ヒメとは産むものをいひ、稻田の産むものは、則ち秋の收穫物である。

稲田姫は、「足名椎・手名椎ノ女」なる由記されてあるが、足名椎とは足の力、手名椎とは手の

力といふことである。凡そ技藝は手を先きとするが、之に反して農耕力作は足を主とするといふところから、足を先きにし、手を後に記したものであらう。そして農耕力作の結果、生ずるところの收穫物たる稲田姫は、毎年唯の一度である。その事を古事記には、

我が女ハ、本ヨリ八稚女在リキ。是ニ、高志之八俣遠呂智、毎年來テ喫フナル。今其レ來ヌベキ時。

と記されてある。「來ヌベキ時」とあるにより、時秋冬の候に屬し、それを豫知し得るのである。

「八稚女在リキ」とある八は、多數といふ意味なるを以て、多年に互り、毎年々々掠奪に逢ひしことを語る。又稚女が如何に多くあらうとも、秋の收穫物は、唯一年分しか残つて居らないのであること言ふ迄もない。

須佐之男命は、そこで遠呂智の形如何と問はせられた。之に對する答は、

彼ガ目ハ、赤加賀知如シテ、身一ツニ、八頭八尾アリ。亦、其ノ身ニ、蘿及檜
榎生ヒ、其ノ長サ、谿八谷、峽八尾ヲ度リテ、其ノ腹ヲ見レバ、悉ニ常モ血爛
レタリ。

である。カマチは酸漿をいふから、夜、松明などを點じて來ることをいふなるべく、「蘿」とは身に甲冑などを着けて武装せることの形容。「檜」は引くものゝヒで、弓のことなるべく、「榎」は直ぐなるものゝ總稱で、箭、矛などをいふ。即ち弓箭を負ひ、矛を執つてといふ如き形容。「八頭八尾」とは幾つもの部隊が首尾相連なるをいひ、「谿八谷、峽八尾」とは、蜿蜒長蛇の列をなすことをいひ、「血爛レタリ」とは、其の「腹」たる中堅には、常に赤い旗がヒラ／＼翻る様の形容で、血流れなどでは「爛レ」といふ言葉程適切でない。以て用語の巧みさを見るべきである。何れにしてもオロチ族が、秋冬の候、毎年大學して出雲方面に襲來し、掠奪を逞しうしたことを語るものである。此のお伽噺式物語りが、今に至るまで人口に膾炙されてゐるのを見て、その魅力の大なるに今更ながら驚かされる。尙此の赤い旗を用ゆるといふことは、歴史以前から、露國の特色であつたことが窺はれる。その由つて來ること遠く、今後も、日本と對立を持續することであらう。併しながら、其の結果は大凡此の記載の如くなるのではないかとも思はれる。

須佐之男命は、計を設けて、之を勦滅されたのであるが、その後には於ける記載は、次の如きものである。

故、其ノ中尾ヲ切りシ時ニ、御刀ノ刃、毀ケキ。怪シト思ホシテ、御刀ノ前以

チテ、刺シ割キテ見ソナハシ、カバ、都牟刈之大刀在リ。故、此ノ大刀ヲ取ラシテ、異シキ物ゾト思ホシテ、天照大御神ニ、白シ上ゲタマヒキ。是ハ、草那藝之大刀ナリ。

「中尾ヲ切ル」とは、其の中堅を滅ぼし終つたといふこと。「都牟刈」は頭刈りで、鋭利なることをいふ。又「草那藝之大刀」は、書紀には叢雲劔とも記されて在る。叢雲劔といふ方が、場合に適當するやう考へられるが、此の條に對する詳細なる説明は、思ふ所あつて之を略する。又讀者に於ても、恐らくは何等かの解釋に達せられることでもあらう。

第七章 天石屋戸隠れ

天照大御神が、須佐之男命の悪しき状を見畏みて、天石屋戸を閉て、さしこまれたことは、前章記す通りである。其の悪しき状とは、落雷人を震死せしめたことを、主なる機縁となすとはいへ、一般に天日光を蔽はれ、天地晦冥となることをも指すと考へられる。

天照大御神、愈々奇シト思ホシテ、稍々戸ヨリ出デ、臨ミマス。

とある記載は、疑もなく、日蝕の終末期に、再び光明が放射する時の描寫に相違ないからである。往昔、日月及び地球の相互關係が今日と異なり、比較的長き日蝕があつたかは知らぬが、その長短に論なく、又日蝕を異常現象と見ると否とを問はず、天日の蔽はるゝ一切が、天石屋戸隠れである。但し古事記は有無相通じ、天然も人事も、同一原則の上に立つことを前提とするところから、それに含まるゝ意味も亦一と通りではない。是れ著者が、古事記を含蓄深しといふ所以である。

天照大御神が、天石屋戸にお隠れになられた結果は、

高天原皆暗ク、葦原中國、悉ニ闇シ。此ニ因リテ、常夜往ク。是ニ、萬ノ神ノ

聲ハ、狹蠅ナス皆滿キ、萬妖悉ニ發リキ。

と記されてある。即ち天下暗黒、不祥事續發、惡聲妖氛世に滿つといふ有様となつた。之を近く大正十二年の關東大震災火災に見るも、事實としては、天然力の局部的發動、——單なる地震に過ぎないのである。が、此の一事が、如何に世を混亂に陥れたかは、まだ人の記憶に残つて居る筈である。天石屋戸隠れの容易ならぬ結果を生ずる所以である。

天石屋戸隠れは、上來の如き古事記の筆法により、世界が其の統治者を失つた場合をも示唆すと考へられる。又現今の如く思想悪化し、正義は口には唱へらるゝが、その行はるゝところは、全く之と相反するのであつて、此の現象は、國際間に特に甚だしく、匕首を藏して、常に弱肉を狙ひつゝあるといつた有様である。然らば如何に之に處すべきか。著者は、事象を天日の蔽はれたるに藉りて、之に對する教訓を、われ／＼日本人に垂示されたのではないかと思ふ。其の詳細は、之を古事記本文の記載に譲り、左に其の概要を摘記する。

八百萬神を、天之安河原に集めて合議を遂げた結果、鏡・珠、その他祭祀用度を整へ、天兒屋命は詔書を奏し、手力男神は石屋戸の掖に立ちて、各々其の部署に就き、天宇受賣命は神懸りして、遂に天石屋戸が開かる。といふことである。其の神懸りの状は、異彩を放つものなるを以

て、之を左に轉載す。

天宇受賣命、天ノ香山ノ、天之日影ヲ、手次ニ繫ケテ、天真拆ヲ鬘トシテ、天ノ香山ノ、小竹葉ヲ、手草ニ結ヒテ、天石屋戸ニウチ伏セテ、踏ミトドロコシ神懸リシテ、胸乳ヲカキ出デ、裳緒ヲ、番登ニオシ垂レキ。爾、高天原ニ動リテ、八百萬神、共ニ咲ヒキ。

神懸りについては、後に述ぶることとし、此の記載を一瞥するものは、何人も、如何に樂天的氣分に滿ち居るかを看取し得るであらう。今や中原闇黒となり、萬妖併發すといふ裡にあつて、神々は多くの日子を費して、祭祀用度を整へ、嚴肅な態度を以て、之に處しつゝある間に、天宇受賣命が裸體となつて、八百萬神共に咲ふといふ如き姿體に出でたことは、思ひも寄らぬところであり、又謹慎を缺く嫌ひがあるともいへるであらう。が、大局から觀て、それには重大な意味あることを見逃がしてはならぬ。之に對する私見は、大凡次の如きものである。

天宇受賣命の神懸り態度は、災厄からの精神的離脱行爲である。不測の異變に會して周章狼狽し、或はクヨ／＼思案に迷ふが如きは、何の得るところがないのみならず、却つて害毒を波及す

ることになる恐れがある。されば神々に於かせられては、徐ろに採るべき道、講すべき手段を盡し、餘は之を天命に待つゝの處置に出でられたこと、前に述べた通りである。しかもそれは、有形的な手段、儀禮を盡したといふことになるのであるが、宇受賣命の神懸りに至つては、全くそれ等とは趣きを異にし、超然として災厄無視的態度に出でられたこと、是れ亦前掲の通りである。即ち有無相待つことによつて、茲に天石屋戸が開かるゝ段取りとなるのである。

此の兩方面は、共に日本人の學んで守らねばならぬ道であることを、著者は特筆強調せんとするものである。而して神々の執られた處置は、當然事といへぬことでもないから、之について云々することを止め、宇受賣命の態度についてのみ説を進める。

天受賣命の災厄無視、或は災厄の逸脫的行爲は、一方から眺むれば、災厄を劇化せる行爲といへる。劇化とは美化・妙化・詩化・藝術化であり、之を總括して道化といふ。日本人は、古來戦争をも詩化せんとせること、人の知る通りであるが、それは宇受賣命が、無上の災厄さへも藝術化せる精神に基づくものゝやうに見られぬこともない。

著者は第五章に於て、日本の魂は、他を同化する力の大なることを述べたが、それは畢竟道化の力大なるが爲であらねばならぬ。佛來つて佛奴となり、儒來つて儒僕となり、物質文明來つて

その前に叩頭せんとするものゝ如きは、未だ以て共に化を語るに足らず、従つて日本精神を云々するに足らぬといふに憚らない。

然りと雖も、凡そ他を化せんとせば、先づ他の渦中に入るにあらざれば、恐らく其の眞實を把握し得ないであらう。されば佛を化せんとせば先づ佛に歸し、儒を化せんとせば先づ儒を講じ、物質文明を化せんとせば、先づ物質の窮極を究めなくてはならぬ。徒らに超然として、覺者の如き態度を執つたところで、決して道を得る所以とはならない。唯之に處するの道として要求せらるゝは、常に溺者となり了らぬ覺悟を肝要とするのである。從來の日本人の中には、餘りにも溺者となり終れるもの少なからず、従つて日本をして、久しく其の眞の姿を現はさしめなかつたことにもなつた。著者は古事記の此の一節を、心を潛めて再讀されんことを念願して止まない。

宇受賣命は、一大災厄をも劇化し、藝術化せるものであるから、之を藝術の神といふ。藝術とは又綜合の美をいふが、日本には、此の綜合美の素質があり、そしてそれは日本の使命を果す所以でもある。それ故に日本には、初めから、理窟染みた哲學などは起らず、天地至高の眞理さへ一つのお伽噺としか思へぬ形式で語られ、宗教的獨斷などは影にも認められず、在るところのもののは唯詠歎あるのみである。孔子は學生の心血を濺いで、人倫道德の道を説いたが、しかもその

極致が詩に在ることを知り、自ら詩三百を編し、又優れた弟子達に向つて、其の意の在るところをも漏らされて居る。是れ孔子が、群賢に一頭地を抽ぬる所以である。彼の老子にも、釋迦にも、其他にも、哲理はあるが、詩の味到を缺く憾がないとはいへぬ。

さるにても明治天皇が、深く古典の神髓に透徹したまひ、治國安民の要道を、三十一文字の詠歎裡に寓せられ、それをさながらに實踐したまへることは、惟神日本の全貌を御示現したまへること、拜察し、賤臣轉た感激の情に禁へない。

日本の特色が、綜合化し、藝術化するに在るといふならば、藝術なるものに對して、著者の懷抱する見解を、一應述べる要があるやうである。著者は勿論一門外漢に過ぎないが、その私見といふのは、

藝術とは、個性の再現である。

といふ一語に盡くし得ると思ふ。個性とは、序論系統圖についていふならば、先づ自我意識であるが、此の意識を洗練して、遂に超理性の域に達せしめ、それ〴〵の手法の可能とする極限に於て、之を表現するならば、其所産が、個人至上の藝術品となるのである。故に藝術品の高下は主として個性の高下に歸し、表現方式の巧拙の如きは、能く第二次的のものたるに過ぎない。但

し表現方式に拙であつては、無論個性を十全に發揮し得ないことも亦事實であるから、是れも忽がせにしてよいといふ譯ではない。

此の如くして、藝術の最高内容には、最高道徳が含まるゝこととなる。學術・宗教・醫術・工藝品等のあらゆるものが、これを藝術化することによつてのみ、其の内容を豊富にし、價值を高からしむる所以となり得るのである。

茲に最も顯著な一例を擧げるが、それは外でもなく刀劍である。刀劍は何といつても兇器である。此の兇器であるところの刀劍でさへも、盛るに洗練されたる個性——道徳心を以てすれば、立派な藝術作品となるのである。而して之を能くするもの、獨り日本人あるのみといつても、恐らく過言ではあるまい。是に於て藝術品とは、用途や外形などにあるにあらずして、之を表現するところの個性如何に歸すといへるであらう。單に刀劍のみならず、日本人は、前にも言へる如く、戦争さへも美化した程で、他は推して知るべしである。

刀劍について、序でに一言附け加へるが、刀劍は元來科學的操作によつて作らるゝものなるが、單なる科學的の作品では、依然兇器たるに止まる。由來藝術品なるものは、之を科學的にすればする程、其の品位を喪失するものである。科學的とは部分的であり、共通的であり、沒個性

的の謂である。個性を没して、特色あるものを得んとしても、それは到底不可能である。世の科學を尊重するに異存はないが、之が爲に、日本の特色として誇るべき、藝術化の方面を忘却するやうなことがあつてはなるまい。一片の憂心なきを得ざる所以である。

科學は上記の如く没個性である。故に科學的の戰爭なるものは、次から次へと、残忍を極むるものとなつて行きつゝある。「體科學は戰爭によつて發達を來せる分量甚だ多く、そして科學は戰爭誘起の原因ともなる。著者は今更戰爭を美化せよなど、はいはぬが、日本としては、此の戰爭行爲に對してさへも、何とか善處の道を講じて、之を世界に宣布すべきであることを、古典の一大垂示に照して痛感するものである。

尙此の戰爭といふことに對して、別の方面で考へらるゝことは、手力男神とある件についてである。此の天石屋戸隠れに對處されたところの神々は、伊斯許理度賣命・玉祖命・天兒屋命・布刀玉命・天宇受賣命等、何れも命として記されあるが、獨り手力男神のみが神として記されてある。之には何か理由がなくてはならぬ。神とは前に説明せる通り、或る範圍内の働きを示し、そして爰に力とあるからには、有らゆる力を包含する働きをいふと解すべきである。之を現下の状態についていふならば、武力・經濟力等、あらゆる國力が則ち手力男神なのである。あらゆる國力が

具備されて、天之石屋戸が始めて打開されることになるのである。但し斯くいへばとて、前にいふ如き、残忍なる力の發現といふ如きを指すものではない。残忍なる力は、惡魔の力だからである。

さて天宇受賣命の神懸りについては、一時説明の保留をして置いたが、今はそれを説くべき順序となつたから、極めて簡単に一通り述べることにする。若し其の詳細を知らんことを欲するならば、自ら其の部門について研究されんことを望むより外はない。

そこで神懸りとは、甚だしきは狂氣であるが、普通には無我夢中、或は一心不亂といつてもよい程の現象である。然らば如何にして、そんな現象が起るか、そこが問題となるのである。

第一に神とは如何といふことであるが、それには、可なり廣い意味が含まれて居る。第一章の獨神は、陰陽の結びであり、萬象悉く陰陽の結びにあらざるはないから、宇宙の一切が神であるともいへる。第二章に於ては、結びの組合せが神の本質となりたるも、猶普通の性質を帶ぶるものであつた。然るに第三章、伊邪那岐命・伊邪那美命二柱の神に至つては、全く個性的性質を帶びられるものとなつた。此の個性を有せらるゝ神は命であるが、或は特に神様と呼んで、普通の

神性と區別することにしてもよいと思ふ。

伊邪那岐・伊邪那美二柱の神様は、次々に個性の神様を分派され、遂に生物を生じ、われ／＼人類に至るまで、進化の功を遂げさせられたのである。

上記普遍的といひ、個性的といふ區別も、勿論比較的の言葉で、それには或る限界がある。例へば天照大御神と申上げれば、太陽系内に在つては、普通の神性であらせられるが、宇宙神——天之御中主神からは、個性的であらせらるゝのである。要するに、個性的なることを示す場合には、命或は神様、普遍的なることを示す場合には、神性又は單に神と稱すと解せられたい。少くも本書に於ては、此の區別に従ふことにする。

更に神様と申しても、此の神様に又二つの系統がある。一は伊邪那岐系の神様、他は伊邪那美系の神様である。伊邪那岐系の神様は、細胞組織を取らせられぬところの、所謂その儘の活神。伊邪那美系の神様は、細胞組織を取つて、生物の性命とならせられるところの神様である。第三章に於て、伊邪那岐命・伊邪那美命二柱の神様が、自轉島を生み、其の島に天降られた由記されあるが、伊邪那美命は、自轉島その物の性命として、伊邪那岐命は、自轉島の守護神としてである。爰に重ねて其の點を明記して置く。

此の故に、神避りますことは、唯伊邪那美系の神様に限らる。是れ亦第四章に述べた通りである。伊邪那岐系の神様については、暫らく之を措き、伊邪那美系神様の神避りましたのは、所謂靈魂である。靈魂とは序論に述ぶる通り、人の死後に於ける和魂をいふ。和魂淨化すれば幸魂となり、神格具有者となる。此の幸魂が普通神様と稱せられてゐるから、伊邪那岐系の神様と、甚た紛らはしいことになる。由つて伊邪那岐系の神様は、之を單に神様、或は活神様とし、靈魂の神様は、明らかに靈魂の神様として區別すべきである。但し區別の必要なときは、何れも神様と稱して差支ないであらう。

以上で大體神様の説明を終り、是れより肉體と靈魂との關係を略記する。われ／＼個人は、既に知る通り、細胞組織と魂(生命)との、二元的存在である。そしてその魂は、之を潜在意識と稱することを得るものである。此の潜在意識が、肉體機關——大脳に印象を與ふるならば、則ち顯在意識となる。此の如くして潜在意識が充實して居る間は、何時でも顯在意識となるべく、人は覺醒状態に在る。又人に睡眠が起るといふのは、潜在意識——魂がその充實を解いて、大部分が肉體から遊離するからである。此の遊離せる魂は、銀様線を以て肉體と連繫を保ちつゝある。此の連繫の銀様線が所謂玉の緒で、此の玉の緒截斷さるれば死となる。是に於て死と睡眠との差は

玉の緒が繋がつて居るか、否かの、唯一重の差あるに過ぎないのである。

魂は上述の如く、人の覺醒時に在つて顯在意識ともなり、睡眠時には遊離状態となるものなるが、此の遊離せる魂は、遊離状態のまゝで、相互に、或は死者の靈魂などゝ交通をもなし得るのである。或は又或る方法により、自力的に睡眠状態（催眠状態にあらず或る人は之を高級睡眠ともいつて居る。）とならしめ、その遊離せる魂と、死者の靈魂との交通を開始して、之を記録に残せるものもある。英人ワアド氏の *Gone West* (邦譯死後の世界)などは、その著るしい好例の一つである。又死者の靈魂と神様との交通は、伊邪那岐命と、伊邪那美命との會見にも見ることが出来る。而して如何に之を顯在意識に上せるかは、或る手続きによるのであるが、その手続き迄爰に述べる要はあるまい。

睡眠状態にて遊離せる魂が、その状態を続けつゝ、外面から肉體に作動する時、夢遊病・離魂病などゝいはれる現象を起す。但し此の場合、他の靈魂が之に共同して作動することも有り得るのである。何れにしても、靈魂を認めないところの如何なる學說でも、魂の遊離から起る現象に對し、満足な説明を與ふことは不可能であると斷言し得る。

魂は上記の如く遊離もするが、場合により、或は自力的に、或は他動的に、之を或る程度抑壓して、その作用を停止せしむることも可能である。催眠術の如きは、術者が此の抑壓方法を取り被術者を意のままに動かすものであるが、自力的によるものは、此の術者を要せずして、他の靈魂をして作動せしめんが爲に、自ら其の意識を抑壓し、若しくは鎮靜せしむることが可能なのである。

此の自力抑制の場合、第一に顯はれるは、序論系統圖に示す眞魂である。眞魂の作動は、多くは二重人格者となることなく、無我夢中、一心不亂といった現象となる。天宇受賣命の神懸りは、蓋し此の種に屬するものであるらしい。但し次に神懸りの三つの區別を記して、讀者にその何れであるかを、取捨撰擇の便に供することにす。

神懸りの三別とは、歸神の神懸り、憑依の神懸り、神懸りの神懸りである。

歸神の神懸りは、所謂一心不亂で、是れは眞劍味の極致に於て起るを常とする。此の事は前に述べた通りである。

憑依の神懸りとは、多くは自己の魂が薄弱なる爲、他の靈的存在から直ちに抑壓され、占領されて、例の二重人格者などになる類のものをいふ。或は曰ふ者があるかも知れぬ。苟も人格を有するものにして、他に犯さるゝが如きことはあり得ないと。然れども人は正體のよくも分らぬ風

邪などにも冒され、微々たる微菌にさへ侵されて、遂には死するものさへあるに於ては、靈的存在の影響を受けぬなどは豪語し得る限りではあるまい。

神懸りの神懸りとは、神様或は靈魂の神様が、必要を認められて、一時的に起すところの現象で、個人の魂を假りに停止せしめて、神様の意思を傳達するのをいふ。此の例は、古事記の各所に見出される。が、爰には一と通りの理路を述べるに止める。

爰に本章の序述を終らんとするに臨み、最後の所見を述べることにするが、それは外ではなく古事記は申すに及ばず、大抵の經典は、深淺・濃淡・高下の差こそあれ、何れも神懸りの産物でないものはないといふことである。そして其の輕きものは、所謂インスピレーションと稱すべき程度のものもあるべく、又縱令神懸りの産物であつても、必ずしも不磨の經典のみとは限らない。加之中にはいかゞはしい神懸りの産物さへあるから、われ／＼は其の名に捕へられて、迷信の渦中に唸鳴するものとなつてはならない。是れ著者が疾呼して、讀者の注意を促さんとする所以である。

モ一つは時の古今といふ問題である。成る程知識の博いことに於て、古人は到底今人とは比較

にならない。が、叡智と勘との點に於ては、古人は知識に累せらるること極めて少なき爲、深く未知の世界に突入し得る能力を有して居ることを認めねばならぬ。古事記は無論古人の手に成るものであり、そこに知識のみで律し得られぬところのあるものがある。然るに之を誦せる稗田阿禮と雖も、或は萬一の過誤なしとは保し得られぬかも測られない。之が爲には、該博なる知識に待つ點も、蓋し鮮しとせないであらう。われ／＼は茲に何れの方面に對しても、常に敬虔の念を失ふことなく、其の民族に残されたところの經典をどこ迄も闡明して往かねばならぬ。或る民族に傳へられた經典は、當然その民族の手に藉つて闡明さるべきだからである。民族異なれば、又自から情緒を異にし、情緒は一片の理窟のみを以てしては、到底理解し得べくもないからである。特に古事記に臨んでは、此の情緒の理解なしには、解釋幾ど不可能といつてもよい位である。われ／＼は知識と、叡智と、情緒とを併せ用ゐて、此の神祕の扉を開いて、以て天地神明の貴き垂示に答へ奉らねばならぬ。

第八章 皇位繼承並三種神器

本章に於て述べんとする、皇位繼承の問題は、實に本書の主眼とするところで、此の問題が完全に明らかにされるれば、本書は其の目的を達したといつてよいのである。然るに此の問題は、天地開闢、生成發展の原理を窮めた上でなければ、眞の諒解には達し得られないのである。で、前數章の基本的説明を要し、之に微力を致した次第である。而して三種神器は、皇位繼承と密接不離の關係有るを以て、此に併せて論述するものである。

先づ三種神器から考察するが、三種神器とは申すまでもなく、珠・鏡・劍である。而して珠は天皇の御生命、鏡は太陽の性命、劍は地球の性命の表徴であることを先づ提言し、逐次其の本質の解明に進むことにする。

凡そ世に尊ぶべきもの多しと雖も、生きとし生けるものに取り、生命ほど貴重なるはない。即ち生命の表徴たる珠・鏡・劍が、無上の神器たる所以である。

先づ珠について、古事記の記載するところを左に掲ぐ。

此ノ時、伊邪那岐命、太ク歡喜バシテ、詔リタマハク、吾ハ、子生ミ生ミテ、

生ミノ終ニ、三ノ貴ノ子ヲ得タリト、ノリタマヒテ、即チ、其ノ御頸珠ノ玉緒もゆらニ取リユラカシテ、天照大御神ニ賜ヒテ、詔リタマハク、汝命ハ、高天原ヲ知ラセト、事依サシ賜ヒキ。故、其ノ御頸珠ノ名ヲ、御倉板舉之神ト謂ス。

「三貴子」とは前に述べた通り、日・月・地球であるが、その生命の幸魂なるときは、天照大御神・月讀命・須佐之男命であらせらるゝのである。

「御頸珠ノ玉緒」とある玉緒は、生命を繋ぐ線であることは既に述べた。そして此の玉緒はその儘生命を意味する。

「もゆら」は、前に述べた通り、萌える意味であるが、玉をゆらかす有様と解しても、意味は通ずる。

伊邪那岐命が御頸の珠をゆらかして、之を天照大御神に賜はるといふに於ては、太陽系全生命の萌え出づる發生權・主宰權等、舉げて之を天照大御神に依囑されたことを語る。宇宙は生命を以て充實されて居るから、此の生命を主宰することは、則ち「高天原ヲ知ラス」所以となるので

ある。而して此の生命であるところの珠は、之を「御倉板擧之神」と謂ふ。然るときは、此の神に如何なる意味が含まるゝか。例によつて次に之を解釋する。

ミは申すまでもなく敬稱。クラとは物を藏しての容れ物。物を藏するなきはカラで、空又は骸である。で、此の骸に生命であるところの魂を藏するをミクラといふ。タナは種子。故にミクラタナノ神とは、要するに、形骸を容れ物として、魂が之に藏せられ、そしてそれは中身をなすところの種子であるぞといふ意味で、その種子が天照大御神に賜はつたのであるから、太陽系全般の生命権一切は、天照大御神に歸屬せしめられたことになる。

太陽系を還元して、其の無始の始源に溯れば、天之御中主神となり、天之御中主神の太陽系内の顯現は、生命と物質とを總轄する一切である。今物質的太陽系を通覧するに、盡く太陽の統制下に在る。之と同様、太陽系内の全生命も亦、天照大御神の統制下に在るべき筈である。之を示して、御倉板擧之神を賜ふといふのである。われは常に眼を有形と無形とに馳せなくては、此の一大事さへ看過する恐れがないとはいへぬ。

尙珠に關する古事記の記載は、逐次之を攻究することとし、三柱の女性神、五柱の男性神成りませる時、

是ニ、天照大御神、速須佐之男命ニ、告リタマハク、是ノ、後ニ生レマセル、
五柱ノ男子ハ、物質、我ガ物ニ因リテ成リマセリ。故、自ラ吾子ナリ、先ニ生
レマセル、三柱ノ女子ハ、物質、汝ガ物ニ因リテ成リマセリ。故、乃チ汝子ナ
リ。此ク詔リ別ケタマヒキ。

と記されてある。天照大御神の物質は珠、即ち天照大御神の御性命なるを以て、五柱の男性神は天照大御神の御分靈として、その御性命を繼承すべきであることが、爰に確定され、此の神勅は天壤と共に變更さるゝが如きことはないのである。そして次に、

天照大御神ノ命以チテ、豊葦原之千秋長五百秋之水穗國ハ、我ガ御子、正勝吾
勝勝速日天忍穗耳命ノ知ラサム國ト、言因サシ賜ヒテ、天降シマシキ。

とある如く、重ねて之を具體的に明らかにされた。即ち水穗國は、五柱の男性神中の第一神、天忍穗耳命の知らさるゝ國、而して之を繼承さるゝは、後に記すが如く、御子邇邇藝命であらせられ、珠は永遠に傳へられて、皇位は珠と共に無窮となれる次第である。而して地上一切の生きとし生けるもの、此の男性神、及び其の御延長によつて統べらるゝことに定められたのである。誰

か太陽性命の浴下に在つて、其の統制の命に服せずと抗辯し得るものあらんやである。

「豊葦原水穂國」とは何れを指していふか。是れも恐らく問題となることであらう。が、それは草樹繁茂し、禾穀成熟する國土といふ意味に外ならぬから、廣く世界を指し、單に日本に限られた譯ではない。何となれば、世界到るところに草樹は繁茂し、禾穀は成熟するからである。然るに水穂國を日本のみに限らんとするは、所謂思想的縮小を事とするもので、結局最良の引付しの陋に墮するより外はなくなるであらう。われ／＼はも少し器局を博大にし、眼光を高處に置くにあらざれば、日本の世界的使命達成を辱かしむるに至るであらうことを恐れる。

地球の生物が、意識的動作を營爲するに至れば、弱肉強食となることも、必然の結果として或は止むことを得ない。之を荒振る國神の横行する時代といふ。國神とは、地球生命のみを生命とし、天の性命は之に與からぬものをいふ。而して地球の性命は、須佐之男命によつて代表されそれを繼承せるものが大國主神なのである。

前に各國土には、それ／＼國の魂があることを述べたが、其れ等の中の主要なる國の魂が大國主神である。而して此等國神が、天の性命と、地の性命との合體によつて成れる、一つの性命によつて統一さるゝに至れば、始めて天地の原則が遂行されることになるのである。何となれば、

地球それ自身獨立體でありながら、他方太陽の統制を受けつゝある如く、地の性命も亦、太陽性命の統制を受けねばならぬからである。

以上の如く、原則遂行の爲に、天の性命の地上降下となり、以て萬有總統の任に當らることになる。之に先だち、言向けられんが爲に、思金神、及び八百萬神の合議となり、其の結果、天菩比神を遣はして、大國主神を歸順せしめんとされたが、菩比神は、却つて大國主神に媚りつき三年に至るも復奏せなかつたのである。依つて天津國玉の子、天若日子に、天之麻迦古弓、天之波々矢を賜ひて遣はさる。天若日子は其の國に到り、大國主神の女、下照比賣を娶りて、其の國を獲んとし、八年を経るも復奏せなかつた。依つて更に雉名鳴女を遣はさる。鳴女到りし時、天佐具賣、天若日子に、此の鳥の鳴く音甚だ悪しき故、射殺したまへといふ。是に於て天若日子は天つ神の賜へる弓矢を以て、其の雉を射殺す。然るに其の矢は雉の胸を通りて、天の安河原に到る。そこで若し天若日子が、命の如く、荒振神を射たところの矢であるならば、若日子に中るなかれ、又邪心あつて射た矢であるならば、此の矢若日子に行け。といつて其の矢を衝き返す。天若日子は此の矢に中つて死す。此の天若日子は、阿遲志貴高日子根神と、酷だ相肖てゐたといふ。遂に伊都之尾羽張神に諮りたるに、尾羽張神は、

此ノ道ニハ、僕ガ子、建御雷神ヲ遣ハスベシトマヲシテ、乃チ、貢進リキ。爾天鳥船神ヲ、建御雷神ニ副ヘテ、遣ハシキ。是ヲ以テテ、此ノ二神、出雲國伊那佐之小濱ニ降り到キ、十掬劍ヲ抜キテ、浪ノ穂ニ、逆シマニ刺シ立テ、其ノ劍の前ニ跌坐テ、其ノ大國主神ニ問ヒタマハク、天照大御神、高木神ノ命以テテ、問ヒニ使ハサリ、汝がうしははける葦原中國ハ、我が御子ノ知ラサム國ト言依サシ賜ヘリ。故、汝ガ心奈何ニゾト、トヒタマフ時ニ、爾、答白マツラク僕ハ得白サジ、我ガ子、八重事代主神、是レ白スベキヲ……。

と申さる。先づ「天鳥船神」であるが、前に「鳥之石楠船神、亦ノ名ハ、天鳥船神ト謂ス」と記されており、鳥船とは帆掛船のことであると解せられる。併しながら鳥とは空を飛ぶもの、船とは浮ぶものをいふから、現代の飛行機・飛行船の如きも亦、天鳥船神であらねばならぬ。古事記は古今を通じて、一貫の原理を語るものと解釋し得るが故に、天鳥船神の現代の現れは、飛行機飛行船の神と解して、何等の差支あるを見ないのである。

「尾羽張」とは、先きの廣い劍といふことなるを以て、尾羽張神とは、要するに劍の神といふ程の義。「建御雷」のタケは所謂武。古事記には、タケに止戈の武の文字を當嵌むることなく、常に建の文字を當嵌めてあるが、此の文字の方寧ろ適切である。此の事は前にも述べたことであるが、建とは樹立して犯されざるの意。又文の横なるに對して、武は縦であるといふ義ともなる。文武兩道とは、故に縦横を兼ね備ふること、車の兩輪の如く、相並行することを意味するのではない。

ミカツチはミイカツチの略。ミは敬稱、イカは嚴又は大、ツチは例の力なるを以て、建御雷とは、有形無形に互り、或は天然力をも含むところの、絶大莊嚴な威力といふことである。此の絶大なる威力を以て、今大國主神に臨みつゝある。そこで大國主神は、其の犯すべからざるを察してか、何も申すことはないが、子の八重事代主神あり、何か申すことあるやも測られない。然るに彼は、鳥の遊び、魚取りに往きて、未だ還らずといふ。依つて天鳥船神を遣はし、八重事代主神を徴し來らしめ、大國主神に問へると同様の事を以て問ふ。八重事代主神は、その父の大神に天神の御子に奉りたまへと答へ、遂に、

其ノ船ヲ踏ミ傾ケテ、天逆手ヲ、青柴垣ニ打成シテ、隠リマシキ。
と記されある如き行爲に出でた。

建御雷神は、更に大國主神に、尙白すべき子有りやと問はる。大國主神は、子、建御名形神あるが、此の他には無き由を答ふ。此くいふ間に、其の建御名形神、千引石を、手末に撃ち上げて出て來り、力を競べんと申し出で、

我レ先ヅ、其ノ御手ヲ取ラムトイフ。故、其ノ御手ヲ取ラシムレバ、即チ、立
氷ニ取り成シ、亦、劍双ニ取りナシツ。故爾、懼レテ退キ居リ、爾ニ、其ノ建
御名形神ノ手ヲ取ラムト、乞ヒ歸シテ取レバ、若葦ヲ取ルガ如、搯ミ批ギテ、
投ゲ離チタマヘバ、即チ逃去ニキ。故、追ヒ往キテ、科野國之洲羽海ニ迫ノ到
リテ殺サムトシタマフ時ニ、建御名形神、白シツラク、恐シ、我ヲナ殺シタマ
ヒゾ。此ノ地ヲ除キテハ、他處ニハ行カジ、亦、我父大國主神ノ命ニ違ハジ、八
重事代主神ノ言ニ違ハジ、此ノ葦原中國ハ、天神御子ノ命ノマニク、貢獻ラ
ムトマラシキ。

建御雷神は、大國主神に、汝の子等、天津御子に献らんといふが、汝の心如何にと問はる。大國主神は、命の隨に献るべき由答ふ。此くて國讓りの大事は、爰に結着を見たのである。

是れより前述を一括して概説することにするが、此の記載は、事を現世界に藉るも、實は神の世界の事件であることを、先づ心得て置かねばならぬ。そして神の世界の事は、又現象世界の事ともなるから、謂はゞ豫言といつたものともなる。世界の現状に照らして、其の感特に深いものがある。

さて最初に使はされた「天菩比神」のホは含、ヒは日なるを以て、天照大御神の命を含んで使する神が、則ちホヒノ神である。之を現代にすれば使臣といつたものである。然るに此の使臣は却つて大國主神に媚附して、久しきに及ぶも其の命を果さない。大國主神とは、現代では世界の大國をいふ。此の大國に使用する使臣は、從來此の記載の示す通りの態度でなかつたとはいへぬ嫌がないではなかつた。大國とは勿論一ヶ國を指すとは限らない。

次には「天若日子」を使はされたが、若とは譯であり、日本の使命といつた理由を告げて、大國の諒解を得んが爲に、特派された使臣といつたものであらう。此の特派使臣は、大國主神の女下照姫を娶りて復奏せないとあり、是れには或る重大な意味があるやう考へられるが、濫りに揣摩臆測を逞しうすべきでないから、卑見の開陳を差控へる。

「麻迦古弓」のマは接頭辭。カコは鹿兒で、鹿などを射る強弓をいひ、「波波矢」は幅の廣い羽を

植ゑた矢。

「雉名鳴女」とは、泣き言をいふものをいふ。人道はどうか、正義は何であるとか、宗教はかうであるとかいつて、泣訴するものを指していふ。然るに探女の言によれば、此等は悉く不利のもののみである。よつて總ては黙殺されるのである。

「八重事代主神」のヤへは、幾重にもといふこと。コトは物事。シロは知る、知らすなどで治めること。故に八重事代主神に含まれるところの意味は、幾重にもく、條約取り決めなどを結んで、事を平和に治めようとすることをいふ。そして條約取り決めに結ばばそれに安心し、遊鳥取魚などの遊戯に耽るのである、その條約取決めといふものは、大國主神の子なのである。といふ譯は、凡そ如何なる條約取決めでも、大國の首唱によつて生れざるはないから、之を大國主神の子とはいふ。

しかるに、折角の條約取り決めも物は言はない時節となり、「船ヲ踏ミ傾ケテ」とは、其の海軍力を抑制してといふ意味となるであらう。又、「逆手」には諸説あるやうであるが、指先きを自己の方に向けて拍子することで、恭順の意を表すと考へられる。

「建御名形神」のタケは、武に含まるゝ一切の謂。ミは敬稱。形はそのまゝ形で、有形的軍備といふ程の意味。そして有形的軍備を擴張整備することは、是れ亦大國の首唱にかゝるから、之を大國主神の子とはいふ。

「科野國洲羽之海」の洲とは、水の中に在る土地をいひ、島といふに同じい。而して地球の陸地は島であり、又洲でもある。其の洲をわれくは五大洲に分つて居る。で、此の洲を日本の立場からいふときには、亞細亞洲を指すと考へてよいであらう。羽は葉と同じく端、又は外れであるから、スハノウミとは、亞細亞洲の外れの海といふことになる。

「科野國」とは、單り日本の信濃國とのみ考へてはならぬ。シナは品物の品、そしてその品とは人間の品種といふ意味である。人間の品種には黄色人・白人・黒人等がある。又とは境界のはつきりせぬことであるから、シナヌクニとは、黄色人・白人・黒人等が混交して居る土地を指していふこと明らかである。そしてそれは亞細亞洲の端れの海といふから、地理的に大凡の見當がつく。或は又洲の端れは今の言葉でいへば、領海といふ意味に取れないこともない。

有形的軍備の建御名形神は、敗走して命を乞ふに當り、その海より外へは出ぬことを誓つて、死を容るされたといふのを見て、何かしら、さういふことに、自然なつて來るのではないかと想像される。

尙日本の信濃國も、オロシヤ族と、アイヌ族とが接觸混淆した土地であるから、所謂シナヌ國である。

以上珠とは凡そ懸け離れた問題となつたが、是れも天降に先立つ準備工作であるから、一應は述べて置かねばならぬ事件である。而して天忍穗耳命は、此の如く準備されつゝある間に、御子生れます。御名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命と謂さる。忍穗耳は、此の御子を降されんことを、改めて天照大御神に請ひ白さる。そこで大御神は、

白シタマフ隨ニ、日子番能邇藝命ニ科詔セテ、此ノ豊葦原水穂國ハ、汝、知ラザム國ナリト、言依サシ賜フ。故、命ノ隨ニ、天降リマスベシト、ノリタマヒキ。

爰に注意すべきことは、天忍穗耳命は、一たび天照大御神の詔をお受けし、御子邇邇藝命を降されんとするに當り、改めて大御神に請ひ奉り、大御神は上記の如く、邇邇藝命に詔され、其の後同様の事が、會て古事記に記載されてゐないことである。この事は爾來その儘繼續されて、豊葦

原水穂國を知召されつゝあることを語る。水穂國は世界、豊葦原中國は日本、そして日本は邇邇藝命の御延長によつて統治されつゝあるが、世界には幾多の大國あり、此等の大國主神は、未だ國を獻げる迄になつてゐないから、神の事業としても、蓋し容易な業ではない。手力男神・天石門別神を副へて、降し賜ふ所以である。忍穗耳命・邇邇藝命の御神名の解釋は、載せて附録に在る。

爾ニ、天兒屋命・布刀玉命・天宇受賣命・伊斯許理度賣命・玉祖命、並セテ、
五伴緒ヲ支リ加ヘテ、天降リマサシノタマヒキ。是ニ、其ノ遠岐志八尺勾瓏・
鏡、及、草薙劍、亦、常世思金神・手力男神・天石門別神ヲ副ヒ賜ヒテ、詔リ
タマヘラクハ、此ノ鏡ハ、專ラ我ガ御魂トシテ、吾前ヲ拜クガ如ク、いつき
奉レ。

「伴緒」とは、伴の玉の緒。即ち五つの性命を隨伴せらる。此等生命は、何れもそれらの祖先の性命となられたことは、古事記記載の通りである。

上記手力男神については、前に述べて置いたが、常世思金神・天石門別神も亦、神として記さ

れてある。常世思金とは、終世變らぬところの思慮智謀。天石門別とは、難局打解の力といふ如き意味であらう。而してそれは個別的でないから、之を神と申すのである。

邇邇藝命の天降らるゝ状については、次の如く記されてある。

故、爾ニ、天津日子番能邇邇藝命、天之石位ヲ離レ、天八重多那雲ヲ押分ケテ
伊都ノちわき、ちわきテ、天浮橋ニうきじまり、そり立タシテ、竺紫ノ日向ノ
高千穂ノ、くじぶるたけニ、天降リマシキ。

此の記載を見んとするものは、暫らく現象世界の着目から、一切脱せられんことを要する。天に坐します性命の神なればこそ、其の稜威を輝やかし、雲路を押分け、聳然として下降さるゝのである。

「天浮橋ニうきじまり」を諒解せんが爲には、第三章を顧みることを要する。即ち地球は、空間に懸れる自轉島であるといふことである。自轉島は故に一つの浮島である。で、空間に浮島の如く浮ぶを、ウキジマリといふ。天浮橋は地球の幽體、和魂であるといふことも、既に述べた通りである。是に於て次の如き解釋に到達する。

邇邇藝命の御性命幸魂が、天降らるゝに當り、地球の幽體裡に在つて、和魂の組織を取らせられ、其のお姿が、空間に於ける浮島の如くならせられたといふのである。

此の和魂は後に述ぶる如く、荒魂たる細胞組織を取らせらるゝことになるが、此の和魂の御降下は、神武天皇の詔として、書紀に、神武東征に先だつこと、一百七十九萬二千四百七十餘歳なる由記されてある。

ところで此の數字は、何人にも思議を許さぬものであるから、われ／＼としては、詔を其の儘に承知するより外はないのである。

神の世界なるものは、如何に悠久な昔しから存在し、そして性命なるものは、無窮に存続するものであることを承認するならば、此の大數字に對しても、さまで當惑を感じるやうなことはないのである。が、現實の世界にのみ住せんとするものには、何とか附會の説を立てねば承知が出来ないのであらう。で、一年とは一日のことである。故に此の數字は、三百六十五を以て除すべきである。然るときは約五千年となり、人文發達の歴史から見ても、寔に恰當せる數字であるなど、合理的らしき説を立てるものもある。が、神武天皇時代に在つて、一日を一年と數へたなどゝは、會て聞いたこともなければ、又事實でもない。故に此の合理的らしき説も、事實に合はぬ

ものとなることを免れない。

以上の如き説を立てんとするものは、恐らく自からは満足し得るであらうが、自己満足のみでは致し方があるまい。又、何等かの説を立て得ないものは、ソツと之を黙殺して過ごさうとすることでもあらう。が、そんなことでは、日本古典に、一貫せる原理を求むることなどは到底望まべくもない。

われ／＼は爰で、地球發達の歴史を回顧する必要を感じる。その歴史に於て、無統制なる放縱生活を營み、跋扈跳梁を逞しうしたるは、蓋し龍屬時代、前世界動物時代などであらう。地球が太陽系の一員として、太陽統制の下に在る以上、地球生物の生命も亦、太陽性命の統制を受けるのが當然である。而して其の統制の任に當るべく、太陽性命の命を受けて下降されたのが、邇邇藝命であらせられる。そしてそれは神武以前、一百七十九萬餘歳であるといふ。が、生物生命の統制程至難なるはなく、今日まで遅々たる状態に在る有様で在る。それといふのは、生物の進化發達は、徐々に行はれるのであるから、何共致し方がなかつたことと察せられる。

英國知名の哲學者、エヴァンス氏は、『太陽神とその神政』なる一論文を發表して居るが、その中から、参考の爲に、一節を抄出する。即ち、『すでに太陽系として、一人の大主宰神が存在する以上、われ／＼地上の人間世界にも亦、人間としての大主宰者が存在すべき筈である。然るに地上には、まだ之と決つた主宰者が無いのは、何故であるか。現在私としては、之を人間世界の組織の未完成、又人類文化の未發達に歸する以外に、解釋の途を知らない。云々』とあるが、此の説は我が古事記を眞解することによつて、或る程度の諒解に達し得られるであらうことを疑はない。さるにてもわれ／＼日本人として、古事記の眞解が何よりも必要であることを痛感せしめられる。

餘談はさて措き、以上の如くして、邇邇藝命の天降となつた。然るに地球は須佐之男命として猶活動を續けつゝあるが故に、地のあらゆる生命が、天の性命の絶對統制に服するに至るのは、恐らくは近き將來に期し難かるべく、自由と統制、交々相待ち、一步々々進化の途を辿るのであらう。世界に猶多くの大國主神があるのも、當分或は止むを得ないのかも知れぬ。

「遠岐志八尺勾璣」のヤサカはイヤサカの彌榮である。マガタマは眞魂の訛である。海原のウミハラがウナハラとなる如くに、マミタマ轉じてマナタマとなり、續いてマガタマとなり、勾璣或は曲玉なる文字を之に宛て、遂に曲れる玉を造つて、之を表徴することにもなつた。尤も靈魂の珠が運動するに當つては、曲玉を以て表徴さるゝ如き形相となるらしいから、曲玉の形も、強ち

據る所がない譯ではない。

「フキシ」とは招きなるべく、即ち此の眞魂を招いてといふ意味に解せられる。

珠に關する説明は、以上略と盡くし得たと思ふが、此の珠が皇位を繼承されるので、それは即ち 天皇御自身の御性命を表徴するものである。

次に鏡は、天照大御神の御魂として、いつきまつるものであるから、鏡が天照大御神の御魂——御心を表徴することと言ふ迄もない。

次に劍は、須佐之男命、地球性命の表徴であることは、前章述ぶる通りで、更めて説く必要などはあるまい。

以上の如くして、三種の神器たる珠は、天照大御神より繼承されたる、天皇御自身の御性命の表徴。鏡は天照大御神御魂の表徴。劍は須佐之男命、地球性命の表徴となる。我國體の尊貴なるは實に生物の生命を總統せらるゝところに、その淵源を發し、此の實在の表徴たる三種神器が、萬世不易の皇謨となる所以である。

尙之につき、補足的説明を加へる。第六章に於て、天忍穗耳命は、天照大御神の「五百津美須麻流ノ珠」を、須佐之男命が請はれて成りませる性命なるを以て、珠が主にして劍は従なのであ

る。「五百津美須麻流珠」とは、あらゆる萬物の生命を總統するところの性命といふことである。凡そ世に生命ほど貴きはなく、しかも萬生を總統せらるゝ御性命たるに於ては、その尊貴なること、他に比すべき何物もないのである。而して此の御性命は、邇邇藝命より、歷代天皇に傳はるところのものであつて、其の御本質には、天と地とを兼具せられ、天に則つては鏡、地に即しては劍である。劍は又武を表徴するが、神の世界ならばいざ知らず、地上の生物を統御せんが爲には、武にあらざれば、到底目的を達し得られるものでないことは、われ／＼の眼前に横はる事實である。珠の温なるに加へて、劍が三種神器の一たる所以である。而して又尙武の國たる所以でもある。しかもそれは鏡の照らすが如く、残る限なく、天地の大道、自然の法則に則とるのであるから、之を中外に施して悖るが如きことは、有り得ないのである。

邇邇藝命は、天照大御神の命により天降りしましたこと、上述の通りであるが、天降りませる後の事につき、古事記には次の通り記してある。

是ニ、天津日高日子番能邇邇藝命、カササノヒササキ竺沙御前ニ、カホコキヲトメ麗美人ノ遇ヘルニ、誰ガ女ゾト、問ヒタマヒキ。答へ白シタマハク、大山津見神ノ女、名ハ神阿多津比賣、

亦ノ名ハ、木花之佐久夜毘賣ト、謂シタマヒキ。又、汝ノ兄弟有リヤト、問ヒ
タマヘバ、我が姉、石長比賣在リト、答白シタマヒキ。爾、詔リタマハク、吾
汝ニ、目クハヒセムト欲フハ奈何ニト、ノリタマヘバ、僕ハ得白サジ、僕ガ父
大山津見神ゾ、白サムト、白シタマヒキ。故、其ノ父大山津見神ニ、乞ヒニ遣
シケル時ニ、大ク歡喜ビテ、其ノ姉、石長比賣ヲ副ヘテ、百取机代ノ物ヲ持タ
シメテ、奉出シキ。故、爾ニ、其ノ姉ハ、甚凶醜キニ因リテ、見畏ミテ、返
シ送リタマヒテ、唯、其ノ弟、木花之佐久夜毘賣ヲノミ留メテ、一宿婚ハシツ
爾ニ、大山津見神、石長比賣ヲ返シタマヘルニ因リテ、太ク耻ヂテ、白シ送リ
タマヒケル言ハ、我が女、二並ベテ立奉レル由ハ、石長比賣ヲ使ハシテバ、天
神ノ御子ノ命ハ、雪零リ風吹ケドモ、恒ヘナル石ノ如ク、常堅不動ニ坐シマセ
亦、木花之佐久夜毘賣ヲ使ハシテバ、木花ノ榮エル如、榮エマセト、ウケヒテ
貢進リキ。此カルニ、石長比賣ヲ返シテ、木花之佐久夜毘賣、獨リ留メタマヒ
ツレバ、天神御子の御壽ハ、木花ノ阿摩比ノミマシナムト、マヲシタマヒキ。

是ヲ以チテ、今ニ至ルマテ、天皇命等ノ御命、長クハマサルナリ。

右の記載が例の擬人法によること言ふ迄もなく、「石長比賣」とは鑛物組織、「木花之佐久夜毘賣」とは「木花ノ榮エル如」とあるにより、生物組織といふことを語るものであることを知る。若し直ちに鑛物組織、生物組織といふことを避けんとするならば、それ等組織となるべき素質——法則といつたものによつて組成されるからである。が、爰では簡単に組織といふことにして置く。そしてそれ等が何れも山——陸地の所産であるところから、之を大山津見神の女——所産であるといふ。生命を寄托するに、鑛物組織を取れば恒久なることを得るが、それでは繁榮を期し難く、又生物組織を取れば繁榮はするが、その生命の寄托に限りがある。而して之を併有することを得ないとすれば、八尺勾魂として彌々榮えまさんが爲に、生物組織を取るより外はない。是れ石長比賣の凶醜を退けて、獨り木花之佐久夜毘賣を留むる所以である。石長比賣を姉といふは、鑛物組織が、生物組織に先立つからである。

「阿麻比」は恐らく間なるべく、即ち木の花の榮ゆる間の、短かき御壽といふ如き意味。或はアマヒのアを接頭語として、マは間、ヒは隙のヒとも解せられる。何れにしてもあひだといふ如き

意味である。

第二章に於て、組合せの四分類なるものを擧げて置いたが、その中に生命と無機化合物との組合せを載せなかつたのは、それは所謂生物とはならぬからである。此の記載を見ても亦其の通りになつて居る。

尙此の記載で窺はれることは、子女が勝手に婚約などをすべきでなく、必ず父の命に従ふべきであることが示され居ることである。是れも日本の遵則であらねばならぬ。

右の記載に續いて、可なり不思議な、寧ろ怪奇の感さへ催すところの記載があるから、之にも或る程度の解釋を施さねばならぬであらう。其の記載とは次の如きものである。

爾、詔リタマハク、佐久夜毘賣、一宿ニヤ妊メル。是レ我子ニアラジ、必ズ國神ノ子ニコソアラメト、ノリタマヘバ、吾ガ妊メル子、若シ國神ノ子ナラムニハ、産ムコト幸カラジ、若シ天神ノ御子ニマサバ、幸カラムトマヲシテ、即チ戸無キ八尋殿ヲ作りテ、其人殿内ニ入りマシテ、土モテ塗リ塞ギテ、産マス時ニ方リテ、其ノ殿ニ、火ヲ著ケテナモ産マシケル。故、其ノ火ノ盛リニ焼ユル

時ニ、生レマセル子ノ名ハ、ホテリノミコト火照命。次ニ生レマセル子ノ名ハ、ホスセリノミコト火須勢理命。次ニ生レマセル子ノ御名ハ、ホフアリノミコト火遠理命。亦ノ名ハ、アマツヒカヒコ天津日高日子穗穗手見命。

此の記載は、普通常識を以てしては、解釋恐らくは困難である。由つて之には心靈學的考察を用ゐねばならぬことになる。が、之に先だち、御子の三つの名なるものは、擬人法によつて、或る現象を三段階に分てる序述であることの承認を要する。即ち火照とは火が點ぜられて、或り輝くといふ第一段階を示し、須勢理とは進むことであるから、燃燒が熾んに促進さるといふ第二段階を示し、火遠理は火折り、火終りで、燃燒終末の第三段階を示してゐるといふことである。

ところで或る現象とは何をいふか？ それは外ではなく、心靈學上、靈の物質化と呼べるゝところの現象である。之については、第三章に於て述べたことであるが、それは無形の靈が、假りに物質的の要素を取入れて、有形のものを一時形づくる現象をいふ。然るに其の現象をその儘固定することの困難なる爲、神の力を以てするも、猶且つ失敗を免れなかつたものである。水蛭子と淡島とがそれである。が、失敗の後、遂に成就されるに至つたことは、記録によつて明らかである。但し此の件について詳述することは、稍々本問題と遊離するを以て、靈の物質化現象なる

ものも起り、又其の現象を固定化するの可能なることをも、茲に暫らく承認されんことを望むものである。

さて是れより前掲記載の解明に移ることにしよう。

「戸無キ八尋殿ヲ作リテ、其ノ殿内ニ入りマシテ、土モテ塗り塞ギテ」とあることを先づ検討しよう。凡そ心靈現象を起すには、或る室を密閉して暗黒となし、外部との交通を遮断することを要するのである。「戸」は出入の爲必要であるが、出入を許さぬならば「戸無シ」でよい。爰に相方の一致點を見出し得る。「火ヲ著ケテ」とある火は靈であるから、生物組織に靈を賦加、換言すれば之を靈化してといふことである。然るときは爰では、靈の物質化といふよりは、物質の靈化といふ方當るやうである。例へば細胞の如きは、分析的に單なる元素・化合物に過ぎぬが、之を靈化すれば、生物組織の細胞となるが如きものである。しかし乍らその何れの名を取らうとも、實質的に異なるものではない。

「國神」とは物質を有する神をいふから、差當り人間といふことになる。「産ムコト幸カラジ」とは、人間にはうまく出来ないといふ如き意味。従つて「天神」たる神靈のみが能くするところであるといふ。是れも無論其の通りで、人間的仕事では物質化も靈化も出来ない。それは其の方法

を知り得ないからである。故に之を神祕といふより外はないのである。そして此の神祕は、終生人間の解き得ない謎であるのかも知れない。

「一宿ニヤ妊メル」とは一夜にして出来る。即ち直ちに出来るといふ如き意味。

然るに他方に於て、別の方法を以て靈の物質化——物質の靈化が行はれつゝあると見るべき事柄がある。進化論者が遺傳の法則を論ずるに當り、ゲンなるものを認めて居る。そしてゲンは所謂物質ではないといふ。此の事は靈の存在を認めるものといふべく、此のゲンなる靈が核心となつて、其の周圍に物質を誘體（誘體の事は附録に述べて在る。）し、茲に胎兒の發芽となる。即ち火照である。此の火照益々進展を告ぐるは火須勢理で、胎兒の發育となり、火須勢理其の功を終れば火遠理となつて、胎兒の分娩となる。で、それ迄は母胎といふ、嚴重な密室中に行はれるのである。要するに原則なるものは、さう幾つもあるので無く、唯原則の現れ方が或は一夜にして成り、或は十ヶ月もの日子を要するといふ、相違があるのみである。それ故に原則の把握といふことが、是非共必要なのである。

邇邇藝命は前に述ぶるが如く、和魂とならせられたのである。和魂とならせられたといふことは、荒魂とならせらるべき準備であること申す迄もない。そして久士布流多氣にお降りになり、